GAME NOVELS

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES
小さな村の年代記

著者／梅村 崇　イラスト／鳥居大介

SQUARE ENIX

Story

辺境の村、ティパは４種族の人間が手を取り合って暮らす小さな集落。村のクリスタルを清めるミルラの雫を持ち帰るために、クリスタルキャラバンは優れた若者の中から選ばれる。思いがけず、メンバーに指名されたクリム。そして初めて目にする瘴気が漂い魔物の棲む真実の世界。戸惑いと恐怖の中、クリスタルの輝きを追しるべに、若いクリスタルキャラバンの物語が始まった。

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES

GAME NOVELS

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES
小さな村の年代記

著者／梅村 崇　　イラスト／鳥居大介

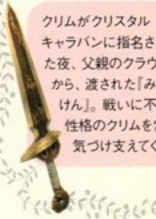
ハーディ

穏やかな性格の種族、クラヴァットにあって、ハーディはちょっと変わった少年。普段はぼぉっとしているのに、気になることがあると、周りが見えなくなってしまうほどのめり込む。キャラバンの旅を通して、クリムとは違う目で世界を見ている。

ティパの村に伝わるクリスタルキャラバンの年代記（クリスタルクロニクル）。読書家のハーディにとっては最高の旅の友？

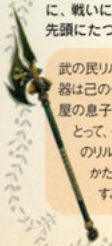
クリム

穏やかで優しい性格が特徴の種族、クラヴァット。その中にあっても、輪をかけてのんびり屋の少年クリムは、粉引きの家の息子。風車小屋で父親を手伝いながら、幼なじみのノアの家で、麦畑の仕事も手伝っている。



クリムがクリスタルキャラバンに指名された夜、父親のクラウスから、渡された『みがるなけん』。戦いに不向きな性格のクリムを常に勇気づけ支えてくれる。

リッド

遠い昔、大陸の覇者としてその武名を轟かせた種族、リルティ。血の気が多く、戦いを好む性格のリッドは典型的なリルティで、キャラバンの中でも中心的な存在であり、自分の力を試すために、戦いにおいては常に先頭にたつ。

武の民リルティの武器は己の分身。鍛冶屋の息子であるリッドにとって、その思いは他のリルティよりも強く、かた時も槍を手放すことはない。

サムルンティ

智の探求に生涯を賭す博学の種族、ユーク。特に魔法に関する知識は他の種族に抜きんでている。サムルンティは魔法に深く興味を抱き、キャラバンの旅を通して魔法についての知識を更に深めていくことになる。

ティパの村の中で育ったクリムたちにとって、外の世界は初めて見るものばかり。魔法にいたっては、話に聞いた程度。サムルンティの知識だけが頼りだった。

ヘルナド

ティパの村のクラヴァットの若きリーダー。キャラバンの旅で負傷し、やっとの思いで村に帰り着いた。しかし他のメンバーの傷は深く旅を続けられない。そこでヘルナドは若い世代への引き継ぎ役を担い、旅に同行しイロハを教え込む。

ヘルナドが暇を見つけてはかき鳴らす弦楽器。本人はけっこうな腕前だと言うのだが、キャラバンでの負傷が原因なのか…評判は芳しくない。

イ・リュ

盗賊を祖先とする種族、セルキー。自己中心的な物の考えをする彼らは、他の種族からは煙たがられている。イ・リュはお天気やで口が悪く、典型的なセルキーの少女。キャラバンの台風の目だ。この旅もお宝探しと考えているふしがある。

イ・リュの旅の目的は"お宝"。宝箱のにおいを嗅ぎつけると、たとえ火の中、水の中、瘴気の中(?)。いちもくさんに駆け出します。

モーグリ

荷車を引くババオバマスと同様にモーグリは、瘴気の中でも自由に活動できる不思議な生物。その特徴を活かして、郵便配達業をしているものもいるが、本当は手紙を渡された人の嬉しそうな顔と、時々もらえるおいしい食べ物が目当てなのかも…

世界には沢山の秘密と不思議がある。クリスタル、ミルラの樹、雫、魔法などなど。でも一番身近な不思議といえば、このモーグリ。

ノア

ティパの村のクラヴァットの少女。クリムの幼なじみで臆病なくらい大人しい女の子。弟のアイランと一緒に、家の畑仕事を手伝っている。キャラバンに選ばれたクリムに負けないようにと、麦畑の仕事に力を入れる。

キャラバンの旅に出かけたクリムから届く手紙に、一喜一憂するノア。そんな様子を見た、弟のアイランにからかわれて、おむずかり。

GAME NOVELS

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES
小さな村の年代記

著者
梅村 崇

カバーイラスト／口絵／挿絵
鳥居 大介

デザイン
エストール

GAME NOVELS

FINAL FANTASY
CRYSTAL CHRONICLES
小さな村の年代記

プロローグ……004
第一章　調和の村……006
第二章　聖樹の雫……044
第三章　瘴気の村……085
第四章　災厄の兆し……125
第五章　永遠の力……163
第六章　それぞれの誓い……202
第七章　二人の見るもの……243
第八章　暗闇の魔物……280
第九章　クリスタルの輝き……319
エピローグ……345

プロローグ

遥か昔、この世は楽園だった。
神が住まう山――ヴェレンジェ山――の頂に輝く大クリスタルの光に包まれた世界には、何一つ災厄は存在しない。
人と総称される四つの民――クラヴァット、リルティ、ユーク、セルキー――は、それ以前に存在した戦乱や差別の時代を乗り越え、緑あふれる大地の上で互いに手を取りあい生きる道を選んだ。

だが、それは遠い遠い昔のこと――

今、世界は瘴気の中にあった。
瘴気は生命を拒む。一度触れれば肉を蝕まれ呼吸を侵され、ついには死に至る。
猛烈な毒気に被い尽くされた世界の中で人々が生きていけるのは、やはりクリスタルの加護があったからである。
瘴気の出現と共に神の山の大クリスタルは砕け、その欠片は世界中に飛び散った。
砕けてもなおクリスタルの力は失われなかったのである。その輝きにより、わずかな地を

瘴気より護っていた。

クリスタルの輝きに護られた聖域と呼ばれるわずかな地に人々は集落を作り、歴史を積み重ねていった。

限られた土地に押しこめられ集落同士の交流もままならない不自由な生活ではあったが、それでも人々は強く生きつづけていた。

だが、そのクリスタルの力も永遠ではない。

瘴気に晒されつづけるクリスタルの輝きは消耗し、しだいに鈍っていく。

聖なる力を保つため、人々はクリスタルを清めなければならなかった。

クリスタルを清める水——聖樹ミルラの樹が落とす雫。

その雫を求め世界を旅をする者たちがいる。彼らはクリスタルキャラバンと呼ばれた。

故郷と人々の命を護るクリスタルキャラバンを連綿と受け継ぎ、人々は瘴気に包まれた世界の中で、今も力強く生きている。

第一章 調和の村

1

ぎ……ぎ……ぎぎ……ぎ……

耳に馴染んだ音を立て、風車はゆっくりと回っている。

その音を傍らに聞きながら、クリムは寝そべり空を眺めていた。

白くくすんだ空を灰色の雲が流れていく。

村一番の高さを持つ風車小屋の上から見る空は、とても近く感じられた。

すぐそこにクリスタルの護る聖域と瘴気との境界がある。優しく顔を撫でていく微風と共に、瘴気が流れていくのが見える気がした。

「あ、やっぱりここだった」

不意に聞こえた声に、クリムは弾かれるように躰を起こし振り返った。

屋根にあがってくる人の姿があった。最初に目に入ったのは外向きに跳ねた癖のある金色の髪。それから赤みがかった茶色の優しい瞳と視線がぶつかる。見慣れたクラヴァットの少年の顔がそこにあった。

「あ、ハーディ。どうしたの？」

「面白いものを見つけたんだよ」

ハーディは屋根の上に登りながらそういった。彼の右腕に大きな本が抱えられているのが見える。きっと、家の書庫から持ちだしてきたものだろう。

ハーディは本を読むのが好きだった。家にたくさんの本があるのも理由なのだろうが、とにかくいつも本を読んでいる。中でも、彼が好んだのが古い時代に書かれた伝説やおとぎ話だった。

――この間読んでたのは、クリスタルキャラバンの始まりの話だったっけ。

クリムは、つい先日ハーディといっしょに読んだ本のことを思いだした。

クリスタルが瘴気の力に輝きを鈍らせた時に、カーバンクルとかいう生き物がクリスタルケージを持って村々を訪れ、「これにミルラの樹からこぼれる雫を集め、その雫でクリスタルを清めろ」と教えたという内容だった。

その本には村を訪れたカーバンクルの姿が描かれていた。全身を柔らかそうな毛に被われ、翼に似た腕と短い脚を持つずんぐりとした姿だ。鳥にも獣にも亜人にも見えた。

「これって、なんなんだろう」

「妖精……なんじゃないかな。クリスタルの妖精」

クリムの問いかけに、ハーディは首をかしげながら答えた。

「ほら、この触覚の先にも小さなクリスタルみたいなのもあるしさ」

確かに、彼のいうとおり絵の中のカーバンクルの頭の先からは二本の触覚らしきものが伸

びていて、その先端に巻きつけられるようにして小さな輝石がまばゆい光を放っていた。
「また、おとぎ話？」
本を持つ彼の姿にクリムの顔は自然とほころんだ。
「今日はね、ちょっと違うんだ」
ハーディは、屋根の上を這うように風車の羽の方へと進んでいった。羽が影を落とす場所に腰をおろし、いたずらっぽく笑って手招きをした。
「なんだよ、気もち悪いなあ」
「まあ、いいからこれ見てよ」
訝りのまじった苦笑でクリムが近づくと、ハーディは手にした本を広げた。
ひどく古びた感じの本だった。紙は全体的に黄ばみ、虫に喰われたのだろう穴や裂け目があちこちにあった。文字もところどころ掠れたり滲んだりしている。
「えっと……あ、あったあった。ほら、ここだよここ」
ページをめくる手を止め、ハーディはクリムに顔を向けた。
促されるままにクリムは、本に目を落とした。

そして　大いなる胸に抱かれし花は輝き
聖なる光に包まれるのを待つ

ハーディが指したページには、その短い文章だけが記されていた。
「何これ？」
困惑顔で尋ねたクリムに、ハーディは満足そうに頷いた。
「意味がわからないだろ」
「なんだよそれ」
「ここには、カーバンクルが三度目に訪れた時に残した詩だって書かれてるけどね」
「なんだ。じゃあ、やっぱりおとぎ話なんじゃない」
クリムは笑顔を取り戻した。
「でもさ。おとぎ話にしては、わけがわかんないだろ」
クリムは顔をしかめながら頷いた。
「だから、後になっても写されなかったんだろうと思うんだ。他の本には、こんな話書かれてないもの」
ある程度時代を経て本が古くなったら物語は新しい本に書き写されるのだと、前にハーディは語っていた。そうやって物語は受け継がれるのだと。けれど、この物語は忘れ去られようとしていたのだ。
「こんな古い本が残ってたなんてことが奇跡みたいなもんだよ」
「それでそれで、この話はどういう意味なの？」
クリムは尋ねた。

おとぎ話などの物語について話す時、ハーディはいつもそれが書かれた意味について考える。キャラバンの始まりの話も、クリスタルの神秘性とキャラバンの重要性を子どもに教えるためのものだといっていた。

だからきっと、クリスタルの妖精などといってはいるもののカーバンクルの存在なんてハーディは信じていないんじゃないかとクリムは思っていた。

「そういう詩が伝えられたっていう話だよ。それしか書かれてない」

「……じゃあ、この詩に意味があるの？」

「さあ？」

ハーディは首をかしげながら笑っていた。

「でも、面白いだろ」

「よくわかんないよ」

「だって、変な話に変な詩だよ。すっごく不思議だろ。いろいろ考えたくなるじゃない」

「そうかなあ……」

クリムは肩をすくめた。さすがに今回の話には、ちょっとついていけそうにない。

「昔の、お話を作ろうとした人が飽きちゃって途中までしかないとか、それくらいのことなんじゃないのかな？」

「かもしれないね。それも可能性の一つだよ」

クリムの言葉に頷きながら、ハーディは詩の書かれた古びた本を笑顔で眺めていた。その

顔は、いつもおとぎ話について話す時よりもずっと楽しそうだった。

クリムがあまり興味を示さなかったからだろうか、ハーディはそれ以上話をつづけなかった。本を睨むように見つめ、ぶつぶつと呟きながら首をかしげたりしている。

不意に、目の前を一羽の鳥が通り過ぎていった。翼と尾の長い白い小さな鳥が。

二人の間を抜け大きく旋回する鳥をクリムは目で追っていた。

瘴気の中では生きられないことを鳥も知っている。だから、聖域の中を低く飛んでいく。

クリムの視線も鳥の後を追い、村を巡った。

彼らの住むティパという村は、ごく小さな村だ。村はずれの岬の高台に建つ風車小屋からはその全てが見渡せた。

村の中央にはクリスタルが鎮座する広場があり、それを取り囲むようにして木造の家が数十軒並んでいる。その他には牛飼いの小さな牧場と畑があるばかり。その向こうに拡がる草原と村のある半島を囲む海までがクリスタルの聖域だ。それを越えると死に至る毒の大気——瘴気に包まれた世界になる。

大いに実った一面の麦が風にそよいでいるのが見えた。

——そういえば、そろそろ刈り入れを始めるんだってノアがいってたっけ。

陽光を黄金色に反射する麦畑を眺めながら、クリムは幼なじみの少女の顔を思い浮かべた。

そうして収穫された麦の実が、この風車小屋で挽かれて小麦粉になる。その小麦粉を袋につめて売ったり、パンなんかに加工して売ったりすることが、クリムの家の仕事だ。

だからクリムの家もノアの家も、これからしばらくが特に忙しい時期になる。
とはいえ、クリムの家で忙しく働くのはもっぱら風車とクリムの父――クラウスだ。それに比べノアのところは一家総出で収穫作業にあたる。それでも人手は足りないくらいだ。
そうした事情もあって、毎年この時期にはノアのところに行って収穫を手伝ってくるようにクリムは母から命じられる。
「よし」
クリムは勢いづけて立ちあがった。
「えっ？　なに、どうしたの」
突然声を発して立ちあがったクリムに驚いたのだろう、今まで黙々と本を読んでいたハーディが弾かれたように顔をあげた。
「あ、ごめん」
「いいんだけど。どうしたの、突然」
「ノアんとこの手伝い。母さんに呼ばれる頃だなって思ってさ」
「ああ、もうそんな時期なんだ」
頷きながら、ハーディも村の方へと顔を向けた。
「……でも、まだキャラバン帰ってきてないよね」
といいながらハーディは表情を曇らせた。
「何かあったのかな」

「少し遠くに行ってるだけじゃないかな。きっと、もうすぐ帰ってくるよ」
ゆっくりとそう答えながら、クリムは村の入口へと視線を移した。
村のはずれを流れる小さな川に架かる橋がある。その先には村の外へつづく唯一の道が伸びている。
ずんぐりと丸い紺色の躰と短く太い四本の肢を持ち、背中に白いたてがみを垂れさげたパパオパマス——通称パパオ——と呼ばれる動物に引かれる荷車に乗り、キャラバンはこの道を帰ってくることになる。
「ん？」
道の遥か遠方に小さな紺色の塊が動くのが見えた。遠くおぼろげだが、まさにパパオだ。
「あれ、そうじゃないかな」
「何が？」
「キャラバンだよ。ほら、あそこ」
村に向かって来るキャラバンらしき影を指さしてクリムはいった。
「あ……うん。そう、みたいだね」
目を細めクリムの指の先を見つめていたハーディは、そういうと首をかしげた。
「でも、なんかおかしくない？」
そういわれ、クリムもパパオの様子を睨むように凝視した。
パパオの姿は、丸く太い紺色の躰とその上に垂れ下がるように生えた白いたてがみがどう

にか判別できる距離まで近づいてきていた。太く短い四肢はまだ見えないのではっきりとはわからないのだが、パパオの足取りは確かに少しおかしいように見えた。普段よりも遅いし、右に左にとひどくふらふらしている。荷車の御者台にも誰の姿も見当たらない。

パパオを見つめているうちに、クリムの胸にいいようのない不安が広がっていった。

「行ってみよう」

短くそういうと、隣で驚いた顔をしたハーディには目もくれずクリムは駆けだしていた。

円錐形の風車小屋の屋根からは、壁に備えられた十段ばかりのはしごを伝っておりることになる。はしごの下には小さな足場があり、そこに中に入るための扉があった。

クリムは屋根をまっすぐに横切り、はしごの下の足場に飛ぶようにおりた。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

慌てて追いかけてくるハーディにかまわず、クリムは風車小屋の中に飛びこむ。

風車小屋の外壁に沿って作られた下までつづく緩やかな螺旋状の坂をもどかしく感じながら、クリムは必死に走った。

「どうした。そんなに急いで」

小屋の下まで到達したところで父クラウスに声をかけられた。クラウスは風車の回す巨大な石臼の調整をしていた手を止め、怪訝な顔でクリムを見ていた。

「キャラバンが、帰って、くるんだ」

荒い呼吸まじりにクリムは答えた。

「それで、出迎えってわけか。ちょっと待ってろ。ここかたづけちまって、俺もいっしょに行くから」
「じゃなくて。なんか、おかしいから」
「おかしい？　何が」
「何って、よくわかんないけど、なんか、とにかくおかしいんだよ」
苛立ちと焦りが駆け巡り、クリムの全身は小刻みに震えていた。
「ああ、もう。とにかくぼくは行ってくるから。父さんは村のみんな集めておいて」
「あ、おい。行くって?!」
父が呼び止めるのにも答えず、肩で息をしているハーディにも声をかけず、クリムは再び駆けだした。
「あ、クリム。あんたノアちゃんとこの手伝いに……」
「あとで！」
小屋の外に飛びだしたところでかけられた母の言葉に短く返し、クリムは走りつづけた。
岬から村の中心に向かう坂をくだり、中央の広場をクリスタルを回りこむように横切り、そのままっすぐ村の外につづく道へと。
クリムは村の出口にある橋の上で足を止めた。
目の前にクリスタルの聖域の果てがある。その向こうは瘴気渦巻く世界だ。
遥か前方に左右に大きく躰をふらつかせながら荷車を引くパパオの姿が見える。パパオの

動きにあわせ、クリスタルケージの聖域もゆらりゆらりと揺れている。
「やっぱり、おかしい、ね」
いつの間に追いついたのか、両膝に手をつき躰全体で呼吸をしているハーディが隣にいた。
「うん」
パパオを見据えたままクリムは答えた。
「みんな、どうしちゃったんだろう」
「うん」
「どうする、クリム」
「うん……」
顔をしかめ頷いたクリムの見ている前で、パパオは左へ左へと道をはずれはじめた。
「いけないっ」
道の端の草むらにパパオが片足を踏み入れるのを目にしたのと同時に、クリムの足はキャラバンの荷車に向かって駆けだしていた。
「待って、クリム」
ハーディも後につづく。
一歩踏みだした瞬間に空気が重さを増した。
一帯を包む瘴気が躰にまとわりつき、全身の皮膚がぴりぴりと痛む。

瘴気を吸いこむと肺が焼ける。以前聞かされた言葉が脳裡をよぎり、クリムは慌てて唇を強く噛み鼻と口を手で抑えた。

走りつづけて荒くなった息が胸の中で暴れ、クリムはむせた。息苦しさに足が鈍る。思わず吸いこんだ空気に喉が痛み、膝が崩れ地面に手をついた。

うずくまるように丸くなっていた背中を、隣を走っていたハーディに叩かれた。

「急ごう」

苦しそうに歪んだ顔に小さな笑みを浮かべ、ハーディがいった。

顔をあげるとそこに、いつもの茫洋とした瞳からは想像しがたい鋭い目つきで前方を睨んでいるハーディの顔があった。

クリムは力強く頷き、立ちあがった。荷車を引くパパオを睨み据え、それに向かって走ることだけに神経を集中させる。

針を飲みこんだかのような痛みが胸の奥を刺した。皮膚がちりちりちりちりと悲鳴をあげる。

クリムはただ一心にパパオに向かって走った。

なかなか近づいてこないパパオの姿に焦りと苛立ちを感じながらひたすらに走った。

不意に周囲の空気からまとわりつく重さが消えた。荷車に積まれたクリスタルケージの聖域に飛びこんだのだ。

今まで全身を抑えつけていた感覚が突然失せ、クリムはまろぶようにパパオに倒れこんだ。彼に驚いたのか、パパオが足を止める。

ハーディもパパオの躰に激突するように倒れこんだ。
二人は荒い息を整えるように数度深い呼吸をし、互いに頷きあって荷車の方へと急いだ。
御者台から幌で被われた荷台の中に潜りこむ。
中の様子を目にしたクリムとハーディはそろって絶句した。
薄暗い荷車の中には、四人の人間が横たわっていた。その四人が、皆一様に全身に無数の傷を負い苦悶の表情で小さな呻きをもらしている。
クラヴァットのヘルナド。リルティのミモリ＝クルト。ユークのフロウリッタ。セルキーのマ・イト。間違いなくティパの村のキャラバンたちだった。
「な……」
震える唇で、クリムはようやくそれだけ発した。
その言葉になっていない短い一言が耳に届いたためだろう、横たわっていた四人のうちの一人が顔をあげた。ヘルナドだ。
ヘルナドは苦しげな顔でクリムたちを見るとわずかに目を見開いた。
「村に……ついたの……か？」
掠れた声で問いかけられ、クリムとハーディは大きく首を横に振った。
「あ、あともう少しだけど」
「じゃ……おまえたち……なんで……ここ……」
怪訝そうに眉をしかめたヘルナドは、激しく咳こみ首を落とした。

「と、とにかく村に。急がないと」
半ば茫然とヘルナドたちを見つめたまま、ハーディがいった。彼の手はクリムの服の袖を強く握りしめていた。
「う、うん。そうだね」
頷いたクリムは唾を一つ飲みこみ、幌の外に出た。
御者台に座り手綱を握り、パパオの丸い背中を見つめる。
「頼むよ、パパオ。全力疾走だ」
クリムが手綱を強く打つと、パパオは小さく一度体を震わせ猛然と駆けだした。
逸る気持ちを抑えられず、クリムは何度も何度も手綱を振るった。
村の入口が近づいてくる。大人たちが集まっているのが見えてきた。クリムの言葉に従ってクラウスが集めてくれたのだろう。
橋を渡ったところでクリムは手綱を強く引いた。暴れるように二度三度躰を大きく左右に揺らし、パパオは止まった。
「この馬鹿が。無茶なことして」
クラウスが怒りの形相で、クリムを御者台から乱暴に引っぱりおろした。
「そんなことより、ヘルナドたちを」
「あぁ？」
「ひどい怪我なんだよ。急がないと」

声を荒らげ発したクリムの言葉に、大人たちが一瞬固まった。
すぐに中の一人――鍛冶屋の親爺、リルティのザット＝コイルだった――が御者台に飛び乗った。
リルティは四つの種族の中で一番小さく、ザットは飛びあがらなければ御者台には届かなかった。
幌の幕を捲りあげ中を覗きこんだ瞬間、ザットの顔が険しくなった。
「なっ。こりゃ、ひでえ。おい、みんな手を貸してくれ！」
ザットの言葉に大人たちはいっせいに荷車に駆け寄った。
辺りは一気に騒然とした。
キャラバンのメンバーたちが荷車から運びだされていく。
ヘルナドの母が半狂乱で泣き叫んでいる。
ミモリの父と母が何度も何度も娘の名前を呼んでいる。
フロウリッタの父がおろおろと荷車の周りを歩き回っている。
「あったぞ。大丈夫だ。雫もちゃんと溜まってる」
荷車の中からクリスタルケージを運びだしながら、誰かが歓喜の声をあげた。
「よかったよ……」
「さすがはヘルナドたちだ。やることはしっかりやってくれる」
安堵と賞賛の言葉があちこちから飛び交った。

茫然と立ち尽くしていたクリムの肩をノアの母親が叩いた。
「ほら、邪魔になるからあんた達はこっち」
「え？」
「あたしたちはこっちで手いっぱいだから、畑の方をお願い。今、ノア一人だけになっちゃってるから」
確かにこの場にいても邪魔になるだけだろう。クリムは頷き、ハーディと共に畑に向かった。

＊

その年のクリスタルを清める儀式――水かけ祭――は、例年と異なり簡素なものとなった。中心となるべきキャラバンのメンバーたちが未だ回復せず参加できないため、儀式は必要最低限のものであったし、儀式後の宴も開かれなかった。

2

水かけ祭から二日が過ぎた。
あの日の騒ぎはすでに収まり、村はいつもどおりの平穏を取り戻していた。

ただ、キャラバンメンバー四人はまだ起きあがれるまでに回復していないのだろう、表に姿を現していなかった。

「みんな、だいじょうぶかな」

「え？」

頭の上でしたノアの声に、クリムは麦穂を刈る手を止め立ちあがった。

麦畑の真ん中に立ったノアは、広場近くに建つ村長の家を心配そうに眺めていた。

村長の家には、村議を開いたりするための広い部屋がある。キャラバンメンバーの四人はその部屋に寝かされていた。ユークの医者が中心になり、村の女たち全員が交代でつきっきりの看護をしている。

「気にしてもしょうがないよ」

クリムの言葉にノアは驚いたように振り返った。彼女のとがめるような眼差しがクリムに向けられる。

「クリムは心配じゃないの」

「そりゃ、心配だよ。でも、母さんたちが一生懸命看護してるんだしさ。ここでぼくたちが気を揉んでてもしかたないじゃない」

「そうかもしれないけど、でも」

「おばさんがヘルナドたちの手当てに集中できるように、ぼくたちはぼくたちのできることをしなくっちゃ。だろ」

そういってクリムが笑いかけると、ノアはわずかに視線を落とし畑を見回した。
一面の麦穂の上を渡る風に撫でられ、彼女の栗色の髪が柔らかく踊る。
「うん……そうだね」
「そうそう。刈り入れなきゃいけない麦は、まだまだたくさんあるんだし」
「うん。がんばろ」
彼女の笑顔にクリムが頷き返すと、ノアは屈みこみ麦穂の中に姿を消した。
それからしばらくは、二人とも黙々と麦刈りをしていた。ノアはやはりキャラバンメンバーのことが気になるのだろう、時おり手を休めては村長の家の方に心配そうな目を向けていた。
低い姿勢で麦を刈りつづけていたので腰が痛くなってきた。クリムは手を休めて立ちあがり、大きく伸びをした。腰を伸ばしながらひねっていたクリムの目に、畑に向かって歩いてくるハーディの姿が映った。
「やあ、精がでるね」
ハーディの言葉に、クリムは流れ落ちてきた汗を手でぬぐいながら苦笑を返した。
「あ、ハーディ。みんなは。キャラバンの人たちは、どうなったの」
麦穂の間から顔をのぞかせたノアが、息をはずませながら柵の方へ駆け寄っていった。
「もう大丈夫だと思うよ。昨日の夜に一番の山は越えたみたい」
ハーディは笑顔で頷いた。
「そう。よかった」

本当に安心したといった感じで、ノアは胸に手を当て大きなため息をついた。
「騒然とした感じじゃなくなったしね。今は、みんなで話しあいをしてる」
「話しあい？　じゃあ、お母さんといっしょにお父さんも村長さんのところにいったのは、そのためだったのかな」
「うん。そうだと思うよ。村中の大人たちがほとんど集まってたから」
「でも、そんなに集まって何を話してるんだろ？」
クリムは首をかしげた。
「次のキャラバンのことじゃないかな。いくら大丈夫だっていっても大怪我を負ってるんだし、しばらくは旅に出られないと思うし」
「あ、そっか」
「じゃあ、新しいキャラバンを組むのかな」
ノアが心配そうにそう尋ねた。
「そうなるだろうね」
「わたし、やだな」
「何が？」
「だって、キャラバンって魔物と戦わなくっちゃいけないんでしょ」
そういったノアは、何かを想像したらしく小さく背中を震わせた。
彼女の様子にクリムは思わず吹きだしてしまった。ハーディも、声を押し殺し笑っている。

「もう、なによ」
ノアは頬を膨らませ、鎌を持った手を振りあげた。
「ちょ、ちょっと危ないって。おちついて、おちついて。ね」
「だって、いきなり笑うんだもん」
不満そうな顔のまま、それでもノアは手をおろした。
「それは、ノアが変なことというからだよ。大丈夫だって、ノアに戦いに行くようにいう人なんて絶対いないから」
「え？　そ、そうかな」
照れたような顔でそういいながら、ノアは安心した様子で頬を緩めた。
「うん」
「でも、今の感じだったら、魔物とだって戦えるんじゃない」
「もうっ」
クリムの冗談に、ノアはまた頬を膨らませ顔を背けた。
「でも、そうか」
不意にまじめな顔をして、ハーディが数度頷いた。
「ヘルナドたちから世代交代するっていうことは、新しいキャラバンに選ばれるのは僕たちの年代からってことになるんだね」
「やっぱり、そうなるよね」

「でも、だからってノアは選ばれたりしないから。リッドとかサムルンティは間違いなく選ばれるだろうけど」

「クラヴァットからは？」

細い眉をわずかにひそめノアがクリムを見つめた。

彼女の言葉にクリムは口をつぐんだ。

ユークばかりが住まうシェラの里や、リルティの王が治め要職につくものがリルティに限られているアルフィタリアなどと異なり、四つの種族が混在して生活するティパの村には、調和を重んじるためキャラバンは全ての種族を含んだ構成をするという風習がある。

今この村に、クリムと同年代のクラヴァットはノアとハーディしかいない。つまり、この三人の中から必ず一人はキャラバンに選ばれることになる。

クリムはちらりとハーディの顔を見た。

きっと、ハーディが選ばれるだろうとクリムは思っていた。彼の知識は智の民と呼ばれるユークのサムルンティにも劣らない。その豊富な知識はキャラバンの旅に大いに役に立つはずだ。

「クリムはどうなの」

「え？　何が」

「キャラバン。どう思う」

「ぼくは……よくわかんないな」

首をかしげながらクリムは素直な思いを口にした。

「村を守るための大事な仕事だと思うんだけど、ぼく自身は旅とか外の世界とか想像したことないからさ。うん、よくわかんない。でも、ハーディはそういうことも考えてたりするでしょ。だから、ハーディが選ばれるのがいいんじゃないかって思うよ」

「そうだよね。わたしも、そう思う」

「そうかなぁ」

ハーディは首をかしげた。その反応に、クリムは思わず目を見開いた。

「旅するのは、いやなの？」

「ううん、そうじゃないよ。村の外の世界には行ってみたいさ。すごく興味を惹かれるよ。でも、僕も魔物と戦うのには不向きだと思うからさ」

そういって、ハーディは自嘲的な笑いを見せた。

「でも……」

クリムが言葉を継ごうとしたとき、ノアの家の扉が開く音がした。三人はいっせいにそちらに顔を向けた。

扉のところには、アイランの姿があった。

「ねーちゃん、おなかすいたぁ」

「はいはい。すぐにお昼作ってあげるからちょっと待ってて」

戸口に立つ幼い弟にそういうと、ノアはその笑顔をクリムたちに向けた。

「わたしたちもお昼休みにしよ。ハーディもいっしょに食べていくでしょ」

「おじゃまじゃなければ」
ハーディがいたずらっぽい笑みを浮かべてそう答えると、何が気に障ったのかノアは頬を膨らませた。
「そういうことというなら、じゃま」
鋭くいい放たれ、ハーディは肩をすくめてクリムを見た。
クリムはよくわからないまま苦笑いを返し、ノアに目をやる。
「じゃ、ぼくは刈った分の麦運んでくるから」
「あ、うん。ありがとう。お願いね」

*

食卓につき、ノアが作ったまんまるコーンとひょうたんいものスープを四人で食べていると、ノアの父と母が帰ってきた。
「ああ、三人ともここにいたのか」
ノアの父は家に入ってくると、食卓の席にどっかと腰をおろした。やはり看護が大変だったのだろう、ひどく疲れた様子だった。
「お父さんたちもお昼食べる？」
席を立ち台所に向かおうとしたノアを彼女の父は手で制した。

「そんなことはいいから、三人ともすぐに広場に行きなさい」
「え？」
「子どもたちは広場に集まるようにっていわれてるんだよ。大急ぎで」
「あ、うん。わかった」
頷いてクリムたちは立ちあがった。
彼らにあわせ、アイランも椅子から飛びおりる。
「あなたはいいのよ、アイラン」
「おれも行く。おれも子どもだもん」
母の言葉にアイランは唇をとがらせながら大きく首を振った。
「な、おれも行っていいだろ」
そういってアイランは、クリムのズボンを掴んだ。
「なんでぼくにいうんだよ」
「だって、ねーちゃんはおこるもん」
そう答えて屈託なく笑うアイランにクリムはため息をこぼした。
「アイランっ」
「ほら、おこった」
「わかったよ。ノアの側でおとなしくしてるんならついてきてもいいよ」
「ちょっと、クリム」

「えー。ねーちゃんのそばかよぉ。クリムのほうがいい」
「じゃあ、連れて行かない」
クリムが鋭くいい放つと、アイランはしゅんと肩を落とした。
「……わかった。ねーちゃんのそばでおとなしくしてる」
「よし」
アイランに頷き返し、クリムはノアを見やった。ノアはしかたないといった様子で微笑んだ。

*

クリムたちが広場に着いた時には、すでに二十人ばかりの子どもたちが集まっていた。クリムと同年代の村の子どものほとんど全員だ。
クリスタルの前に、長く伸びた白髪と白いひげを蓄えたローラン村長が立っている。
そして、クリスタルを囲むように設けられた数段の石段にキャラバンメンバーたちが腰をおろしている。四人ともが躰のあちこちに包帯を巻いた痛々しい姿をしていた。
「みな、集まったようじゃな」
クリムたちがやってきたのを見て、村長は口を開いた。
「さて、おまえたちに集まってもらったのは他でもない。見てのとおり、ヘルナドたちは大き

な傷を負い、次のキャラバンの旅に出ることは難しい。そこで、新たなキャラバンを組むことになったわけじゃ」

村長は皆をゆっくり見回しながら話し始めた。

「知ってのとおり、新たなキャラバンを組みなおす時は今までのキャラバンを組んでいた者の次の世代の者から選びだすことになる。つまりは、おまえたちの中から選ばれることになるわけじゃ。いささか若すぎるのだが、いたしかたあるまい」

誰かが唾を飲む音が聞こえた。

「で、肝心のメンバーじゃが……ヘルナド、頼めるかの」

「わかりました」

頷いてヘルナドが立ちあがった。ヘルナドは右腕を大きな布で躰の前に吊っていた。しかし、他に目立った怪我はあまりなく、他の三人に比べると軽傷のように見える。

「では、メンバーとなる者の名を伝える」

細い目で皆を見回して、ヘルナドがいう。いつものヘルナドとは大きく雰囲気の異なる真剣な様子だった。

「まず、リッド＝コイル」

「はいっ！」

名前が呼ばれた瞬間にリッドの鋭い声が飛んだ。

その声に驚いて、クリムは彼の方へ目をやった。

リッドは両足をそろえ、背筋をピンと伸ばして立っていた。その立派な立ち姿に、クリムにはリルティである彼が自分よりも大きいのじゃないかと錯覚した。

「次にサムルンティ」

名前を呼びヘルナドがサムルンティの方に顔を向ける。

サムルンティは無言のまま小さく頷いた。

ユークという種族は、他の三種族と大きく異なる外見をしている。背はすらっと高く、足も長い。すっきりと長い腕の先についた手は鳥の翼のような羽毛に被われた大きなものだ。だが、何よりも特徴的なのは、ユークの者が全員銅製の仮面を被っていることだろう。おかげで、彼らがどのような表情をしているのか読み取ることができない。それどころか、仮面の下に本当に顔があるかどうか怪しい気さえする。

十年以上のつきあいがあるクリムにも、ああして無言で立たれたのではサムルンティが何を考えどう思っているのかさっぱりわからない。

クリムだけでなく、その場にいた全員が理解できないのだろう。皆がサムルンティを見つめたまま、しばしの沈黙があった。

当のサムルンティは、一度頷いた後はわずかも動かずにいる。

静寂を破ったのは、村長の咳払いだった。

「つづけてくれんか」

「あ、すいません」

小さく頭をさげ、ヘルナドも一つ咳払いをした。
「三人目は、イ・リュ」
「えーっ」
不満そうな声をあげたのは、イ・リュ本人だった。
「何か、問題でもあるのか」
「そうじゃないけど。なんで、あたしが選ばれたの」
セルキーには集団行動に向かない性格をしたものが多い。盗賊を祖とする種族といわれ、自分の身は自分で守るという考えが根づいてるせいだ。そんなセルキーの中でも、特にイ・リュは団体で旅をするのには不向きな性格だとクリムも思った。彼女の疑問ももっともな気がする。
「周り見りゃわかるだろ。ここには、セルキーがおまえしかいない」
石段に横たわるように座っていたマ・イトが、笑いまじりに答えた。
「そんなの、ここに来てないだけじゃない」
「そうだな。でも、いないことには違いない」
「なによそれ、冗談じゃない。ちゃんとみんな呼んできてよ」
「呼んださ。でも、来てないんだよ。だけど、おまえはちゃんとここにいる」
「それはだって、兄貴が大変だからって……」
何かに思い当たった様子で言葉を途切れさせ、イ・リュは険しい顔で下唇を噛んだ。

「ともあれ、セルキーとしてはおまえに頼るしかないって感じだな」
「そんなの、まるっきり帳尻あわせじゃない」
「まあ、事実そんなところだろ」
そういって、マ・イトは声をあげて笑った。
「ムカックっ。いいわよ、見てなさいバカ兄貴。りっぱにキャラバンやって、泣いてあやまらせてやるから」
「おう、せいぜいガンバレ」
イ・リュは歯をむいて兄を睨むと、ぷいと顔を背けた。
――すごいな、マ・イトさん。あのイ・リュを簡単にのせちゃった。さすが兄妹。
相変わらず笑いつづけているマ・イトを眺めながら、クリムは感心した。
「四人目だ。ハーディ」
「はい」
やはりハーディだった。クリムは隣で返事をするハーディを横目で見て一人納得していた。
「そして、クリム」
「あ、はい。……って、え？　ぼくですか」
返事をしてから、クリムは驚きに目を丸くして尋ねた。
「やったな、クリム」
アイランが嬉しそうにクリムの足を肘でつついた。

「今回のキャラバンは、特別に五人で旅に出てもらうことにした。なお、メンバーに選ばれた五人には明日から俺が旅の基礎を教えるから、そのつもりで」
「ちょっと待ってください」
不意に荒っぽい声があがった。リルティのゲイル＝クルトだ。
「なんだ。何か不満があるのか」
ヘルナドが冷ややかな声で問い返す。
「ありますよ。当然じゃないか。なんで、ハーディとクリムなんかが選ばれてて、俺が選ばれないんですか」
「何故といわれてもな。話しあいで決まったことだ」
「調和を重んじる風習なら、クラヴァットからは一人で充分でしょう。なんで、あんな役立たず二人も入れるんです。キャラバンの戦力を考えたら、クリムやハーディなんかよりも俺を入れるべきでしょう」
ゲイルのいい方には腹が立ったが、いっている事はクリムも大いに同意するところだ。なんで、自分が選ばれたのか理解できない。
「そりゃ、こないだのことがあったからだ」
自由になる左手で頭を掻きながらヘルナドが答えた。
「まあ、あれが正しい判断だとも思わないけどな。それでも瘴気の中に飛びこんでまでキャラバンを助けた行動力は評価に値する。もしクリムたちが来なかったら、俺たちも村もどうな

っていたからわからないんだからな。ゲイル、おまえにあんなことができたか？」
諭すような口調のヘルナドの言葉に、ゲイルがまなじりを吊りあげた。
「できましたよ。俺だって、あれくらい」
「……そうか。じゃ、運がなかったんだ」
「残念ね、ゲイル。あんたがセルキーだったら、喜んで代わってあげるのに」
そういって、イ・リュがけらけらと笑った。
ゲイルは険しい顔のままイ・リュを睨んだ。
「その態度がなおらない限りは、キャラバンに参加させるわけにはいかないね」
低く静かにいいながら、石段の上のミモリが手にした槍を支えによろよろと立ちあがった。
「なんだよ、姉ちゃんまで」
声を荒らげたゲイルは、今度は姉を睨みつけた。彼の頬は小刻みに震えていた。怒りが頂点に達したのか悔しいのか、とにかく今にも泣きだしそうな雰囲気だ。
「今のあんたが参加しても、間違いなく足を引っ張る。それでもどうしてもっていうなら、一年みっちりアタシが鍛えてあげるよ。それで、アタシがいいと判断したら来年合流しな」
「なんでだよ。なんでだよ。くそーっ」
大声で叫ぶと、ゲイルはきびすを返しものすごい勢いで走り去ってしまった。
それを見送ったミモリは、大きなため息をこぼしていた。

3

「とにかく、まず何よりも大事なのは、当然のことだが自分と仲間の命を守ること。その次に守るべきは、こいつだ」

整列したクリムたちを前に話し始めたヘルナドは、言葉を切ると足下にあったクリスタルケージを指さした。

クリスタルケージは両腕で抱えこむほどの大きさの杯のような台座があり、そこから植物の蔓のようなものが螺旋状に伸びている。そして、その先端で小さなクリスタルの欠片が淡い輝きを放っていた。

「こいつにミルラの雫を集めるわけだし、このクリスタル片に守られなくっちゃ瘴気の中を旅することもできないんだ。どれだけ大事かは理解できるな」

クリムたち五人はそろって頷いた。

「そして、ここが重要なんだが、こいつは替えがきかない。伝説によれば、なんだかって奇妙な生き物に授けられたってことだが、そんな話は抜きにしても、人の手で作れる代物じゃないんだよ。特にクリスタルは、どんな鉱石よりも固くって傷つけることすら不可能なものだからな。こんなふうに欠片を取りだして加工するなんて、とてもじゃないができやしない」

ヘルナドは睨むような目でクリムたちを見回し、わずかに表情を緩めた。

「でもまあ、クリスタルの力のおかげか、こいつを壊そうとする魔物はいないから、そんなに

神経質になって心配することもないんだが。それでも、何よりも大事なものなんだってことは肝に銘じておいてくれ。なにしろ、この小さな器に村の運命が乗っかってるんだからな」

クリムはクリスタルケージを見つめ、大きな唾を飲みこみながら頷いた。

「その次に気をつけなくちゃいけないことは……」

いいかけたヘルナドは、左手で頭を掻いた。

「ま、大きな注意は特にないか。細々としたことはいろいろあるんだけどな。その辺は、旅に出てからその場その場で教えていくとしよう」

「その場その場って、もしかしてヘルナドついてくるわけ？」

「あたりまえだろ。いきなりおまえたちだけに任せられるか」

それを聞いてクリムは大いに安堵した。

イ・リュはあからさまに嫌そうな顔をしていた。リッドもわずかに顔をしかめていた。同じように不満を表した二人だが、その理由はきっと大きく異なるだろう。

「とにかくだ。そういうわけで、必要な知識はおいおい教えていく。出発までには、最低限必要な技術を身につけてもらうことにする」

それからはヘルナドの言葉どおり、火の熾し方やパパオの扱い方、戦い方を身につけるべく訓練が行なわれた。特に身を守る技術となる戦闘訓練に重点が置かれた。

そんな毎日がつづいた。気がつくと、麦の刈り入れも終わっていた。

*

旅立ちの前夜、クリムが自室で寛いでいるとクラウスが剣と盾を持って部屋に入ってきた。
「こいつを持っていけ」
「これは？」
クリムは戸惑いながら、渡された剣を見つめた。使いこまれた感じのする装飾も何もない無骨な剣だった。新しく巻きなおされたのだろう、柄に巻きつけられた布だけが似つかわしくないほどに白くきれいだった。クリムの手にぴったりと合う太さで、驚くほどに握りやすかった。
「昔、俺がキャラバンをやってた時に使ってたものだ。そんな立派なものじゃないけどな、油を塗りなおして磨いておいたから、役には立つはずだ」
「ありがとう。大切に使うよ」
「馬鹿。剣なんてのは、命守るための道具なんだぞ。大切にしてどうする。大切にするのは、自分の命だ。おまえがミルラの雫を持って帰ってくるのを楽しみにしてるぞ」
「うん」
「じゃあ、今日はさっさと寝ろ。出発の朝に寝惚けてたんじゃ、かっこうがつかないからな」
静かにそういってクラウスは部屋を出て行った。
クリムはまとめた荷物の横に剣と盾を置き、しばらくの間それを眺めていた。

4

まだ朝靄の立ちこめている早朝、クリムたちは村の入口で出発の準備をしていた。
周囲には村人全員が集まり彼らを見守っている。
その中にノアの姿を見つけ、クリムは荷物の積みこみを中断し彼女のところに向かった。
駆け寄ってくるクリムに、ノアは少し驚いた様子を見せた。
「どうしたの、クリム」
「あ、うん」
クリムは髪を掻きながら、小さく頭をさげた。
「ごめんね。結局ほとんど収穫手伝えなかった」
「ううん。しかたないよ。キャラバンに選ばれたんだもん」
「うん。でも……」
「おい、クリム。サボるなよ」
背後から飛んできた苛立った感じのリッドの声が、クリムの言葉を遮った。
クリムは背後のリッドをちらりと振り返り、再度ノアに視線を戻した。
「呼んでるよ。行かなくっちゃ」
「うん。……じゃあ、行ってくる」

「いってらっしゃい。がんばってね」
ノアは笑顔で手を振った。
彼女に手を振り返し、クリムは荷車に駆け戻った。
間もなく、全ての荷物が荷車に積みこまれ出発の準備が整った。
ヘルナドに促され、クリムたちは集まった村人の前に整列する。
「それでは、行ってきます」
「行ってきます」
クリムたちが声をそろえて宣言すると、村人たちから幾つもの言葉が返ってきた。
ハーディが手綱を引き、パパオが歩きだす。それにつづいて、クリムたちも村の外に向かって足を進めた。
パパオの引く荷車を中心に、橋を渡りまっすぐに伸びる道を歩いていく。
振り返ると、まだ村の入口に村人たちが集まり見送っているのが見えた。その姿も、だんだんと遠く小さくなっていく。

第二章 聖樹の雫

1

パパオはゆったりとした足取りで街道を進んでいる。かなりの時間こうして歩きつづけている。ティパの村は、もうずいぶん前に見えなくなっていた。辺りには一面の草原が拡がるばかりだ。クリムたちキャラバンが行く街道のほかには、目につくものは何もない。

パパオが引く荷車を中心にして、クリムの足で半径十歩分ほどの円がクリスタルケージの聖域である。その外は、瘴気が漂う世界だ。

瘴気は命を奪う存在であると聞いていたので、村を離れると草一本生えない荒地ばかりがつづくのかと思っていたのだが、そうではなく辺りには緑の草が生い繁り、ところどころにいっぱいの葉をつけた木々も見える。前方、はるか遠くの空がわずかに黒く澱んでいる以外は、長閑な風景だった。

しかし、クリスタルケージの聖域を一歩飛びだせば、瘴気が躰を蝕み苦しみに襲われることをクリムは身をもって知っている。やはり、そこは死の世界なのだ。

パパオの横に並びまっすぐ前を睨むようにして歩いていたクリムは、ふと皆を見回した。

必死の形相で手綱を握るハーディが御者台に座っていて、その向こうに反対側を歩くリッド

の真剣な顔が見える。後方を振り返ると、眉間にしわを寄せたイ・リュの顔があった。サムルンティは、荷車の陰になって見えないがリッドの後方を歩いているはずだ。

皆の真剣な顔を確認したクリムは、前方に視線を戻し唾をひとつ飲みくだした。パパオの蹄と荷車の車輪の音にあわせ、足を進める。

「あーもうっ」

突然、イ・リュが苛立った様子で声をあげた。

「いつまでこうやって歩いてればいいのよ」

その声にクリムの強張っていた躰が大きく震えた。今まで早く大きく響いていた心臓が一瞬動きを止めた。

「ど、ど、どうしたのさいきなり」

「いきなりじゃないわよ。ずっとずっと我慢してたの。さっきから、もうどんだけ歩いてると思ってるの。それなのに、周りはずーっと草原ばっかり」

「しかたないだろ」

呆れた様子でリッドが口を挟んだ。

「わかってるわよ。でも、あたしはのんびり散歩するために村の外に出たわけじゃないの。いったい、いつになったら目的地につくわけ？」

「しらねえよ」

リッドがため息混じりに答えた直後、荷車の中から弦楽器を掻き鳴らす大きな音が聞こえて

きた。少し歪んだ気もちの悪い音だった。
「この速さで進んでくと、あと三十日……下手すると四十日は草原しか目にしないな」
幌の中からヘルナドがいった。
「はぁっ？　なんでそんなにかかるわけ」
「なんでって、そりゃそんだけ離れてるからだよ」
歪んだ弦楽器の音を交えながら聞こえてくるヘルナドの答えに、イ・リュの顔は見る見る険しくなっていく。
「てゆーかよ」
ヘルナドが、幌の間からのっそりと顔をのぞかせた。
「おまえら、いつまでそうやって歩いてるつもりだ？」
「へ？」
クリムは思わずあっけに取られた顔になった。リッドとイ・リュも同様の表情をしている。
「パパオの足はもっと速いぞ。おまえらが荷車に乗りゃ、こんなゆっくり歩く理由はなくなるんじゃないか」
「そ、そーゆーことはもっと早くいいなさいよ」
イ・リュは顔を真っ赤にしながら怒鳴って、荷車に駆け寄った。
イ・リュに次いでリッドが荷車に飛び乗った。その後にクリムもつづく。
荷車の中は雑然としていた。大半を水と食料が占める荷物が所狭しと詰めこまれている。

キャラバンに使われる荷車はかなり大きめのものなのだが、自由に動き回れる空間はほとんど残っていなかった。

イ・リュは食料の詰まった木箱の間に埋もれるようにして、憤然とした顔で座っていた。リッドは水の入った樽の上に腰をおろし、自分の槍を磨いている。ヘルナドは隅に陣取り弦楽器を爪弾いていた。

クリムも適当な場所に腰をおろした。が、すぐにその腰を浮かせた。

「サムルンティは？」

そういってクリムが幌を捲りあげ荷車の後方を確認しようとした時、前の方からハーディが中に入ってきた。

「何やってんだよ。おまえまで入ってきてどうするんだ」

リッドがとがめるようにいった。

「サムルンティが代わってくれるって」

笑顔で答え、ハーディは手近な空間に座った。

それを待っていたかのように、荷車が小さく揺れた。パパオが足を速めたのだろう。

「あんまり飛ばしてパパオをバテさせるなよ」

弦楽器の首に沿わせた左手を見つめながらヘルナドがいった。

「……わかってます」

幌の向こうから、呟くような返事が返ってきた。

クリムは後方の幌の隙間からを外を眺めていた。角度的に地面しか見えないが、それでも先程までとは明らかに異なる速度で景色が流れていくのがわかった。
「ねえ、ヘルナド」
わずかに身を乗りだし、ハーディがヘルナドを見やった。
「草や木は瘴気に毒されないの？」
「ん？　なんでそんなことを思った」
「だって、草原が拡がってるじゃない。こんな瘴気の中で緑色の草原が一面に」
「なるほど」
頷きながらヘルナドが弦を弾いた。やはり微妙に外れた気もち悪い音がした。
「でも、植物が瘴気に影響されないわけじゃないだろう。長い年月かけて瘴気に耐える力を手に入れたんだと思うぞ」
「そうか。そうなんだ」
「それは興味深いですね」
ハーディが頷くのと同時に、外からサムルンティの声も聞こえた。
「植物って、すごいね」
幌を捲くりあげ、ハーディは楽しそうな顔で外に目をやった。
「草とか木とか、そんなのどうでもいいわよ。それより、ヘルナド」
イ・リュが機嫌の悪そうな顔をヘルナドに向けた。

「その下手くそな楽器やめてくれない。さっきから、その音聴く度に背中のあたりがむずむずむずって気もち悪くなるのよ」

「それは、オレも同感だ。全身の毛がぞわぞわって立つ感じがする」

「そうか。そいつは悪かったな」

神妙な顔で頭をさげながら、ヘルナドはまた弦を弾いた。歪んだ音が響いて、イ・リュが身をよじらせる。

「だからやめてっていってるでしょ」

「わかったわかった」

笑いながらそういって、ヘルナドは楽器をわきに置いた。

その様子を見ながらクリムは首をかしげた。

「でも、ヘルナドって、そんなに楽器下手だったっけ？　水かけ祭の時に聴いた憶えがあるんだけど、その時はちゃんと演奏してなかった？」

「そういえば、そうかも。けっこううまいんだって思った気もする」

「ん？　そうだったか」

そういって苦笑したヘルナドの目が、一瞬自身の手元に落ちたのが見えた。

その瞬間、クリムは理解した。腕を吊る大きな布はもうしていないが、ヘルナドの傷はまだ完全には癒えていないのだ。だから、指がうまく動かないに違いない。

「……ごめん、変なこと訊いて」

「バカ。気にしすぎだ」
そういってヘルナドは笑った。

＊

旅立ちの緊張が解けたせいか、クリムはいつの間にか眠っていたようだ。目を開けると、ぼんやりとした光が目に入ってきた。
次第にはっきりとしてきた視界に、荷車の中に吊るされたランプが映った。
クリムは小さなあくびをこぼしながら、周囲を見回した。
ハーディとリッドとイ・リュとサムルンティが荷物に埋もれて眠る姿があった。ということは、今はヘルナドが御者台に座っているのだろう。
幌を捲り外を眺めると、空はすでに濃紺に染まり星が瞬いていた。
と、不意に荷車が大きく一度揺れた。
その振動で、寝ていた四人がいっせいに目を覚ました。
「な、何。地震？」
木箱にでもぶつけたのだろう、イ・リュは叫びながら額を抑えていた。
幌が開き、ヘルナドが上半身だけ荷車の中に覗かせた。
「日も暮れたし、今日はここらで休むことにする。ほら、さっさと準備しろ」

といわれ、クリムたちは大急ぎで荷車をおりた。
「相っ変わらず、一面草原だし」
荷車を出ると、イ・リュは開口一番にそういって深いため息をこぼした。
彼女の言葉に笑いながら、クリムたちは夜営の準備に取りかかった。とはいっても、パパオを繋いでおく場所を探すことと、焚き火のできそうな場所を見つけて火を熾す程度のことだったが。食事の準備はハーディが立候補した。
程なくして、焚き火を囲んでの夕食が始まった。
「意外。おいしいじゃない」
「ああ、ほんとにうまい」
「ハーディにこんな特技があったなんて知らなかったよ」
ハーディの作った料理を一口食べた瞬間、クリムたちはそろって声をあげた。
「家で、手伝いとかしてたから」
ハーディは照れくさそうに頭を掻いていた。
「これからも食事の準備はハーディに任せていいか？」
匙を突きつけリッドが問いかけると、ハーディは笑顔で頷いた。
「こんなことでよければ。戦いになったら僕はあんまり役に立たないだろうしね。そのぶん、こっちで頑張るよ」
「よし。じゃあ、任せたぞ」

「料理を頑張るのはいいが、食料の残量は考えろよ」
ヘルナドが冷ややかに言葉を挟んだ。
「あ、はい。わかりました」
ハーディの返事に満足した様子で頷いたヘルナドは、何かを思いだしたらしく匙を止めた。
「今のうちに保存食の作り方教えておいた方がいいな。じゃ、明日っからハーディに教えることにするか」
「はい」
「あ、それから、おまえら。気抜きすぎだ」
急に鋭い目をして、ヘルナドが皆を見回した。
「いくら見通しのいい街道だからって、魔物がまったく現れないわけじゃないんだからな」
いわれて初めてヘルナドの傍らに彼の剣が置かれていることにクリムは気づいた。クラウスから貰った剣は荷車の中に置きっぱなしだ。
クリムは慌てて立ちあがった。リッドとサムルンティも彼とほぼ同時に腰をあげた。

2

旅立って二十日近くが過ぎた頃、ようやく景色に変化が訪れた。
「ヘルナド」

御者台からリッドの声がした。
「ん、どうした」
「道が二つあるんだけど、どっちに進んだらいいんだ」
「えっ、分かれ道」
嬉々とした声と共に、イ・リュとハーディが幌の外へ身を乗りだした。クリムもそれにつづいた。サムルンティもクリムの後ろから顔を出してきた。だが、ヘルナドは動かなかった。振り返ると荷車の後ろの方で弦楽器を抱えている姿が見えた。
「まずはリバーベルに向かうから、そこは右だ」
「わかった。右だな」
リッドは頷き、手綱を軽く引いた。パパオが右の道へと躰の向きを変える。
「やっと、最初の目的地に着くのね」
イ・リュが大きなため息をつきながら腰をおろした。
何かを思いだしたのか、サムルンティが急に自分の荷物を詰めた大きな袋を引っ掻き回し始めた。
「何？　急にどうしたの」
「いえ、魔物の巣窟に着くようなんで、魔法のことを再確認しておこうと思いまして」
そういってサムルンティは、袋から取りだした小さな本を開いた。
「魔法って、いまさら確認しなくても、あんたよく知ってるんでしょ」

「ですが、使うのは今度が初めてになるのですから」
「は？　使ったことないの？」
「当然です。魔石がなくては、魔法は使えないのですから」
呆れたような口調のイ・リュの言葉に、サムルンティは平然と答えた。
「魔石って、どんなものなのかな」
強く興味を惹かれたらしいハーディが、サムルンティの本を覗きこんだ。
「実物は見たことないのですが、掌に収まる程度の大きさの輝石だと書いてあります。多くは魔物が持っているのだそうです。魔石にはそれぞれ魔法の力がこめられていて、その力を引きだすことによって魔法が使えるわけです」
「ていうことは、魔石一個で魔法が一つなんだね。それってどれくらいの種類があるの？　魔石の違いっていうのは、見てわかるものなのかな？」
「ええ、輝きや石の色でわかるらしいです。魔法の種類は……」
楽しそうにサムルンティとハーディは魔法について話しつづけている。うまく話の飲みこめなかったクリムは、頭がくらくらするのを感じていた。イ・リュは、指で耳をふさいで憎々しげにサムルンティたちを睨んでいた。

＊

さらに数日荷車に揺られつづけ、キャラバンはようやくリバーベル街道と呼ばれる旧街道の入口に至った。

「よし、みんな準備をしろ。こっからは歩いていく」

「パパオは、どうするの？」

「草と水のあるところに繋いでおく。こいつは、モーグリと同じで瘴気の中でも生きられるからな。ほら、ぐずぐずするな」

鋭い口調に急き立てられ、クリムたちは下車の準備を始めた。防具をまとい、武器を手にし、動き回るのに邪魔にならない程度の食料と水とクリスタルケージを運びだす。

パパオの手綱を手近な木に括りつける。ここを訪れたキャラバンは皆この木にパパオを繋ぐのだろう、手綱を結ぶのにちょうどいい辺りの幹が細くくびれていた。

荷物を背負い整列したクリムたちを見回し、ヘルナドは口を開いた。

「よし。それじゃ、これからミルラの樹を目指して進む。こっからは魔物が多いから充分気をつけろ。危なくなったら助けるし教えておかなきゃいけないことは教えてやるが、それ以外は俺は基本的には何もしない。極力自分たちで考え、自分たちの力で進め。いいな」

不安に胸を高鳴らせているクリムの横で、リッドがひときわ大きな声で返事をした。

「よし、じゃ行くぞ。オレが先頭を進んでやる。クリムも剣を持ってるんだ、オレと一緒に前を歩け」

「え？　ぼくが」

「サムルンティは魔法で援護だな」
戸惑うクリムをよそに、リッドは役割の指示をつづける。
「まだ、魔石がありませんよ」
「ああ、なんか、そんな話も前にしてたっけな」
「魔石を手に入れるまでは私も前衛に出ましょう。武器を扱うのであれば、私とクリムでリッドと釣り合いが取れるくらいでしょうから」
「そうだな。うん、じゃあそうしようか」
「僕は、戦いじゃ役に立たないだろうから、ケージを運ぶよ」
いうが早いか、ハーディはクリスタルケージを抱えあげた。
「お、おう。任せた。しっかり守れよ」
「役割もばっちり決まったみたいね。じゃ、さっさと行きましょ」
イ・リュの言葉に、リッドが険しい目を向けた。
「待てよ。おまえは、何をやるんだよ」
「あたし？　あたしはあたしにできることやらせてもらうわ。それとも、あんた何かあたしに期待する？」
しばらくイ・リュを睨みつづけた後、リッドは舌打ちしながら彼女に背を向けた。
「みんな、行くぞ」
先頭を切って歩きだしたリッドの背中を斜め前に見ながら、クリムは右手は剣にかけて、

周囲を見回しながら歩を進めた。剣を握る掌には汗がにじんでいる。

リバーベル街道は、緑の多い起伏に富んだ山道のようだった。小高い丘や小さな谷があり、川も流れている。瘴気がなく魔物が出ないのであれば、のんびりと歩くのが似つかわしいような風景だった。古びた木造の橋がかつてここが街道だったことを物語っている。

不意に甲高い雄たけびが聞こえ、クリムは背筋を大きく震わせた。

リッドと同じくらいの背丈の人型の魔物が丘の上に二匹いるのが目に入った。大きな耳ととがった鼻を持つ魔物が、牙をむきクリムたちを見おろしている。

「ゴブリンだ。動きが速いから注意しろ」

ヘルナドが背後から鋭くいい放った。

「一匹はオレがやる。もう一匹は任せたぞ」

叫びながらリッドが駆けていく。クリムは遅れまいと剣を抜き、走った。

小柄な魔物は、驚くほどに素早かった。間合いを詰め剣で斬りかかろうと思ったときには、魔物はすでに目の前まで迫っていた。悲鳴を喉に詰まらせ身を強張らせたクリムに、魔物が手にした短剣を突きだした。

どうにか盾で攻撃を受けた。間近に奇妙にゆがんだ口の端からよだれを滴らせる魔物の醜悪な笑顔がある。クリムは盾を突きだし、魔物を弾き飛ばした。後方に飛ばされた魔物は静かに着地すると、大きく見開かれた目でクリムを見据えたまま、短剣を振り回しながらにじり寄ってきた。クリムは盾を構えたまま、じりじりと後退する。

不意にサムルンティがクリムの視界に入りこんだ。魔物の背後に回りこんだサムルンティは、思い切り鎚を薙いだ。横面を殴り飛ばされた魔物が躰を仰け反らせる。

加勢に踏みこもうと剣を握りなおしたクリムだったが、横様に倒れていくかと思われた魔物が踏みとどまったのを目にし再び躰を硬くした。魔物は反らせた躰をそのまま反動にし、奇声を発しながらサムルンティに向け短剣を大きく振りおろす。

「危ない！」

叫ぶのがクリムには精一杯だった。

サムルンティは身をかばうように両腕を交差させ後方に跳んだ。だが、わずかに遅く、刃先はサムルンティに届いた。腕が斬られ、毛が飛び散る。さらに魔物はサムルンティに向かって短剣を突きだす。

――助けなくちゃ。

と思いながら、クリムは仲間の姿を求めて視線を彷徨わせていた。

リッドは右前方で、同様に短剣を手にしたもう一匹のゴブリンと切り結んでいる。ハーディは後方でクリスタルケージを抱えておろおろしている。ハーディの隣で戦いを見つめているヘルナドは動くつもりがないようだ。

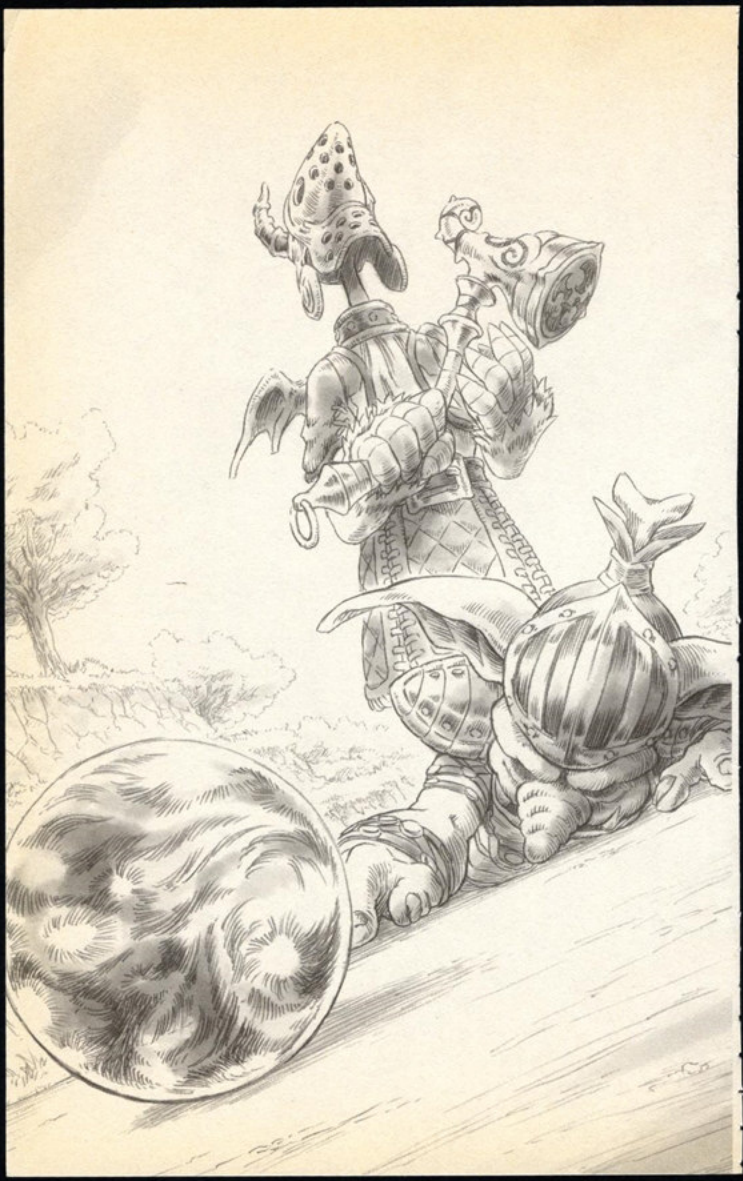
――イ・リュは……あれ、イ・リュがいない。

クリムは彼女の姿を探し、思わず周囲を見回した。

「クリム！」

耳に届いたサムルンティの叫びに、視線を戻す。目の前に魔物の真っ赤な顔があった。
「うわぁぁぁぁぁっ」
絶叫と共に、クリムは腰から倒れこむように後方へ身を引いた。
不意に大きな背中が視界に飛びこんでくる。ヘルナドだった。
ヘルナドの剣がゴブリンの短剣を払い飛ばす。
「戦いに集中しろ」
鋭くいい放つと、ヘルナドはクリムが返事するより早く、再び後方へさがった。
目の前には飛ばされた短剣を拾うゴブリンの背中があった。
クリムは息を詰め、剣を大きく振りかぶり、目の前の魔物の背中めがけ渾身の力をこめ振りおろした。
短剣を拾い振り返ったゴブリンの肩口にクリムの剣は深々と食いこんだ。
やった。クリムはそう思ったが、剣を肩に食いこませたままゴブリンが笑った。短剣を握る手が大きく引き絞られる。クリムは必死に剣を引き抜こうと腕に力をこめる。が、やはり刃は肉に食いこんだままわずかも動かない。
不意に魔物の目が大きく見開かれた。クリムは悲鳴を喉に詰まらせた。が、それ以上ゴブリンは動かなかった。
剣を握る手にかかる重さが増した。魔物の躰が崩れ落ちる。その向こうにサムルンティが立っていた。彼が背後から殴り倒したようだ。

倒れたゴブリンの手から赤く光る小さな輝石がこぼれ落ちた。
「くそっ。くそっ。このやろっ」
怒声をあげ、リッドが対していたゴブリンに向け槍を突きだした。それを避け魔物は後方へと跳んだ。魔物を追いリッドも前へ跳ぶ。
「あっ、ダメだよリッド」
ハーディが声をあげた。
リッドの躰はケージの聖域の外へと飛びだしていた。瘴気に包まれ、リッドが苦しそうに咳きこむ。
転がるようにして聖域の内に戻ってきたリッドは、うずくまり荒い呼吸を繰り返した。
「危ないリッド」
叫びクリムは駆けだした。うずくまるリッドの背後にゴブリンが迫っている。
弾かれるように振り返ったリッドの左肩に魔物の短剣が突き刺さった。勢いに押されリッドの躰が後方に倒れしりもちをつく。
魔物に圧しかかられ顔をゆがめたリッドは地面を掴み、魔物の顔に砂を投げつけた。
「くっ。この」
顔を背けた魔物を蹴り飛ばし、リッドは槍を握りなおし倒れる魔物の腹に突き立てた。深々と腹を貫かれた魔物は、くぐもった呻きをもらし動かなくなった。
クリムは安堵の吐息をこぼし、その場に崩れ落ちた。



「しましまリンゴなんかご大層に宝箱にしまってんじゃないわよ。バカにして」
どこにいっていたのか、イ・リュが苛立った様子で戻ってきた。
「おまえ、何やってたんだ！」
槍を握る手を小刻みに震えさせながら、リッドが大声で怒鳴った。
「なによ。あそこに宝箱があったからさ、何が入ってんのか見にいってただけじゃない」
「ふざけんな。おまえも戦えよ」
声を荒らげるリッドに、イ・リュは肩をすくめて見せた。
「無茶いわないでよ。……って、サムルンティ。あんた、それ何？」
イ・リュの言葉に、クリムたちはサムルンティを見た。彼の手の中には、二つの小さな輝石があった。真球の様になめらかな形をした魔石は、それぞれに赤と緑の鈍い光を放っていた。
「これが魔石ですよ。今の魔物が手にしていたものです。こっちがファイアでこっちがケアル」
「あたしにもちょうだい、それ。二個あんだから、一個くらいいいでしょ」
「みんなの体力の回復を担当してくれるのなら、かまいませんが」
「それくらいなら、やってあげるわよ。だから、さっさとちょうだい」
そういって、イ・リュはひったくるように緑の魔石を受け取った。
「その魔石を握って、魔法を使いたい対象に意識を集中してください」
「はいはい」
満足そうに笑いながら魔石を撫でまわし、イ・リュは血の流れる肩を抑えているリッドを見

つめる。その間、クリムたちも息を詰めリッドを見守っていた。
不意に淡い光がリッドを包んだかと思うと、見る間に傷が塞がっていった。
「それでは、これからも回復役をお願いします」
痕も残っていないリッドの肩を言葉もなく見つめていたクリムたちは、サムルンティの言葉にいっせいに彼の方に顔を向けた。
「ま、いいわ。めんどくさいけど、やったげる」
「よし、じゃ先へ行こうぜ」
勢いこんでそういったリッドの側頭部で小石が弾けた。リッドの躰が横に転がる。
クリムは身構え、石の飛んできた方を見た。ゴブリンが笑っている。
「やりやがったな」
にじんだ血を気にすることなく、リッドが魔物に向かい駆けだす。が、彼が動くより早く魔物の躰が炎に包まれた。
突如目の前で燃えあがった炎に、クリムは驚きの声をあげた。リッドも突進する足を止め、あんぐりと口を開いていた。
皆が茫然と見守る中、炎に包まれた魔物が断末魔の悲鳴とともに倒れた。
「なるほど、これが魔法の力……」
サムルンティは自分の手を見つめ、小さく呟いた。

＊

クリムたちは疲れきっていた。呼吸も荒く、足取りも重い。
リバーベル街道に入って、すでに丸一日以上が過ぎている。
次から次へと襲ってくる魔物との慣れない戦闘だけでもひどく疲れていた。その上、昨晩はいつも以上に周囲を警戒しながら休息をとらなくてはいけない状況だったため、一睡もできなかった。
「ほら、あとちょっとだから、ちゃんと気を張れ。その川に沿って上流に向かえば、すぐにミルラの樹に着く」
「ほんとか？　よしっ。みんな、一気に進むぞ」
「焦るな。その前にこいつだ」
駆けだそうとしたクリムたちを制し、ヘルナドは傍らを指さした。彼の指した先では、水が噴きあがり小さな柱を作っていた。
「水の力が強く現れた力場だ。ハーディ、クリスタルケージをここに近づけてみな」
いわれるままにクリスタルケージを水の柱に近づけたハーディは、噴きあがる水を浴びた瞬間にケージの上のクリスタルが青く輝きだしたのを見て驚きの声をあげた。
「わっ、何これ。どうなっちゃったの」
「クリスタルが水の属性を得たんだよ」

「へー。えっと、それで何が変わったの？」
ほのかな青い光を放つクリスタルを見つめ、ハーディが尋ねた。
「それについては、また後でだな。とりあえずは、力場の存在とクリスタルの属性ってことだけ頭に入れておくことだ。属性には地水火風と四つある。それぞれに、その属性の力が強く現れた場所が力場ってことだ。知ってれば、一目で見つけられるだろうから」
クリムたちを見回しながらそういってから、ヘルナドは微笑んだ。
「一講義終わったところで、そんじゃミルラの樹に向かおうか」
気合いの入った返事をし、クリムたちは川沿いの道を進んだ。
間もなく、一行の前に大きな滝が姿を現した。そこには淡い光を放つ奇妙な形の樹があった。
クリムの目は、その緑色に輝く樹に釘づけになっていた。
「あれが、ミルラの樹？」
「ああ、そうだ」
ヘルナドが頷くのと同時に、クリムたちは我先にとミルラの樹に向けて駆けだした。
「待て、おまえらっ」
ヘルナドの叫びを掻き消すような大きな水音がして、滝の中から巨大な物体が飛びだしてきた。クリムたちの前に立ちはだかるように現れたのは、巨大な蟹の魔物だった。その魔物は全身を硬い甲羅に被われ、左右の鋏は右がやけに大きく左は鋭くとがっていた。

大蟹は、硬く大きな右の鋏を振りおろす。クリムたちは後方に跳び退り直撃をかわした。鋏が叩きつけられた地面から、土塊や礫が舞いあがり頬や手足を掠めていく。

サムルンティがファイヤを放つ。リッドが槍で攻撃する。一瞬遅れてクリムも斬りかかった。

刃は硬い殻に阻まれた。金属を叩いたような振動が腕をしびれさせる。

細く鋭く尖った左の鋏が突きだされ、クリムの腹を薙いだ。弾き飛ばされ、腹から血を流しながらクリムの躰は後方へ転がる。

腹部に燃えるような熱さを感じた。立ちあがろうと地面についた手にうまく力が入らず、腕が大きく震えた。うずくまった地面に血がこぼれ落ち、赤黒く拡がっていく。

茫然としていたクリムを淡い光が包む。イ・リュのケアルだ。光が躰に染みこむと、腹を襲っていた熱が引いていった。傷が塞がっていく。

クリムは大きくかぶりを振り全身にのしかかっていた圧迫感を追い払い、イ・リュを振り返って小さく礼を述べた。彼女の隣では、ハーディが相変わらずクリスタルケージを抱えて歩き回っていた。

立ちあがったクリムは剣を構えなおし、再び魔物に向かっていく。

甲羅は硬く、刃はことごとく阻まれた。サムルンティのファイヤも表面を焦がすばかりで、あまり効いているようには見えない。疲れに皆の動きが鈍っていく。

「もうっ。きりがないじゃない」

ひたすら回復魔法を使いつづけていたイ・リュが苛立った様子で叫んだ。
巨大な鋏に薙ぎ払われ、クリムたちは地面を転がった。
「目だ。目を狙え」
不意に飛んできたヘルナドの叫びの意味を認識できずクリムが戸惑っている間に、リッドが立ちあがり猛然と飛びだした。蟹の左の鋭い鋏がリッドを狙っているのが目に入った。クリムは慌てて駆けだし、鋏とリッドの間に躰を滑りこませる。鋏の先端が盾に突き立てられる。クリムの躰は弾き飛ばされ再び地面を転がった。リッドは魔物の目の前に飛びこんだ。
気合一発リッドが突きだした槍は、みごと殻の奥から覗く蟹の目を突き刺した。
甲高い絶叫をあげ激しく暴れたかと思うと、魔物は転がるように水の中に逃げていった。
「よし、今のうちにミルラの樹に向かうぞ」
ヘルナドの言葉に、クリムたちは全身で大きく呼吸しながら頷いた。

3

ミルラの樹はとても不思議な姿をしていた。
樹全体がクリスタルと同じ淡い緑の光を放っている。左右に大きく張りだした枝からは、緑色に光る長い葉が幾枚も垂れさがるように生えている。まるで緑に輝く巨大な鳥が今まさに羽ばたきだそうとしているような形だった。

その翼のように垂れさがった葉の先に石の台座があった。
ヘルナドに促され、ハーディがその台座にクリスタルケージを置いた。
途端、ミルラの樹の放つ光がひときわ強くなった。光は滑り落ちるように葉の先端へと集まっていく。すべての光は葉の先に集束し、小さな光の塊となってクリスタルケージに向かって落下した。光の塊はケージのてっぺんに輝くクリスタルに落ちた。
光を受けたクリスタルが一度強く輝いたかと思うと、淡い光を放つ液体がクリスタルの下に染みだし始めた。じわじわと染みだし大きな雫となった液体は、ぽとりとケージの中に落ちた。
液体はケージの中に溜まり、ゆったりとたゆたっている。
目の前の幻想的な光景に、クリムたちはしばらくの間言葉を失っていた。
「これでまず一つ。同じことをあと二回して村に帰れば、キャラバンの一年は終わりだ」
「しんどー」
ヘルナドの言葉に現実に戻されたのか、リッドがその場にひっくり返った。
「でも、魔石も手に入れたんだし、次はもう少し楽に進めるんじゃない」
「それは、無理です」
そういってサムルンティは魔石をクリムの前に突きだした。初めて見たときに比べ、輝きがひどく弱くなっているような気がする。
「魔石は瘴気の結晶のようなものですから。クリスタルの光の中では、しだいに力を失って

いくんですよ。ほら、もう」

彼が話しているうちにも輝きは薄れ、完全に光を失った魔石はぼろぼろと崩れ去った。

「なによ、それ。いんちきじゃない。せっかく、持って帰って自慢してやろうと思ったのに」

声を荒らげたイ・リュの手の中でも、ケアルの魔石が崩れていた。彼女は憤慨した様子で、魔石の残骸を地面に叩きつけた。

*

リバーベル街道の入口まで戻ってきたクリムたちは、パパオの背に小さな生き物が座っているのを見つけた。

全身を白い毛に被われ、大きな耳と先端に赤い柔らかそうな球体のついた触覚を持つ小さな生物。モーグリだ。そのモーグリはカラフルな布を下半身に巻きつけていた。村にいるときにも何度も見たことがある、郵便配達をしているモーグリだ。

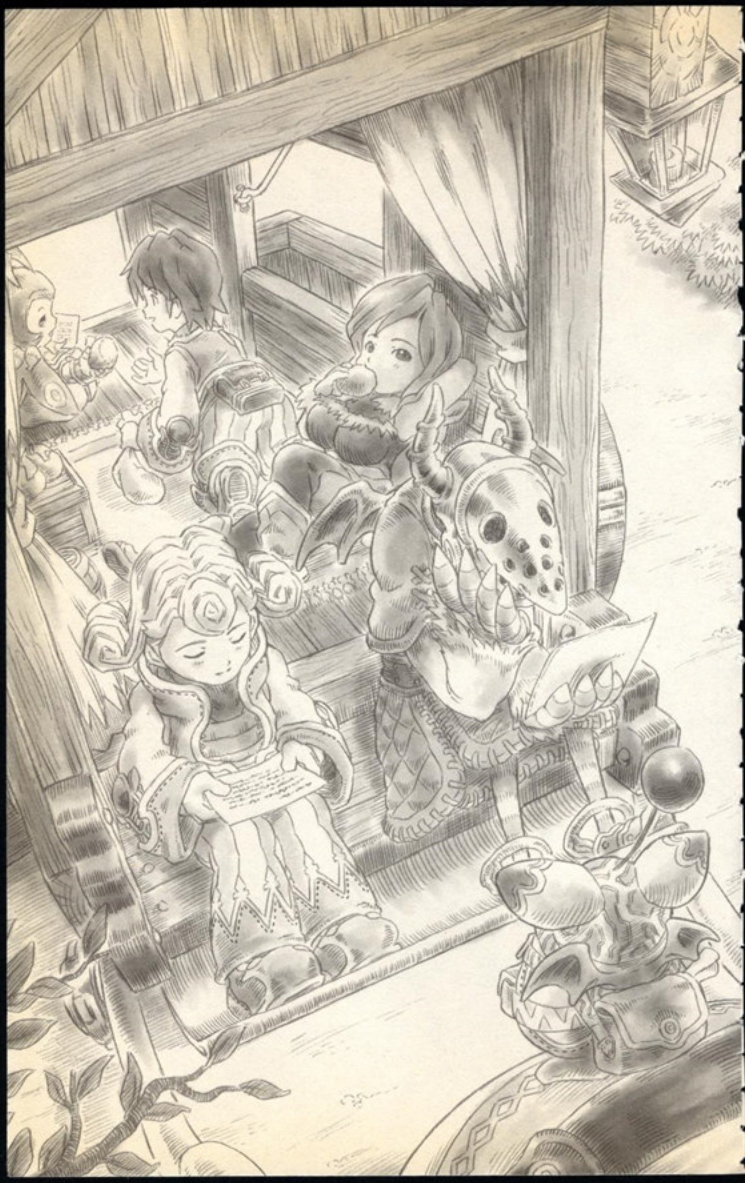
「やっと帰ってきたクポ」

クリムたちに気づいたモーグリは、小さな翼を羽ばたかせふよふよと浮かびあがった。

「ティパの村のキャラバンに手紙を持ってきたクポ」

モーグリはそういって、お腹に提げていた自身の躰よりも大きな鞄を探り、皆に手紙を配り始めた。クリムには、手紙と一緒に大きな包みが渡された。

「母さんからだ」
呟きながら、クリムは封を切り手紙を広げた。
『クリム、頑張っていますか。みんなの迷惑にはなっていませんか。あまり無理をせず、体に気をつけるのですよ。それから、今年の新麦から作ったいなかパンを送ります。これを食べてがんばってください。では、あなたが元気な顔で帰ってくるのを楽しみに待っています』
「うちは父からですね」
「オレんとこも、親父からだ。鉱石が見つかったら、鍛えてやるから送れって」
「僕のは、おじいさんから。ねえ、クリム。なんて書いてあった？　あ、その包み何？」
じっと手紙の文字を見つめていたクリムは、覗きこんできたハーディに顔をあげた。
「いなかパン。新しい麦で焼いたんだって」
答えながらクリムは包みを解いた。開けた瞬間に香ばしい匂いが鼻をくすぐり、クリムは顔をほころばせた。
「いい匂い。ねえ、あたしにもちょうだいよ」
イ・リュが読んでいた手紙をくしゃくしゃに丸めながら身を乗りだしてきた。
「イ・リュ、手紙が」
「いいのよ、バカ兄貴の自慢しか書いてなかったんだから。それより、パンちょうだい」
「あ、うん。それは全然かまわないよ。みんなで食べよ」
「返事を書くなら、早くするクポ。こっちは、忙しいクポ」



モーグリの言葉に、クリムはパンをちぎっていた手を止めた。
「書くよ。書くけど、ちょっと待っててよ」
「しかたないクポ。じゃあ、しばらく一緒にいさせてもらうクポ」
小さくため息をこぼしてそういったモーグリは、パパオの背に乗り丸まって眠ってしまった。
その晩はクリムの母が送ってくれたいなかパンで食事をして休み、翌朝一行は出発した。
荷車に揺られながらクリムたちは皆、黙々と手紙の返事を書いた。
元気でがんばっていることと送ってもらったパンにみんなが喜んだことを書きながら、クリムは脳裡にティパの村の景色を思い描いていた。と、不意にノアの姿が浮かんだ。
母宛ての手紙を書き終えたクリムは、もう一通ノアへの手紙を書いた。ミルラの樹が雫を落とす光景がきれいで感動したことを記した。
「じゃ、頼んだよ」
皆の手紙を受け取り飛び去っていくモーグリを、クリムたちは手を振り見送った。

4

キャラバンはさらに北へと進み、瘴気ストリームを越えた。
瘴気ストリームというのは、濃密な瘴気が噴きだす場所だった。深い谷の底から激しい勢いで瘴気が噴きあがり渦を作っている。その渦の中を貫くように、自然の橋のごとき岩の道が

つづいていた。
その瘴気が水の気を孕んでいると気づいたのはサムルンティだった。噴きあがる瘴気は何らかの属性を孕んでいて、その属性は水から火、風、土、そしてまた水へと毎年変わるのだとヘルナドが教えてくれた。
「どうして、そんなことがおきるの？」
ハーディが尋ねると、ヘルナドはわからないと首を横に振った。ヘルナドでなくとも、瘴気のことを詳しく説明できる者など世界中探してもいないだろう。
瘴気ストリームを抜けるには、噴きあがる瘴気と同じ属性の力をぶつけ相殺する必要があるのだという。そうしなければ、クリスタルの力も押し返されてしまうらしい。
そのために、リバーベル街道でクリスタルに水の力を宿したというわけだ。
「来年は、火の属性を孕んだ瘴気がここを被う。クリスタルに火の力を与える力場は自分たちで探すんだぞ」
瘴気ストリームを抜けたところで、ヘルナドは後方を振り返りながらそういった。
さらに数日街道を進み午後の小休止を取っていた時に、ヘルナドが北にそびえる小山を指して話し始めた。
「あれがマール峠、街道が交わる交通の要所だ。あそこを越えると一気に世界が拡がるぞ。マール峠から北へ向かえばリルティの王が治めるアルフィタリア、さらに北にはユークが住むシェラの里がある。マールの峠の西には大河ジェゴン川があって、その向こうがファム大

農場だ」

ヘルナドの言葉を聞き峠を眺めながら、クリムはまだ見ぬ町や村を思い描いた。

「ま、今年はそんなところまではいかないけどな。さ、そろそろ行こうか。まずは、この先にあるキノコの森にあるミルラの樹だ」

*

キノコの森でミルラの雫を手に入れたクリムたちキャラバンは、マール峠を登っていた。前方に峠の村が近づいてきた。

北と南と西から伸びてくる道が交差する場所に、峠の村がある。そうした地理的な理由があり、あまり大きくないその村はキャラバンが多く立ち寄る場所になっていた。村人の大半がリルティで鍛冶が盛んな村であり、キャラバンの者たちは、よくここで武器や防具を新調するようだ。

クリムたちは、村はずれに建てられたパパオ用の小屋で荷車をおりパパオを繋いだ。

「これで今夜は柔らかなベッドで寝られるぞ」

大きく伸びをしながら発せられたヘルナドの言葉に、クリムたちは歓声をあげ小屋の外に飛びだした。

「あ、イ・リュ。小さな宿だからな、部屋は一つだぞ」

「はぁっ？　冗談でしょ」
先頭きって駆けだしたイ・リュは、目を大きく見開いて振り返った。
「なに怒鳴ってんだよ。別に問題ないだろ」
リッドが顔をしかめ、隣で大きな声をあげたイ・リュを見た。
「おおありよ」
リッドの後頭部を思い切り叩き、そのままの勢いでイ・リュはヘルナドに詰め寄っていく。
「先に宿にいってようか」
クリムは小さなため息をつき、ハーディに声をかけた。ハーディとサムルンティが頷き、三人は村の中に向かって歩きだした。
商店や鍛冶屋などが並ぶ目抜き通りに入ったところで、ハーディが足を止めた。
「ねえ、あれって」
そういって彼が指した先には、商店から出てくるユークの一団があった。男二人、女二人の四人組。キノコの森近くで一度すれ違ったシェラの里のキャラバンだ。
「シェラのキャラバンの人たちだね」
「この間のお礼、いっておいたほうがいいんじゃないかな」
クリムとハーディが話しあっている間に、サムルンティが一人でシェラのキャラバンに向かっていた。
「この間は、ありがとうございました」

「ん？　ああ、ティパのキャラバンの」
キャラバンの隊長だろう先頭を歩いていた年長のユークが答えた。
「いただいた情報のおかげで、無事キノコの森のミルラの雫を得ることができました」
「それは、あなたたちの努力の成果であろう。我々に礼を述べる必要はない」
「そ、そんなことありませんよ」
慌てて駆け寄ったクリムは、サムルンティの後ろから言葉をはさんだ。
「あのモルボルっていう魔物が炎に弱いんだって教えてもらえなかったら、ぼくたちの力じゃ、たぶん倒せませんでした」
「そのとおりです。心より感謝しています」
「それだけ喜ばれたのならば、我々としても知識を分けた甲斐があったというもの」
「隊長」
年長のユークの背後から若いユークが声をかけた。
「どうした、アミダッティ」
「彼らにシェラの証を渡したいのですが、かまいませんか」
「……あなたがいいと思うなら」
「はい」
そういって小さく頭をさげると、アミダッティと呼ばれた若いユークは一歩前に歩みでてサムルンティに手を伸ばした。

「これを受け取っていただきたい。我らとあなたたちの友好の証だ」
「そんな、受け取れません。私には返せるものがない」
「かまわない。これを持って我らの里を訪れてくれれば、それで充分だ」
「……わかりました。では、受け取らせていただきます」
サムルンティは差しだされた小さな銅貨のようなものを手に取った。
「では、我らはこれにて」
「あ、ちょっとちょっと、待って待って。待って、あんたたち」
怒鳴るような大きな声をあげながら、イ・リュが猛然とクリムたちの方へと駆けてきた。
「な、何か」
「あんたたちも、今日はこの村の宿に泊まるの？」
「そ、その予定だが。それが……」
「じゃあ、頼み……ていうか提案があるんだけど。部屋の使い方をティパとシェラじゃなくって、男と女って分け方にしない」
わずかに首をかしげたシェラのキャラバンの隊長に向かい、イ・リュはさらにクリムたちのデリカシーのなさを批難する言葉をいくつも織り交ぜながらまくしたてた。
「わ、私たちはかまわんが……」
根負けした様子でシェラの隊長は答えた。他の三人もぎこちなく頷いた。
「よし、決定。じゃ、そういうことだからね」

そういって、イ・リュは満面の笑みでクリムたちを振り返った。

＊

翌朝、宿を出たクリムたちは町の中で食料の買い足しなど出発の準備を行ない、荷車を止めておいた小屋に向かった。

自分の意見を押し通したというのに、イ・リュは朝からずっと不機嫌そうな顔をしていた。

「どうして、ユークってあんなに静かなのよ。静か過ぎて不気味よ」だとか、「次は自分でお金出してでも一人の部屋とってやる」だとか、ぶつぶつとしきりに愚痴をこぼしていた。

「それで、これからどこへ向かうんだヘルナド」

小屋からパパオを引いてきたリッドが尋ねた。

「こっから北東にあるカトゥリゲス鉱山にミルラの樹があるから、そこに向かう」

そういって、ヘルナドはクリムたち一同の顔を見回し薄く笑った。

「ただし、おまえたちだけで」

「へ？」

「キノコの森での戦いを見る限り、もうおまえたちだけでも充分に戦える力がついただろう。カトゥリゲス鉱山にはちょっとばかり強いのが集まってるけど、まあ俺が今まで教えてきたことを守りゃなんとかなるはずだ」

「わかった。みごとミルラの雫、取ってくるよ」
リッドは嬉々とした表情で強く頷いた。
クリムは不安だったが、自分たちだけの力で旅をすることが本来の姿であって、ヘルナドに頼ることが間違っているのだと胸の中で強くいい聞かせながら頷いた。
「じゃあ、ミルラの雫でケージを満たしてここに戻って来い」
「よし、いくぞみんな」
大きな声をあげ、リッドは睨むようにクリムたちを見た。
「あ、そうそう。赤く燃えてる岩石みたいな魔物にゃ気をつけろ。奴ら、絶命する時に爆発するからな。それに巻きこまれたら、大きな火傷を負うことになる」
ヘルナドに見送られ、クリムたちはマール峠を出発した。

5

豚に似た顔を持つ人型の魔物オークが、リッドに向かい手にした巨大な斧を振りかぶった。振りあげられた斧が高い場所で止まった瞬間リッドは懐に飛びこみ、自身の倍はあろうかという魔物に槍を突きだした。胸を突かれた魔物は斧を振りかざした姿勢のまま後ろへ倒れた。しりもちをついた魔物に、さらにリッドの槍が斜めに振りおろされる。断末魔の声をもらし、オークは動かなくなった。

リッドは短く息を吐きだすと、頬を流れる魔物の返り血を手の甲でぬぐった。
小さな棘がいくつもついた金属製の棍棒を握る魔物の腹に深々と突き刺さった剣を力をこめて引き抜き、クリムはその場に腰を落とした。
ヘルナドのいうとおり、カトゥリゲス鉱山には今までよりも力の強い魔物が生息していた。が、それらを相手にクリムたちは何とか戦っていた。
五人は坑道内に敷かれたレールに沿って歩いていた。この鉱山が現役だったころに掘りだした鉱石を運ぶのに使われていたものだろう。広さもわからない薄暗い鉱山の中を進んでいるので時間の感覚も距離の感覚も怪しいが、かなり奥深い場所まで来ているはずだ。
「よし、もういけるな」
呼吸を整えたリッドはクリムたちを見回すと、先頭きって歩きだした。
クリムは立ちあがり、彼の後を追った。
細い坑道を抜けると、急に広い空間に出た。遥か前方に淡い光を放つミルラの樹が見える。
そして、ミルラの樹の前に立ちはだかるように巨大な魔物の姿が。
今までに出会ったものの倍以上はありそうな体軀をしたオークだった。両手にはそれぞれ、その躰に見合う巨大な鎚と杖を握っている。
「みんな。一気に倒して、ミルラの雫を手に入れるぞ」
かけ声と共に駆けだしたリッドにつづいて、クリムも巨大オークに向かった。
サムルンティの手の中で輝石が青白い光を放った。光は電光を散らしながら膨れあがったか

と思うと、一気に集束しサムルンティの指先に集まった。サムルンティが小さく凝縮された光の宿った指を魔物に向け振りおろす。光は雷となり魔物へ飛ぶ。雷撃は魔物の眼前で弾けた。顔を焼かれ身を仰け反らせた巨大オークの足をリッドの槍が払う。

「グウッ」

短い悲鳴をあげた魔物は、肉が裂け血があふれた脛にかまわず、その足を蹴りだした。腹を蹴り飛ばされリッドが後方へ転がる。

さらに巨大オークは鎚を力いっぱい振り回した。リッドの後方から魔物に斬りかかろうとしていたクリムは、突進する足を止めた。目の前を鎚が通り過ぎていく。激しい勢いで振られた鎚に斬り裂かれた空気が巻き、突風が吹き抜けた。攻撃をかわし、剣を振りかぶり踏みこんだクリムの顔を暴れる風がなぶった。堪えきれず体勢が横に崩れる。

「クリムっ」

耳を貫いた叫びに顔をあげたクリムの視界いっぱいに、巨大な鎚の頭があった。

避けようと足に力をこめた時には、鎚はクリムの躰を捉えていた。全身を熱く激しい衝撃が襲い、次の瞬間には光と音が遠ざかっていった。

そして、無音の闇がクリムを包みこんだ。

「……リムっ。クリム！」

自分を呼ぶ声にクリムは目を見開いた。目の前にハーディの顔があった。

耳の奥で奇妙に歪んだ残響が響いている。
「よかった。間にあったんだね」
目の前のハーディの声がひどく遠くに聞こえた。
彼の手に橙に光る魔石が握られているのが見えた。レイズの魔法がこめられたものだ。
――瀕死の仲間を助ける魔法だって、サムルンティが渡してたっけ。
自分がレイズの魔法に助けられたのだと理解するのと同時に、薄くぼやけていたクリムの思考が、次第にはっきりとしていく。金属をぶつけあう甲高い音が耳に届いた。
顔をあげたクリムの目に、巨大オークと戦うリッドとサムルンティの姿が入った。
――いけない、ぼくもっ。
傍らに投げだされていた剣と盾を拾い、クリムは立ちあがった。
駆けだしたクリムに巨大オークの目が向けられた。瞬間、クリムの全身はすくみあがった。眼前に迫る鎚の姿が脳裡に浮かび、止めどなく汗が流れでた。それから一歩も動けず、クリムはただリッドたちが戦う姿を見つめていることしかできなかった。

*

マール峠に戻ってきたクリムたちは、村の目抜き通りでヘルナドの姿を見つけた。ヘルナドは、キャラバンらしきクラヴァットの一団と話しこんでいた。

「クラヴァットっていうことは、ファム大農場のキャラバンかな」
「うん……」
ハーディの言葉に、クリムはうつむいたまま答えた。鉱山の深奥で巨大オークと戦っている時に感じた息苦しさが、未だに消えずにいた。指先がずっと震えている。
「おお、おまえら、戻ったか。七日か……思ったより早かったな。で、ミルラの雫は」
「もちろん、楽勝だよ。ほら、このとおりばっちり」
「ま、問題なしね。ろくなもんは手に入んなかったけどさ」
「そうか。そいつは、なによりだ」
笑顔で頷きながらヘルナドは皆を見回した。
目があった瞬間、クリムの心臓は絞られるように縮んだ。息が詰まる。
クリムを見つめたまま、ヘルナドが目を細めた。じっと自分に注がれる視線に耐え切れず、クリムは顔を伏せた。
わずかに顔をしかめ、ヘルナドは髪を掻きむしった。
「わかった。とにかく、村に帰るぞ。おまえら、ちょっと待ってろ」
そういうと、ヘルナドはきびすを返しクラヴァットの一団のところに戻っていった。
「すまねえルアージュ、もう少し待っててもらうことになっちまった」
一団の中の女性に頭をさげ、ヘルナドは申しわけなさそうにいった。
「うん、わかった。待ってるよ。でも、もう少しだけだからね」

「ほんっと、わりい」
もう一度頭をさげて、ヘルナドは早足でクリムたちのところに戻ってきた。
「ねえ、今のって……」
「何でもねえから気にすんな。それより、とっとと出発の準備しろ」
クラヴァットの一団を気にするイ・リュの言葉を遮り、ヘルナドはクリムたちを急き立てた。
「初めての凱旋だ。いい顔で帰ろうぜ」
ヘルナドに背中を叩かれ、クリムは唾を飲み掠れた声で返事をした。

第三章 瘴気の村

1

麦畑が一面黄金色に輝き木々の緑が色濃くなったティパの村に、クリムたちは帰ってきた。村に入っていくキャラバンを大勢の村人たちが出迎える。ミルラの雫でいっぱいになったケージを持って荷車をおりたクリムたちに向け、たくさんの労いと賞賛の言葉が飛んだ。

「ご苦労だったの。水かけ祭の夜までゆっくり休んでくれ」

＊

真っ暗な夜空にクリスタルは青く淡い光を放っていた。広場の真ん中で装飾の施されたたいまつを手に一列に並んだクリムたちは、じっとそのクリスタルを見あげていた。たいまつの先でほのかに揺らぐ炎が彼らの顔に強い陰影を落としている。

クリスタルの前の石の台座には、ミルラの雫で満たされたクリスタルケージが置かれている。

クリムたちの背後には、村中の人々が彼らを取り囲むように集まっていた。

分厚い本を手にしたローラン村長が厳かな足取りでクリムたちの前を通り過ぎる。細かな刺繍の縫いこまれたゆったりとした服をまとった村長の白く長いひげと後ろに撫でつけられた白髪が、クリスタルの光にぼんやりと照らしだされていた。

クリスタルの前で足を止めケージに向かって立った村長は、手にした魔道書を開き重々しい口調で呪文を唱え始めた。村長の呪文にあわせ、ケージの中のミルラの雫が輝き始め、一粒また一粒と光の粒がケージから舞いあがっていく。

宙を漂う光の粒は、クリスタルの周りを回るようにくるくると舞っている。いつしか、ケージの中は空になり、無数の光の粒がクリスタルを取り囲み踊っていた。

「うわぁ、きれい」

イ・リュがため息混じりに声をもらした。

「ああ、近くで見ると違うな。去年まで見てたのと同じもんとは思えないぜ」

リッドも目を輝かせて、宙を舞う光の粒を見つめていた。

村長の声が張りを増す。それにあわせ、激しい勢いで飛んでいた光の粒が次々にクリスタルの中に飛びこんでいった。

すべての光の粒を吸いこむと、クリスタルは目がくらむほどの強い輝きを放った。その光にあおられるように、クリムたちの手の中にあったたいまつの炎が大きく揺らいで消えた。

クリスタルの発する強い光が緩やかに薄らいでいき、辺りは再び夜の色に包まれ、一帯に静寂が訪れた。

「よくやったぞ、ガキども」

沈黙を破り大きな声が聞こえた。セルキーの漁師ビド・ルの声だ。酒好きのビド・ルのことだ、すでに少々の酒を飲んでいて調子がよくなったのだろう。

彼の声をきっかけに、広場に集まっていた村人たちからも歓声が沸きおこった。様々な楽器で喜びの曲が奏でられ、曲にあわせ踊りだす人が現れ、いつしか広場は宴の場となっていた。

クリムたちも、すぐに村人たちにもみくちゃにされた。賞賛の言葉がいくつも浴びせられる。喜びに沸く人々の間を縫い、クリムは広場のはずれへとやってきた。クリスタルの周りで騒ぐ人たちから距離を取り、道の端に腰をおろす。

人ごみの中に誇らしげに皆の賞賛に応えているリッドの姿が見えた。サムルンティも集まった人たちに声を返している。イ・リュは両親や兄に自慢げに何か語っていた。普段書物を調べてばかりで表に出ることのないハーディの父もハーディとにこやかに語りあっている。

クリムは顔を背けるようにうつむいた。

皆に讃えられる度に、クリムは胃の辺りが締めつけられる感じを味わっていた。

村へ帰ってくる道中もずっとそうだった。なんでもない瞬間に、眼前に迫る巨大オークの鎚の記憶が脳裡に甦り、再び全身を激しい痛みが走り抜ける錯覚に襲われ躰が震えた。眠ろうと目を閉じると、心臓が強く脈打っているのを感じた。胃が重く、食べたものをすぐに吐きだしそうになる。ずっと、息苦しさが消えない。

道端にうずくまったクリムは、深いため息をこぼした。今もそうだ、膝を抱えるように組ん

だ手にはじっとりと汗がにじみ、指先が小さく震えている。
「おかえり、クリム」
頭上でした声に顔をあげると、ノアの笑顔があった。
「あ、うん。ただいま」
「ねえ、キャラバンの旅はどうだった。やっぱり、大変だったの？」
「そ、そうだね」
答えながらクリムは視線をそらした。
「……クリム、どうしたの？」
「え？　べつに、どうもしないよ」
心配そうな声をもらしたノアに、クリムは笑顔を向けた。
「でも……なんか、顔色わるいよ」
「そうかな。じゃあ……ちょっと、疲れてるのかも。ほら、キャラバンの旅から帰ってきたばっかりだし」
クリムは答え、勢いよく立ちあがった。わずかに足がふらついた。
「やっぱり、疲れてるみたい。帰って寝ることにするよ。じゃあね、ノア」
「クリム」
足早に去ろうとするクリムをノアが呼び止めた。
「ん？」

「あの……あのね……」
不安そうな目がクリムを見つめている。
「……ねえ、わたしにはいえない？　わたしじゃ、力になれないのかな」
泣きだしそうな顔のノアに、クリムは震える唇を強く噛んだ。
広場で騒ぐ村人たちの歌声や歓声が、ひどく遠くに響いて聞こえた。

2

「すまないね、クリム。疲れてるだろうに」
「そんなこといわないでよ、おじさん。毎年やってることじゃない」
ノアの父の言葉に笑顔で答えながら、クリムは刈り取られた麦の最後の一束を抱えあげた。
「でも、キャラバンの旅から帰ってきてからすぐだろ。毎日毎日、こうやって働いて」
「去年はちゃんと手伝えなかったから、今年は頑張ろうってずっと思ってたんだ。それに、こうやって躰を動かして働くのって、気もちいいから」
それは嘘ではなかった。水かけ祭の翌日から十日ばかり毎日ノアの家の畑で働いていたのだが、その間はあの巨大オークの記憶が脳裡をよぎることもなかったし、息苦しさも震えも襲ってこなかった。
――こうやってずっと村の中で普通に暮らしていけば、あの記憶も思いださないで、苦しい

思いもしないですむんだ。このまま、キャラバンの旅に出さえしなければ。それでいいじゃないか。そうだよ、キャラバンにはハーディだっているんだし。

山ほどの麦の束を積んだ手押し車に抱えていた束を乗せ、クリムは吐息をこぼした。

「クリムー」

家の窓から身を乗りだしたノアが呼んでいる。

「すずなりチェリーのパイ焼いたんだけど、クリムも食べていくでしょ」

「うん、すぐに行くよ」

手押し車に積まれた麦の山を縄で固定しながら、クリムは返事をした。

*

日が西に傾きかけた頃、クリムは麦が積まれた手押し車を押して風車小屋へ向かう坂を登っていた。ノアが隣を歩いている。

「ねえ、クリム」

「ん?」

「ほんとに、だいじょうぶ?」

「何が?」

「う、ううん……」

クリムはずっとうつむいたまま足を進めていた。
言葉が途切れた。車輪の軋む音だけが辺りに響いた。
何度も口を開きかけてはつぐみ、クリムはただ手押し車を押していた。
「……あのね、クリム」
「んー？」
「あのね……手紙、ありがとうね。すっごく嬉しかった」
ノアはさっきまでと違い明るい調子でいった。しかし、その声はわずかに震えていた。
「ミルラの樹って、ほんとうにきれいなんだろうね。わたしも見てみたいなって思った」
ノアの言葉に、クリムは思わず足を止めた。
「どうしたの、クリム」
急に立ち止まったクリムに、ノアは不思議そうに首をかしげた。
「あのさ、ノア……」
振り返り彼女を見た瞬間、いいかけた言葉がクリムの喉で詰まった。
「なあに？」
「あ、うん。ここまでいいよ。ほら、もうそこだし、日も暮れそうだから」
クリムがそういうと、ノアはわずかに眉をひそめた。が、その顔はすぐに笑顔に戻った。
「う、うん。そうだよね。じゃ、またね」
「ああ、またね。気をつけて」

手を振りながら坂を駆けおりていくノアを見送り、クリムは再び歩きだした。
風車小屋に入ると、石臼の前に置いた小さな椅子に腰をおろすクラウスのがっしりとした大きな背中が目に入った。
「父さん。麦、もらってきたよ」
クリムは深く息を吸い、大きな声でいった。
ざんばら髪を掻きながらクラウスが振り返る。その細い目がクリムを見た。
「ああ、端に置いておいくれ」
クラウスの手に、剣が握られているのが見えた。一年前、クリムが渡された剣だ。旅から帰ってきた日に自室の隅に投げだしてから、クリムは一度もそれに触れていない。
刃を見つめていたクラウスの目が、ちらりとクリムに向けられた。
「手入れの仕方は知ってるか？」
「え、うん。ヘルナドに教わった」
「そうか。ならいい」
鞘に剣を収めると、クラウスは椅子から立ちあがり手にした剣をクリムに突きだした。
「つらいことでもあったか」
戸惑いながら剣を受け取ったクリムに向かい、クラウスがぼそりといった。予期しなかった父の言葉に、クリムは大きく目を見開いた。
「なんで……」

「お前を見てりゃわかる」
まっすぐに自分を見つめる目に耐えられず、クリムはうつむいた。
「何があったかはしらんが、そんなにつらいならやめてもいいんだぞ」
「えっ、でも」
「そりゃ、キャラバンは村を守る大事な仕事だ。でも、だからって村のために自分を犠牲にする必要まではないだろ。おまえがやらなくても、ほかの誰かがやってくれるさ」
いいながらクラウスは、クリムに背を向け母屋につづく扉の方へ歩いていった。
「それでも、誰かがやらなきゃならない仕事ではあるがな」
扉に手をかけたクラウスは足を止め、振り返った。
「どっちにしろ、決めるのはおまえだ」
そういってクラウスは扉の向こうに姿を消した。クリムは、しばらくの間父のくぐった扉を見つめつづけていた。

*

「塩が五百と砂糖が五百と。全部で三百ギルね」
商店のおかみアリア＝クルトは商品を差しだしながら、威勢よくいった。
「じゃ、これで」

クリムが代金を差しだした時、店の奥の方から鋭いかけ声が聞こえてきた。
「今のは……？」
商品の詰めこまれた袋に伸ばしかけた手を止め、クリムは店の奥に目をやった。
「ああ、あれね。裏庭でね、ゲイルがミモリから槍の稽古を受けてるのよ。あれから半年くらいは愚痴ばっかりいってたんだけどね、最近少しずつ本気になってるみたい」
アリアは嬉しそうに顔をほころばせて語った。
「ミモリもね、今年は無理だろうけど、来年からならキャラバンに参加させても大丈夫だろうっていってるのよ。だから、その時は、よろしくお願いね」
「え、ええ。こちらこそ……えっと、それじゃぼくはこれで」
小さく頷きながら商品を受け取り、クリムは足早に店を出た。
商店を後にしたクリムは家に帰る途中、広場の隅で槍を手に素振りをするリッドの姿を見つけた。リッドは全身を汗にまみれさせながら一心に槍を振っている。彼の傍らには、兄の姿を見つめるリッドの幼い双子の弟と妹テッドとリュマの姿がある。
空中で身を翻し大きく槍を薙いだリッドと目があった。着地したリッドは、槍をおろし額の汗を手でぬぐった。
「よう、クリム。何してんだ」
「母さんに頼まれた買い物の帰り」
手にした荷物を軽くかざし、クリムは答えた。

「リッドこそ、何してたの」
「見りゃわかるだろ、稽古だよ。魔物が思ってたより強かったからな。オレももっともっと強くなんなくっちゃいけないって思って」
リッドが険しい目つきで手の中の槍を睨む。
「おまえもやっといた方がいいぞ、クリム。オレよりも弱いんだから。おまえだって、あんな目にあうのはもう嫌だろ」
「あ、うん……」
「なんだったら、いっしょに稽古してやってもいいぞ。一人でやるよりも得るものが多いかもしれないからな」
「そう、だね。でも、今はこれ持って帰らなきゃいけないから」
クリムは荷物を握った手に視線を落とし、うつむいたまま逃げるように駆けだした。

*

クリムは風車小屋の屋根の上に寝転がり、昼下がりの太陽が輝く空を眺めていた。緩やかな風に吹かれ、大きな雲がいくつも流れていく。
『あんな目にあうのはもう嫌だろ』
脳裡に昨日のリッドの言葉が甦る。

——そうだよ。嫌だよ。だからっ。だからぼくは……。

心の中で呟きながら、クリムは強く目を閉じた。

「やあ、クリム」

不意に間近で声がした。再び目を開けると、さっきまで一面の空だった視界いっぱいにハーディの顔があった。

「ほら、やっぱりここにいたでしょ」

「え？」

振り返り発せられたハーディの言葉に首をかしげながら、クリムは彼の視線を追った。そこには、屋根に登ってこようとするヘルナドの姿があった。

「ヘルナド。なんで」

「ここに来る途中であったんだ。クリムがどうしてるかって訊かれたからさ、連れて来たんだよ」

「なるほど。さすがに風車小屋の上だけあって風が気もちいいな。それに見晴らしもいい。ぼんやりとすごすにはいい場所だな」

ヘルナドは、クリムたちのやりとりなど聞いていない様子で大きな伸びをしていた。だらしなく乱れたぼさぼさ髪を掻きクリムたちを見ると、緩んだ笑みを浮かべた。

「ああ、俺のことは気にしなくていいぞ。おまえたちはおまえたちで好きにしててくれ」

「え？　クリムに用があったんじゃないの？」

「いや。どうしてるかって思っただけだよ」
そういってヘルナドは適当な場所に腰をおろすと背中に担いでいた弦楽器を爪弾き始めた。
「ふーん。変なの」
「それで、ハーディこそどうしたの」
「あ、うん。今日はね」
そういってハーディはいつものように持ってきた本を広げた。
それからしばらくの間、クリムはハーディと本を読んでいた。だが、物語の内容は少しも頭に入ってこなかった。開いたページを指さし楽しそうに語るハーディの言葉も右から左に素通りしていった。ハーディの笑顔だけが目の端にぼんやりと映っている。
「ねえ、ヘルナド」
わずかに会話が途切れた一瞬に、クリムはヘルナドに呼びかけた。一度大きく弦を弾き、ヘルナドは顔をあげた。楽器はきれいな和音を響かせた。
「どうした？」
「あんな大きな怪我をしたのに、どうしてヘルナドはまた旅に出たの」
クリムの問いに、ヘルナドは急に目つきを鋭くした。口元をゆがめ、乱れた髪を激しく掻きむしっている。
「どうしてっていわれてもな……」
「怖くなかったの？」

「そりゃ、まあ、怖かったな。でも、怖い思いをしたのは、あれが初めてじゃないからな」
「それなのに、どうして旅をつづけられたのさ」
尋ねながら身を乗りだし、クリムはヘルナドに這い寄った。
「どうしたの、クリム？」
首をかしげ問いかけたハーディをヘルナドが手で制した。
「ねえ、どうして」
「そうだな……対処できる余地があると思えたからじゃないかな」
「よく、わかんないよ」
かぶりを振ったクリムの目を、ヘルナドの鋭い瞳がまっすぐに捉えた。
「怖さっていうのは、また同じ目にあうんじゃないか、また同じ失敗をするんじゃないかって思いから生まれるだろ。だから、どうしたら同じことにならずにすむのかを考えるのさ。そうすりゃ希望が生まれて、恐怖を追い払える可能性も出るってわけだ。ま、そんな簡単にはいかないことも多いけどな。そういうことで、力が生まれる場合もあるって話さ」
「うん……」
力なくうなずいたクリムの脳裡に、また昨日のリッドの言葉が響いた。
「まあ、逃げるってのも一つの手さ」
そういって、ヘルナドはまた弦楽器を弾き始めた。

＊

その晩、クリムはベッドの上で膝を抱えて考えた。

父の言葉が、リッドの言葉が、ヘルナドの言葉が、耳の奥で響いている。ゲイルの家の奥から聞こえてきた剣を交える音が甦った。槍の稽古に汗を流すリッドの姿がまぶたの裏に映った。

その隙間からにじみでるように、巨大オークの姿が脳裡によぎる。

心臓がはじけるような感覚に襲われ、クリムは目を開けかぶりを振った。その時、視界の隅に壁際に置いたままの旅の道具が映った。

クリムはその中に置かれた剣をじっと見つめた。

「そうだよ。あんな思いは、ぼくだってもうしたくないよ。うん……」

呟きながらベッドをおり、クリムは剣を手に取った。

翌日から、クリムは毎日剣を振りつづけた。

不意に襲い来る巨大オークの残像を追い払うように一心に剣を振るった。

恐怖に負けない力を手に入れるため、ただ一生懸命に。

＊

色づいた木々の葉が風に舞い落ちる中、朝靄に包まれる村の入り口近くでクリムは去年と同じように仲間たちと共に荷物の積みこみを行なっていた。

「よう、どうだ」

食料の詰まった木箱を運んでいると、ヘルナドが肩を叩き声をかけてきた。

「とりあえず、まだ頑張ってみようと思う」

はにかみながら返したクリムの答えに、ヘルナドは満足そうに頷いた。

「ん、何？　あんた、旅やめるつもりだったの？」

ヘルナドとの会話を耳にしたのだろう、イ・リュが訝しげにクリムの顔を覗きこんだ。

「そんなことを考えていたのですか、クリム。何か、理由が？」

「ないよ。そんなんじゃないって。ほら、それより早く支度しないと」

詰め寄ってきたイ・リュとサムルンティに苦笑を返し、クリムは木箱を荷車に押しこんだ。

荷車の中には、水の詰まった樽や、しましまリンゴなどの果物や、野菜類や穀物、干し肉、魚の燻製が詰まった木箱が所狭しと並んだ。

「そんじゃ、とっとと出発するか」

ヘルナドは荷車を眺めて、そういった。その言葉にクリムたちはそろって目を見開いた。

「え？　出発するかって……ヘルナド、またいっしょに行くつもり？」

「おう」

「なんでだよ。オレたちだけでできるって、もうわかったんだろ」

「やり忘れてることが一つあったんだよ。ま、いいから。ほら、行くぞ」
そういうと、ヘルナドは一人でさっさと荷車に乗りこんだ。
「ま、しゃあねえか。ほら、いこうぜ」
小さく舌打ちしながらそういって、リッドがクリムたちを促した。彼につづいて、クリムたちは見送りに集まった村人の前に整列する。
「それでは、いってきます」
リッドが声高に叫んだ。彼の声にあわせ頭をさげ、見送りの人々の中にノアの姿を探し視線をさまよわせた。が、人だかりの中にノアの姿はなかった。
「誰を探してるのかなぁ」
しかめ面で人だかりを見つめていたクリムの視界にハーディのにやけ顔が入りこんだ。
「だ、誰も探してないよ。ほら、行こう」
ハーディを促し、リッドに引かれて村の外に歩きだしたパパオをクリムは追った。
「待って」
見送りの村人たちの言葉を割って聞こえてきた叫びに、クリムは足を止め振り返った。人垣を掻き分け、ノアが駆けてくる。
ノアはクリムの前で足を止めると、肩で数度大きな呼吸をし、わずかに上気した顔をあげた。
「ねえ、クリム。手、だして」
「え？　うん」

いわれるままにクリムが右手を出すと、ノアは手首に何やら巻きつけた。麦わらと赤や青の糸で編みあげられた手製の腕輪だった。
「これは？」
「お守り。クリムが元気でいられますようにって」
「……ありがとう」
クリムは手首に巻かれた腕輪を見つめ、頬を緩めた。
顔をあげると、わずかに頬を赤らめたノアと視線がぶつかった。目があった瞬間に顔が熱くなるのを感じて言葉を失い、クリムはただまっすぐに彼女を見つめた。
「ほらー、いつまでそうしてるつもりさ。いい加減、行くよ」
背後から飛んできたハーディの声に、クリムは小さく肩を震わせ短く息を吐いた。
「じゃ、じゃあ、行ってくる」
「うん。がんばってね」
腕輪をした右手を高く掲げ、クリムは村の外に向かって歩きだした。

3

実際に魔物を目の前にすると、クリムの躰はやはり強張った。
――駄目だ。戦わなきゃ。このまま怖がってちゃ、いけないんだ。

固くなった躰が動きだすのに一瞬の間ができた。勢いなく剣が振られる。空を切った刃の向こうに、槍を手に甲高い笑いをあげるゴブリンの姿があった。ゴブリンが跳ねるように踏みこんできた。槍が突きだされる。クリムは後方へと跳んだ。が、膝が震え力が抜けた。躰が後ろに倒れ、クリムはしりもちをつき地面を転がる。目の前に、槍を振りかざし自分を見おろすゴブリンの姿があった。

「ひいっ。来るな！　来るな来るな来るなっ！」

絶叫と共にクリムはでたらめに剣を振り回した。足で地面を掻き、ずるずると尻で這うように後退する。振り回した剣には、まるで手ごたえがない。

――も、もう駄目……無理だ……戦えないよ……。

クリムは重くなった腕をおろし動くのをやめた。槍に貫かれる自分を脳裡に思い浮かべ、じっと身を固くしていた。が、襲い来ると思っていた痛みは、いくら経っても訪れなかった。

「クリム、大丈夫ですか」

呼びかけられ目を開けたクリムの目の前にはサムルンティがいるだけで、魔物の姿はなかった。魔物は、少し離れた場所に炎に包まれ横たわっていた。

クリムは燃えさかる魔物の躰を茫然と見つめていた。

「おい、クリム。まじめにやれよっ」

怒鳴りながら、リッドが大またでクリムに近づいてきた。鼻先に槍が突きつけられた。

「なんだよ、その無様なかっこうは。ちゃんと戦えないんなら、帰れよ！」

眦を吊りあげ見おろすリッドに返す言葉が見つからず、クリムは下唇を強く噛んだ。
「やめなよ、リッド」
「うるさい。こんな奴を連れて、魔物の中を進めると思うのか」
「だからって」
「黙れっていってるだろ、ハーディ。だいたい、おまえもケージ持ってうろうろするだけで、戦いの中じゃ役に立たないんだ。これ以上、足を引っ張る奴が増えるのは嫌なんだよ」
「えっらそうに……」
猛然とまくし立てるリッドの言葉の間隙に、イ・リュの吐き捨てるような一言が飛んだ。
「何かいったか」
「偉そうに語ってんじゃないっていったのよ。そりゃ、そこでうずくまってうじうじしてるクリムも鬱陶しいけどね。それとおんなじくらい、あんたも鬱陶しいわよ」
「何だと！」
「だいたい、ハーディがいっつもケージを運んでくれるから、あんたは何にも考えないで槍振り回してられるんでしょ。そんなこともわからないでリーダー風吹かしてんじゃないっての」
せせら笑うイ・リュを睨むリッドの口から歯の軋る音がこぼれる。
ぶつかりあう二人の視線の間に、サムルンティの大きな手が割りこんだ。
「その辺にしておいてください。こんな場所で大声を出していると、魔物が寄ってきます。気がついたら周囲を囲まれてたなんてことになりかねません」

サムルンティが静かにいうと、リッドは鼻を鳴らし顔を背けた。
「わかったよ。先に進むぞ」
そういって、リッドは肩を怒らせ歩きだした。クリムはうつむいたまま彼の後につづいた。
少し離れた場所で黙って立っていたヘルナドが、頭を掻きながら小さなため息をこぼした。

*

クリムたちの間に充満していた険悪な雰囲気は荷車に戻ってもわずかも薄れなかった。
「ねえ、イ・リュ。今日は、何を食べたい？　何をつくろうか」
ハーディが呼びかけても、不機嫌そうな表情で木箱の間に躰を埋めていたイ・リュは黙ったままだった。
「じゃあ、リッドは？　何にしたらいいと思う？」
「うるさいな。食事は、おまえに任せてるだろ。好きにしろよ」
リッドは水の入った樽の上で貧乏ゆすりをしながら、苛立たしげに答えた。それを横目で見ていたイ・リュが鼻で笑い、リッドが彼女を睨んだ。
膝を抱えたクリムは、この重苦しい空気の原因が自分にあることを強く感じ唇を噛んだ。
助けを求めヘルナドを見やったが、彼は涼しい顔で弦楽器を爪弾くばかりだった。
「とにかく北に向かえ」

そう指示したきり、ヘルナドはクリムたちのことなど関心がないように黙ったままだった。ぎすぎすした空気を充満させたまま、荷車はひたすら北に進んでいた。

不意に荷車が止まった。幌を開け前を見ると、十字路に差しかかったところだった。御者台のハーディが身を乗りだし、道端に立てられた道標を見つめている。

「まっすぐ行くとアルフィタリアだって書いてあるけど、このまま進んじゃっていいのかな」

「いや、そこは右だ」

抱えた弦楽器に視線を落としたまま、ヘルナドがいった。その言葉に、リッドが怪訝な顔で振り返った。

「なんで。どうして、このままアルフィタリアに向かわないのさ」

「その前に行くところがある」

そういったヘルナドの目は、いつもと異なり鋭く睨むようなものだった。

「だから、その行くところってどこなんだよ。いいかげん、教えてくれてもいいだろ」

「……ティダの村だ。そこへ向かう」

「村？　だったらアルフィタリアでもいいじゃないか。なんで、そっちなんだよ」

「右だ、ハーディ」

声を荒らげるリッドを一瞥し、ヘルナドは低くそういった。

「うん、わかった」

ハーディが答え荷車が再び揺れだすと、ヘルナドはまた弦楽器に指を添わせ黙りこんだ。

*

それから数日が経過すると、周囲の様子が変わり始めた。辺りを被う緑の色がくすんだものになった。立ち並ぶ木々に葉が見られなくなった。中には、明らかに枯れているものもある。

「ちょっと、ほんとにこの先に村なんてあるの」

幌の中から顔を覗かせたイ・リュがしかめっ面で辺りを見回しながらいった。

手綱を握るクリムも同じ不安を感じていた。

景色はどんどんと荒れ寂れていく。不気味さを感じさせる枯れ木の林の中をさらに進んでいくと、前方に小高い丘が見えてきた。丘の上に村らしき影がある。ただ、村へつづく道は相変わらず荒れていた。

「村が、見えてきたよ」

御者台からクリムが声をかけると、ヘルナドが中から身を乗りだしてきた。

「こっからは俺が手綱を引く。おまえらはおりる準備をしとけ。武装を整えてケージを持っていくからな。食料も忘れるな」

「村に行くんじゃないの？」

「いいから、いわれたとおりにしろ」

そういって、クリムを押しこむように荷車の中に追いやると、ヘルナドは幌を強く閉じた。

首をかしげながら、クリムはいわれたとおり鎧を身につけ、背負い袋に入れられるだけの食料と水を詰めこんだ。

やがてパパオの肢が止まり、クリムたちは荷車をおりた。

一歩外に出て周囲の様子を見た瞬間、クリムは言葉を失った。リッドやハーディたちも同じように茫然と目の前に拡がる景色を眺めている。

「な、何だよこれ……」

リッドが掠れた声で呟いた。

「ティダの村だ」

ヘルナドが冷ややかにいい放った。

確かに、以前は村だったのだろう。一帯には、木や石を組みあげ造られた家が建ち並んでいる。だが、それはすべて崩れ、朽ちていた。壊れた家々の壁や屋根を黴や苔などの菌類が被い、無数の胞子が辺りを漂っている。村人の代わりに大きな芋虫型の魔物が徘徊していた。

「なんで、こんなことになってるの」

一歩足を踏みだすと、地面を被っていた菌類の胞子が舞いあがった。

「う……」

耐え切れなくなった様子で、イ・リュが口を押さえ道の端でうずくまった。

「これでも何十年か前までは、最も太陽に愛された村だといわれてたらしい」

いいながら、ヘルナドはゆっくりと村の中に歩を進めた。クリムは取り残されるのを恐れ、彼

の後を追った。リッドもハーディもサムルンティもイ・リュも、早足でヘルナドの後をついていく。

ヘルナドは村に入ってすぐの広場の隅で足を止めた。彼の前には、朽ちかけた掲示板らしきものが立っている。そこに『キャラバンは、もうすぐ帰ってくる、皆あきらめるな』と書かれてあるのが、かろうじて読み取れた。

「これって……じゃあ」

「そうだ。クリスタルの輝きが失われるまでキャラバンが帰ってこなかった。その結果が、この村の姿だ」

ヘルナドは重々しくそういった。彼の声もわずかだが震えていた。

「どうしてキャラバンが帰ってこなかったのか、俺は知らない。強い魔物に襲われたのかもしれない。単に力が足りなかっただけかもしれない。仲間たちを信頼できなかったのかもしれない。些細なことが原因で諍いがおこったためかもしれない。中の誰かが臆病風に吹かれた結果かもしれない。傲慢な者が仲間のことを考えずに暴走した末のことかもしれない」

「も、もう……」

「やめてくれ。わかったから」

悲痛な声でリッドが叫んだ。

「オレたちが背負ってるものの大きさとか重さとか、そういうの、わかったから」

リッドの言葉に強く頷き、クリムは剣を握る手に力をこめた。サムルンティもハーディも

無言で頷いた。
「あたしももうわかったからさ。だから、早いとこここ離れようよ。気持ち悪くって耐えられないわ」
そういってイ・リュはまた口元を手で被った。
「いや、奥へ進む」
「なんでよ」
「この村の奥にミルラの樹があるからだ」
「ミルラの樹って……どうして、こんなところに」
「さあな。村人たちの祈りが形になったのか、神がせめてもの報いにと置いたのか、力なき人々が滅んだ悲劇を嘲うために生えたのか、とにかくこの村にはミルラの樹がある」
静かにいって、ヘルナドがクリムたちを見回した。
「よし。行こうぜ、みんな。ミルラの雫を手に入れて、ティパに持って帰るんだ」
リッドの言葉に力強く答え、クリムたちは胞子が漂い魔物が跋扈する瘴気に包まれた廃村を進んだ。
魔物を前にすくみあがろうとする躰を捩じ伏せ、クリムは戦った。何度も何度も剣を振るい魔物と戦っていくうちに、クリムの全身を苛んでいた恐怖の感覚は、しだいに薄れていった。
目に映るものはすべて廃れ崩れたものばかりだった。自分の村に同じ道を歩ませないように

と強く思うと同時に、ひどく重苦しい何かが胸の中に沈殿していくのをクリムは感じた。そのせいか村の奥で、廃材を寄せ集めた様な巨大な魔物を倒し、ミルラの樹にたどり着いたときには疲れ果てていた。いつもの疲れ方とは明らかに異なる疲労感が全身に圧しかかっている。

仲間たちも同じような感覚を味わっているのだろう、皆うなだれ黙りこんでいた。

4

アルフィタリアはリルティの王が治める街だ。街の中央にクリスタルを中心にする広場があり、その周りに商店や鍛冶屋や宿屋などが並んでいて、さらにその外側を取り囲むように住宅街がある。そんな石造りの町並みを広場の奥に建つ王城が見おろしている。

昨晩書いたノア宛の手紙を宿の主人に預け、クリムは表に出た。

街の中では、いかつい鎧姿のリルティをよく見かけた。石畳の道を硬く大きな足音を響かせ、きびきびとした動作で歩いている。街を警護巡回している騎士たちだ。

商店を眺め歩いていたクリムは、広場の片隅に王城を眺めているリッドの姿を見つけた。

「おーい、リッド。何してるの」

「ああ、クリムか。ほら、見てみろよ」

そういってリッドが指した先には、王城の前に揃いの鎧で身を固め整列するリルティの一団の姿があった。

「アルフィタリアの騎士団だぜ」
整列する騎士たちの前に他の者よりも立派に装飾された鎧をまとった一人のリルティが歩みでた。おそらくは、団長だろう。
「諸君。今年もキャラバンの旅に出発する時期となった。今年は、数名の新人も加わった。よって、まずはティダの村へと向かうこととする。新人諸君は、そこで目にするものをしっかりと胸に刻んでもらいたいと思う」
騎士団長は、列の端の方でひときわ躰を固くしている者たちに顔を向けた。団長に見つめられた新人騎士たちは、鎧を鳴らしぎこちなく頷いた。
「ねえ、何見てるの」
不意に、背後から声をかけられた。振り返ったクリムの目の前に、買い足した食料を手にしたハーディとサムルンティが立っていた。
「なるほど、騎士団ですか」
「あ、ほんとだ。ケージ持った人がいるってことは、キャラバンなんだね」
「ああ、これから出発するところみたいだな」
「それでは、出発！」
団長の号令に、整列した騎士たちは派手に鎧を鳴らし敬礼をした。団長を先頭に、騎士たちがきれいな隊列で歩きだす。足音にさえ、わずかな乱れもない。
クリスタルの前を回りこむように広場を進んで、騎士の隊列はクリムたちの前を通り過ぎて

いく。と、不意に団長が足を止め、クリムたちを振り返った。目があったクリムは、息を飲み躰をわずかに強張らせた。
「君たちもキャラバンだな」
「はい。ティパの村のキャラバンです」
リッドは胸を張って答えた。
「ああ、ティパの。ふむ、相変わらずの混成部隊なのだな」
「どういう、意味でしょう？」
不思議そうにハーディが問い返した。
「ん？　いや、見たままをいっただけだ。他意はない。まあ、君たちも頑張りたまえ」
「ええ。あなたたちも、ご武運を」
リッドが背筋を伸ばし言葉を返すと、団長は小さく頷き騎士たちに合図し再び歩きだした。
クリムたちは去っていく騎士団の行進をまっすぐに見つめた。
「いいよな。やっぱ、かっこいいよ」
騎士団が遠ざかると、リッドは熱っぽいため息をこぼした。

5

アルフィタリアの南東に、ジャック・モキートの館と呼ばれる建物がある。魔物が住むとい

われる館だ。巨大な門、そびえる壁、家具も信じられないほどに大きなものだった。

その威容はアルフィタリアからも見えるため町の人々も不気味がっていた。だが、館に住むといわれる魔物は外に出ることがないらしく、魔物自体の姿を目にした人はひとりもいなかった。

「それって、不気味な建物なだけで、実は何にもいないんじゃないの？」

「いなけりゃ、その方がいいだろ。ミルラの樹は間違いなくあるらしいしよ」

そんなことをいいながら訪れた館の中には、期待と異なり多くの魔物がひそんでいた。

そして今、中庭を進んでいたクリムたちの前に、派手な装飾の外套をまとった毛むくじゃらな巨漢の魔物が立ちはだかっている。これこそが館の主人ジャック・モキートだ。

「ミルラの樹を求めてきた者どもか。まあいい、今はそれどころではない」

真っ赤な瞳でクリムたちを見おろし、ジャック・モキートはいった。

身構え魔物を見あげていたクリムは、小さな吐息をこぼし張り詰めていた全身の筋肉から力を抜いた。

その時、厨房につづく扉が開いた。クリムたちが抜けてきた扉だ。扉に寄りかかるように、料理人の服を着た二本足で歩くトカゲといった風情の魔物が立っていた。コックトンベリと呼ばれるその魔物は全身に傷を負い、今にも倒れそうだ。

「なんだ、その姿は。どうしたことだ」

荒く発せられたジャック・モキートの言葉に、コックトンベリは震える手でクリムたちを指

さし、そのままその場に崩れ落ちた。

「貴様らか！」

魔物の怒声に、クリムは剣を握る手に力をこめ左へ跳んだ。仲間たちもそれぞれに地を蹴った。一瞬遅れ、それまでクリムたちが立っていた場所に魔物の拳が叩きこまれる。

サムルンティの放ったファイアが魔物の顔を襲った。クリムは前へ跳び、間合いを詰める。毛を焦がしながら、ジャック・モキートがクリムに顔を向けた。左の拳が迫ってくる。クリムは膝を落とし盾を構えた。拳が叩きつけられ、重い衝撃が盾越しに伝わった。左腕がしびれる。抑えきれず躰が沈みこむ。

魔物の背後からリッドが襲いかかった。斜めに振りおろされた槍が魔物の背中を裂く。小さな呻きとともに身をのけぞらせたジャック・モキートは、しかしすぐに姿勢を戻し振り向きざまにリッドに拳を放った。もろに拳をくらったリッドの躰が地面を転がる。

「この化け物！　こっちだ」

クリムは地面を蹴って大きく跳びあがり、リッドに向けさらに一歩踏みこんだ魔物の背に斬りかかった。刃が後頭部に届くより一瞬早く魔物が振り返った。ジャック・モキートが腕をかざし顔を防御する。クリムの剣は、魔物の腕に深く食いこんだ。筋肉が刃をがっちりと抑えつける。

「う、く、抜けない」

ジャック・モキートが大きく息を吸いこんだ。クリムの背筋に悪寒が走る。魔物の腕に足を

かけ、食いこんだ剣を抜こうとクリムは踏ん張った。サムルンティがファイアを放ち、魔物の顔が炎に包まれる。

「さあ、クリム。今のうちに」

「わ、わかってるけど」

クリムはさらに両手と両足に力をこめる。大きくかぶりを振り炎を払ったジャック・モキートが、真っ赤な瞳でクリムを睨み口を開き不気味に笑った。と、突如抵抗が消えするりと剣が抜けた。支えを失ったクリムの躰が落下を始める。一瞬遅れ、魔物の口から冷たい息が吐きだされた。冷気がクリムの躰を掠め、吹き抜ける。背中から地面に落ちたクリムの右足が凍りついていた。

イ・リュのケアルで体力を回復したリッドが、再び背後から魔物に斬りかかった。大きく横に払った槍が魔物のふくらはぎを斬り裂く。

後方に転がるようにして躰を起こしたクリムも、攻撃をしかけようとした。が、凍りついた右足が動かず踏みこむことができない。

その時、イ・リュの放ったケアルの光がクリムを包んだ。しかし、右足を被う氷までは癒しの光では取り除くことができず、足先の感覚も戻らなかった。

「く、だめだ。動かない」

「なんでよっ」

イ・リュが苛立った声をあげた。クリムは動かない右足に力をこめ歯噛みした。

「これなら、どうです」
サムルンティの声と共にクリムの目の前で炎がはぜた。ファイアの魔法だ。
驚きの表情で振り返ったクリムに向かって、サムルンティは力強く頷いた。一瞬戸惑ったクリムだったが、すぐに右足が温かさを取り戻していることに気づいた。
「あ、ありがとう」
「かまいません。さあっ」
サムルンティの言葉に大きく一度頷いてからクリムは魔物に向かって駆けだした。
クリムの剣とリッドの槍が連続的に魔物を襲う。ファイアの魔法が魔物の躰を焼く。鋭い拳を何発も放ち襲いかかってきたジャック・モキートは、ついに崩れ落ち膝をついた。
「とどめだ」
叫びとともにリッドが大きく踏みこんだ時、背後で勢いよく扉を開く大きな音が響いた。
クリムは、その音に思わず振り返った。
「あなた！」
戸口から大きな扇子を手にした上半身が人間の女性で下半身が蛇という姿の巨大な魔物が血相を変えて迫ってくる。
「来るな」
片膝をつきうずくまったジャック・モキートが、震える手をあげ女性型の魔物を制した。
「でも、あなた……その様子では」

「くれば、おまえも傷つくかもしれん。ここは、わしに任せておけ」
「あなた……」
巨大な魔物同士のやり取りに、クリムは妙な違和感を覚えた。
「みんな、今のうちに奥に行こう」
耐え切れず、クリムは叫んだ。
「何いってんだよ。このまま倒しちまえば」
「でも……」
「たしかに、これだけ巨大な魔物を二体まとめて相手にするのはつらいでしょう」
リッドが険しい目つきで、二体の魔物を見た。ジャック・モキートはうずくまった姿勢のまま、それでも拳に力をこめている。彼の妻らしき女性型の魔物は、主人を助けに行くべきかどうかを迷っている様子で、クリムたちに少しずつ近づいてきている。
「わかった。みんな、走れ！」
リッドの声で、クリムたちはいっせいに館の奥に向かって走りだした。中庭を抜ける時、クリムは魔物たちを振り返った。女性型の魔物が、ジャック・モキートに肩を貸し助け起こしている姿があった。

＊

ミルラの雫がクリスタルケージの中に落ちるのを見届け、クリムは深いため息をついた。
「どうしたの、クリム」
ハーディが心配そうな顔でクリムを見た。
「今回みたいなのは、ちょっと嫌だなって思ってさ」
「また、そんなこといってるのかよ」
リッドがとがめるような目で振り返った。
「そうじゃなくって。ここの魔物たちって普通に暮らしてただけでしょ。ミルラの雫を手に入れるためとはいえ、それを襲うっていうのは気もちのいいものじゃないじゃない」
「なんでよ?」
イ・リュが首をかしげた。リッドも理解できないといった顔をしている。
「普通に暮らしてたって……魔物だぞ」
「そうよ。だいたい、先に襲いかかってきたのは、あいつらの方じゃない」
「そうじゃなくってさ」
「確かに、ここの魔物は他の所とは少し異なった感じがしましたね」
何かを考えているのか、サムルンティは仮面のあごの辺りに手をあてながらいった。
「今までに遭遇した魔物には、ここの魔物たちのような人間臭さは感じられませんでしたし」
「そうだよね。魔物があんなに本を読むなんて思わなかったよ」
ハーディが感慨深げにそういった。

「本？」
全員がいっせいに怪訝な顔をハーディに向けた。
「ほら、書庫があったじゃない」
確かに、館の中には壁がすべて書棚で埋められた部屋があった。書棚の中いっぱいに、自分の背丈ほどもありそうな本が隙間なく詰めこまれていたのをクリムも憶えている。
「あれだけの本を読んでるってことでしょ。瘴気とかクリスタルとか魔物のことについて書かれてるらしい本まであったよ。すごいよね」
楽しそうに語るハーディを見て、リッドとイ・リュが大きなため息をこぼした。
「そういうことにだけは、しっかり反応してんのかよ」
「さすが、ハーディ。あんた、すごいわ……」

6

ティパの村は水かけ祭に沸きかえっていた。喜びの曲が奏でられ、村中の人々が踊りを踊ったり酒を飲んだりと騒いでいる。
村人たちに囲まれ次々と賞賛の言葉を浴びたクリムは、去年は感じられなかったすがすがしい気分と大きな達成感を味わっていた。
不意に袖が引かれた。ハーディだった。

「どうしたの？」
「なんか、ヘルナドが呼んでる」
「うん、わかった」
村人たちの声に軽く答えながら、クリムはハーディの後について広場のはずれへと向かった。
クリムたちがついたときには、ヘルナドの前にはすでにリッドとサムルンティとイ・リュが立っていた。
「どうしたの、ヘルナド」
クリムが尋ねると、ヘルナドは小さく頷きゆっくりと五人を見回した。
「おまえたちに渡しとかなきゃいけないものがあってな」
「渡すものって、こんな時にわざわざ？」
「ああ。今が一番いいだろうと思う」
そういって、ヘルナドはクリムたちの前に一冊の本を差しだした。表紙に豪奢な装飾の施された少し古びた感じの分厚い本だった。
「何、これ？」
「ティパの村のクリスタルキャラバンの年代記だ」
「年代記？」
「そうだ。この村のキャラバンが代々記してきた記録が、この中に収められている」
その言葉にリッドが唾を飲んだ。今まで興味なさげだったイ・リュも、まじまじと本を見つ

めていた。
「これからは、おまえたちがこいつの新しいページを埋めていくんだ」
「え？　じゃあ……」
「ああ、来年からはおまえたちだけで旅に出るんだ。これが俺の最後の役目ってわけだな。さあ、受け取れ」
そういって、ヘルナドは本を持つ手を突きだした。
目の前に年代記が差しだされたことに戸惑いながら、クリムは皆を見回した。隣に立っていたリッドが、早く受け取れといわんばかりにあごで促す。クリムは頷き、両手で本を受け取った。年代記だと聞いたせいだろうか、本はひどく重く感じられた。
「じゃ、がんばれよ」
「はい」
力強く発せられた五人の声は、きれいにそろっていた。

第四章 災厄の兆し

1

一行は街道の北の果てまで来ていた。道は大陸を南北に貫く大河ジェゴン川の源流である巨大な湖のほとりまで達し、周囲には深い緑をたたえる針葉樹が無数に立ち並んでいる。瘴気の中であることを忘れさせるような静かで清々しい景色だった。

街道を進むクリムたちの前方に、立ちこめる霧の中からぼんやりと建物の影が浮かびあがってきた。ユークの集落シェラの里だ。

「どっから渡ったらいいんだろう」

里の入り口手前で荷車をおりたクリムたちはそろって困惑した。彼らの目の前で道は途切れ、細い谷川が行く手を遮っていた。谷の向こうに集落は見えるのだが、川を渡る方法がわからない。周囲を見回すと、谷の手前にぽつんと一人たたずむユークの姿があった。

老齢のユークは、細かな文様が無数に縫いこまれた長衣をまとい刺繍の施された背の高い帽子を仮面の上に乗せている。

「なんか、話しかけづらい雰囲気だな……」

たじろいだ様子のリッドの言葉にクリムたちは頷いた。そんな彼らをよそに、サムルンテ

ィが荘厳な雰囲気をかもすユークの前に歩みでて軽く頭をさげた。
「すみません。里に入る方法を知りたいのですが」
「ここよりほかに道はありませんな」
「では、どうすればよいのでしょう」
サムルンティがそう訊くと、老齢のユークは後方で成り行きを見守っていたクリムたちに視線を向けた。
「あなた一人であれば同族のよしみで橋もかけられますが、他の種族の者がいてはの……里の者との友好の証を示してもらえるのならよいのだが」
「それでしたら、あります」
サムルンティはそういうと懐を探り、中から小さな銅貨のようなものを取りだした。以前にシェラのキャラバンのアミダッティという若者にもらったものだ。
「ふむ、確かに。よろしい、橋をかけましょう。少し、さがっていてもらますかな」
そういった老齢のユークは、サムルンティが数歩後退するのを見届けると谷に向かって両腕を大きく広げた。
老齢のユークが短い呪文を唱えると、何もなかった谷に白く輝く光の橋が架かった。
「さあ、どうぞお通りくだされ。ようこそ、シェラの里に」
クリムたちの方に向きなおると、老齢のユークはそういって軽く頭をさげた。
「まったくさ。なんで、こんなめんどくさいことしてんのかしら」

橋を渡りながら、イ・リュは唇をとがらせていた。
「ユークというのは、長い間虐げられていたと伝えられています。きっと、その名残でしょう」
「本で読んだことあるよ。昔、大陸制覇を目指していたリルティが異形であるっていう理由で、ユークを疎んでいたんだって」
「ふーん」
イ・リュは興味なさげに頷きながら、隣を歩くリッドをいやらしい目で見た。
「な、なんだよ。そんなの大昔の話だろ」
「そうですね。ですが、今もユークは異質な存在と見られることが多いそうですから」
「そりゃ、そうかもね」
「おいっ」
リッドに睨まれ、イ・リュは不満そうに顔をしかめた。
「何よ、ほんとのことじゃない。サムルンティだって相当変わってるわよ。それで何か問題があるわけ？」
「いや、だって、そりゃ、そのいい方はよ」
狼狽した様子のリッドの言葉を遮るように、サムルンティが笑い声をあげた。
「なるほど、そうですね。そうかもしれません」
何がおかしいのか、サムルンティはけらけらと笑いながら橋を渡っていった。

首をかしげながらサムルンティの後ろ姿を見ていたクリムは、意見を求めようと隣を歩くハーディに目を向けた。が、彼の姿はそこにはなかった。ハーディを探し周囲を見回したクリムは、橋の中ほどで足を止め景色を眺めている彼を見つけた。

「どうしたの、ハーディ」

クリムはハーディに駆け寄り尋ねる。振り返ったハーディは、クリムと目があうと笑みを浮かべた。

「前に読んだ本に、『ユークは、北の果ての辺境へと追いやられた』って書いてあったんだよ。それを思いだしたら、ずいぶん遠くまで来たんだなって気になってね」

「そうだね。街道の南の果てのティパから、北の果てのシェラの里だもんね」

「毎年思ってたんだ。世界ってなんて広いんだろうって。村にいるときは、こんな広い世界があるなんて考えもしなかった。それまで知ってた僕の世界では、村の外は無限に拡がる瘴気の海だったんだ」

遠くを見つめるように目を細め、ハーディはまた周りの景色に視線を転じた。

「ハーディ、どうかしたの？」

「……ん、何で？」

「なんか、ちょっと、いつものハーディじゃないみたいだから」

「そんなことないよ」

ハーディは肩をすくめて、再び微笑んだ。

「だから、遠くに来たんだなって思っただけ。それだけだよ。さ、行こう。クリム」
そういって小走りに里に向かうハーディの後ろ姿を、クリムは首をかしげながら見つめた。

*

大きな湖には大小様々な島が浮かんでいる。そこに石造りの建物が建ち並び、ユークたちが生活をしていた。波一つない湖面には靄がかかり、ひんやりとした空気が漂っている。ここに住むユークたちの静かで穏やかな気質もあり、研ぎ澄まされた静寂が里全体を包んでいた。
その静けさの中で、クリムたちは休息の日々を過ごしていた。
しかし、里のはずれに建てられた学校だけは少し趣が違った。ユークの持つ知識を学ぶべく、ほかの村や町からキャラバンに連れられてきた子どもたちが集まっていて、うるさいほど賑やかだった。
そこで講義をしている初老のユークを相手に、ハーディが何やら熱心に話しこんでいるのをクリムは見つけた。
「そのように申されてもな」
初老のユークは、困った様子で仮面のてっぺんを掻いている。
「何でもいいんです。似たような話とか、いい伝えとかでも」
「思い当たらんの。調べれば、何かでてくるやも知れんが。すぐにはわからん」

「そうですか……」
ユークの答えに、今度はハーディが落胆した様子で髪を掻いた。
「何してんの、ハーディ。もう、出発するよ」
「あ、うん。今行く」
クリムが呼ぶと、ハーディは初老のユークに一礼し駆け寄ってきた。
「何の話をしてたの？」
里の入り口に向かって歩きながら、クリムは尋ねた。
「前に変な詩を見つけたの憶えてる？」
「ああ、うん」
「シェラの里に住む古老のユークなら、そういう古い話に詳しいかなって思ってね」
「まだ気にしてたんだ、あの話」
「だって、全然意味がわかんない話なんだもん」
そういってハーディが苦笑した時、里の入り口に集まったリッドたちの姿が見えてきた。
「おまたせ」
クリムとハーディが近づくと、リッドとイ・リュが険しい表情で二人を見た。
「おまえらも、何とかいってくれよ」
「な、何？　何があったの？」
「サムルンティが、ここに残るっていうのよ」

苦虫を噛み潰したような顔でイ・リュがサムルンティを一瞥していった。サムルンティはいつもどおり泰然としていた。

「へ？」

「どういうこと、サムルンティ」

「魔術の研究がしたいのです」

「これだよ」

「あんたね、そんなこといってキャラバンはどうするつもりよ」

「ですから、しばらく休ませていただきたいと。私のことは放っておいて、あなたたちは旅をつづけてください」

「ずいぶん勝手ないいぶんよね」

「承知しています」

「なんか、テコでも動かない感じだね。これは、説得は無理なんじゃない。サムルンティのいうとおりにすれば？」

「何いってんの、あんた」

詰め寄ったイ・リュを手で制し、ハーディはサムルンティを見た。

「だって、一生ここで研究しようっていうわけじゃないんでしょ」

ハーディの問いに、サムルンティは深く頷いた。

「それで、その研究っていうのはキャラバンの旅に役立つんでしょ？」

「そう……ですね。確かに私自身のためではありますが、そのことが今後の私たちの旅の役に立つと信じてはいます」
「ほら。それならいいじゃない」
笑顔でいうハーディに、リッドが険しい顔で首を激しく横に振った。
「だから、そういう問題じゃないだろ。オレたちは、村の命運を託されて旅に出てるんだぞ。それを勝手に抜けるなんてことが許されるわけないだろ。それに、調和の掟だってあるじゃないか」
「わかっています。それを承知でお願いしています」
「お願いって、あんたねぇ……」
「ねえ」
おずおずとクリムが口を開くと、皆の目がいっせいに彼に向けられた。
「魔術の研究って何をするの。サムルンティが求めてるものってなんなの。ここでなくっちゃ、できないことなんでしょ」
クリムの質問に、皆納得したような顔で頷きサムルンティを見た。
「永久魔石を手に入れたいのです」
「永久魔石？　何それ？」
「言葉通り恒久的に使用できる魔石です。古代ユークの知識として存在するといわれていますから、シェラであればその記録も残ってるはずです」

「それって、もしかして将来のキャラバンにも伝えられること？」
「まだ知りえないことですから何ともいえませんが、知識なのですから記録すればおそらくは可能でしょう」
「だったら、いいんじゃない。問題ないよ」
嬉々とした顔でいうハーディに、リッドやイ・リュも不満そうな顔ながら頷いた。
「わかった。しかたねえ、おまえのいうとおりにしてやるよ。でも、一年だけだからな。来年必ず迎えに来るから、そん時はわがままいわないでキャラバンに戻れよ」
「わかりました」
そういって、サムルンティは深く頭をさげた。
「本当にすみません。ありがとうございます」
「もういいわよ。でも、ちゃんと勉強して、しっかり役に立つ力を身につけといてよね」
「ええ、必ず」
「じゃ、来年に」
サムルンティに見送られ、クリムたちはシェラの里を出発した。

*

「でよ、これからのことなんだけどな」

シェラの里を離れた最初の夜、食事の最中にリッドが深刻そうに口を開いた。
「何よ、これからって」
「魔物との戦いだよ。ずっと考えてたんだけど、やっぱりサムルンティの魔法は重要だった気がするんだ。オレも何度も助けられた憶えがある。その魔法抜きで戦うってのは、結構つらいんじゃないかって思ってな」
リッドの言葉にクリムは深く頷いた。
「でもさ、魔法はべつにサムルンティじゃなくっても、魔石さえあれば使えるわけじゃない。そんな気にするほどのこと？」
イ・リュは何でもないことのようにいって、肩をすくめた。
「その魔法を使う役割を誰かが代わる必要があるだろ」
「代わりって、あたしはイヤよ。ケアルでの回復だって、なんか成り行きであたしがずっとやってるけど、あれだけでもめんどくさいんだから。ねえ、ハーディ」
突然名前を呼ばれたのに驚いたのか、ハーディは目を丸くしていた。
「え？　僕？」
「あんたやんなさいよ。今は、ケージを持ってるだけなんだから、魔法を使う余裕くらいはあるでしょ」
「う、うん、そうだね。やってみるよ」
少し緊張した面持ちで、ハーディは頷いた。

2

マール峠まで戻ってきたクリムたちは、進路を西に取りジェゴン川に向かった。ジェゴン川は大陸を東西に分断する大河だ。川に橋はなく、船で渡る他に越える術はないようだった。

「なによ、その一人五十ギルって。暴利じゃない」

トリスタンと名乗った渡し守のリルティが提示した金額に、イ・リュが声を荒らげた。

「俺にも生活があるんだよ、嬢ちゃん。嫌なら、他をあたってくれ」

「他って、他にも渡し船があるんですか？」

クリムが尋ねると、トリスタンはにんまりと笑った。

「ないね」

「……仕方ないよ。お金払って船に乗ろう」

「何か、納得いかない」

イ・リュは不満げな顔でいった。

「なんだったら、イ・リュの分は僕が払ってもいいからさ」

ハーディがそういうと、イ・リュは鋭い目つきで彼を睨んだ。

「お断りだわ。そういうのって、嫌いなのよ」

そういうと、イ・リュは叩きつけるように金を払い、肩を怒らせながら船に乗りこんだ。

全員が乗りこむと、船はすぐに桟橋を離れた。
「それにしても、おっきな船だよね」
クリムは、船を見回しながらため息をこぼした。その船はかなり大型のもので、幌のように船体を被う大きな帆が張られていた。川を横切るだけにしては大げさすぎるように思える。
「そりゃ、海にも出られるようにしとかなきゃいけないからな」
「えっ。川の外にも出るの」
渡し守の言葉に、ハーディが目を輝かせた。
「おうよ。ライナリー島とかキランダ諸島にも連れてってやれるからな。行く用事ができたときには、声をかけてくれ」
ライナリー島もキランダ諸島も南方の海にある島だ。ライナリー島にはセルキーが集まり住んでいるルダの村があり、キランダ諸島の中のキランダ火山にはミルラの樹があるのだと聞いたことがある。
「海に浮かぶ島かぁ、どんなとこなんだろう」
「だよね。考えただけでわくわくしてくるよ。早く行ってみたいな」
クリムとハーディが下流の方を眺め声を弾ませていると、イ・リュが小さく鼻で笑った。
「どうせ、また馬鹿高い運賃取るんでしょ」
「まあな。それなりの手間賃はもらうさ。ほら、到着だぞ」
苦笑気味にトリスタンがそういったのとほとんど同時に、船の右舷が桟橋にぶつかった。

「これで、五十ギルなわけ。まったく、くつろぐ暇もないじゃない」
そういったイ・リュの眉間には、深いしわが刻まれていた。

3

ハーディの放ったファイアは魔物を捉えられず、地面を焼いた。何もない空間で燃えあがった炎が周囲を明るく照らし、洞窟の壁に長い影がいくつも躍った。
「ちゃんとやんなさいよ。さっきから、全然当たってないじゃない」
「ごめん。でも、魔物の動きが速くって」
背後でのやり取りを聞きながら、クリムは魔法をかわした半人半魚の魔物に斬りかかった。クリムの攻撃よりも一瞬早く、鋭い爪を備える魔物の手が振りおろされる。魔物の爪を盾で受け、クリムは剣を突きだした。刃は、鱗に被われた魔物の腹に深々と突き刺さった。短く呻きをもらした魔物は、それでもかまわずにとがった爪の先でクリムの顔に狙いを定めた。
「やらせるかっ」
クリムは奥歯を強く食いしばり、剣を横に払った。剣が魔物の腹を真横に裂く。
多量の血を腹からあふれさせながら、それでも魔物は怯むことなく腕を突きだした。身をひねったクリムの顔を魔物の爪が掠める。爪と共に突風が吹き抜け、髪が散る。勢いに圧されクリムの躰は後方に倒れる。魔物がのしかかってきた。鋭い牙の並ぶ口が大きく開かれ眼前に迫

った。

――くそっ。こんなところで、やられるわけにはいかないんだ。倒れるわけには。

「おまえなんかにっ！」

絶叫と共にクリムは剣を縦に振りおろした。刃が魔物の脳天を強く叩く。開かれた口をつぶされるように閉じ、魔物は激しく頭を揺さぶった。さらに数度、叫びもろとも剣を振りおろす。ぐらぐらと頭を揺する魔物の胸を蹴り飛ばすと、魔物は転がるように後ろに倒れた。転がる魔物を追って立ちあがり、クリムは剣を振りかぶった。その時、クリムの目の前で魔物の躰が炎に包まれた。流れでた汗に全身をぬらし、クリムは肩で息をしながら燃え尽きていく魔物を眺めていた。

「やった。やっと当たったよ」

「はいはい。よかったわね」

はしゃぐハーディを軽く受け流しながら、イ・リュがケアルの魔石を左手に握り右手をクリムに向けて突きだした。疲弊したクリムの躰を淡い光が包む

「イ・リュ、こっちも頼む」

荒い呼吸でリッドがいった。全身に小さな傷をいくつも刻んだリッドは、横たわるトカゲと人をあわせたような姿の魔物の胸に突き刺した槍を支えに立っていた。

無言で頷いたイ・リュが、リッドにケアルをかける。

魔物の気配がなくなり、周囲に静けさが戻った。洞窟の中は薄暗く、絶えず風が流れている

ために空気も冷たい。戦いの最中には余裕がないので気にならなくなるが、こうして静けさが戻ると背筋が震えるような不気味さを感じる。

「やっぱり、サムルンティみたいにはいかないな」

槍で肩を叩きながらリッドは小さなため息をこぼした。

「うん、ごめん」

「しかたないよ。慣れてないんだし」

「でも、どうしてだろう。サムルンティは、構えてからもっと早く魔法を放ってたのに。どうやったら、あんなふうにできるんだろ」

「無理なんじゃないの」

イ・リュが冷ややかにいい放った。ハーディが泣きそうに眉根を寄せて彼女を見る。

「あんた、ユークじゃないし。サムルンティみたいに魔法のことも知らないじゃない」

「ああ、うん。そうだね」

「それでも、やってもらわなくちゃ困るけどな」

「うん、わかってる。頑張るよ」

ハーディは真剣な表情で何度も頷いた。

「よし。こんな状況だ。魔物も今までの奴らより強力な感じだしな。慎重に進むぞ」

リッドが皆を見回した。クリムは頷き、リッドとともに前に立って歩き始めた。

「ねえ、それよりさ」

少し進んだところで、イ・リュが不安そうな声を出した。
「何か、いろいろ分かれ道を進んでる気がするんだけど、あたしたちちゃんと帰れるの？」
足を止め振り返ったクリムは、背後に伸びる道を目にして顔をしかめた。確かに、このセレパティオン洞窟は複雑に入り組んでいた。どこをどう通ってここまで来たのか、クリムはすでに憶えていない。
「ああ、それは大丈夫。道は僕が憶えてるから」
「……ほんとに？」
「うん。そういうのは、任せてよ」
ケージを抱えたハーディは、そういって屈託のない笑みを浮かべた。
意気揚々と歩くハーディの背中を見送り、クリムはもう一度歩いてきた道を振り返った。
――ぼくには、そんなことはできない。ぼくは……。

*

巨大なミミズの魔物は、苦痛の叫びのような鳴き声をあげのたうち回っていた。魔物の背には、槍を突きたてたリッドが乗っている。暴れまわる魔物に、リッドは振り落とされないようにしているのが精一杯のようだ。突きたてた槍に必死の形相でしがみついている。重量のある巨体がのたうっているため、クリムは魔物に近づくこともできなかった。

槍が抜けた。リッドの躰が空中に放りだされる。
「リッド！」
クリムは飛ばされたリッドを追って走った。
全身を傷だらけにして暴れまわったミミズの魔物は、自らが這いだしてきた穴にものすごい勢いで潜りこんでいった。
落下したリッドをクリムは受け止めた。が、重さと衝撃に耐えられず、クリムはそのまま後ろに倒れ、地面で頭を打った。
「やっぱり、サムルンティの魔法なしってのはつらかったな」
「うん。でも、これでミルラの雫、手に入るよね」
リッドの下敷きになりながら、クリムは洞窟の奥に見えるミルラの樹に目をやった。
「ああ。でも、もっと何か対策を考えないと、危険すぎる」
「うん……そうだね」
「だったら、リバーベル街道に行くのはどうかな」
駆け寄ってきたハーディが倒れたままの二人に手を差し伸べながらいった。
「あそこなら、一度行ったんだから道もわかってるし」
「ああ、なるほど。そいつはいい」
ハーディに助け起こされながら、リッドが答えた。
「それよりも、まずやることやって、こっから出るのが先でしょ。ハーディ、ほんっとに道憶

えてるんでしょうね」
「もう、信用ないなぁ」
苦笑しながら、ハーディはクリスタルケージを抱えミルラの樹に向かって歩きだした。

*

「ね、ちゃんと憶えてたでしょ」
太陽の光の下に出ると、ハーディは自慢げに皆を振り返った。その言葉に答えるように、イ・リュが大きなため息をこぼした。
「ちゃんと……のわりには、散々歩き回った気がするんだけど」
「しかたないよ。行きに迷いながら進んだ道をそのまま戻ったんだから」
「なんだよ。じゃあ、もっと簡単に帰ってこれたかも知れないんじゃないか」
疲れきった様子で、リッドがその場に腰を落とした。
「そんな道までは、僕知らないよ」
「おかげで歩き疲れたわ。もう、一歩も動けない」
イ・リュも倒れるように座りこんだ。
「誰も洞窟の地図がわかんなかったんだし、出口がわからないで途方にくれるより全然よかったじゃない」

苦笑しながらいって、クリムも腰をおろした。
「遅いクポっ」
パパオの傍らから郵便配達のモーグリがふよふよと飛んできた。
「もう、何日も何日もここで待ってたクポ」
「ごめん、洞窟で迷っちゃって。おいしいご飯をご馳走するから、機嫌なおしてよ」
ハーディがそういうと、モーグリは細い目の尻をわずかにさげた。
「それなら、許すクポ。さっそく手紙を配ってご飯にするクポ」
あっさり機嫌を直したモーグリは、漂うように飛び回りクリムたちに手紙を配り始めた。
封筒の裏に書かれたノアの名を確認し顔をあげたクリムは、残った手紙を見て首をひねっているモーグリの姿を目に止めた。
「サムルンティさんはどうしたクポ。手紙、いらないクポ？」
「ああ、あいつはここにいないぞ」
「いないって、どうしてクポ。それでは手紙が渡せないクポ」
「シェラの里にいるんだよ。だから、手紙はそっちに届けてくれよ」
「わ、わかったクポ。そっちに届けるクポ。シェラの里……」
そういって頷いたモーグリは手紙の宛名をじっと見つめ、「シェラの里。シェラの里」と呪文のようにしばらく繰り返していた。と、頭の先にぶらさがった赤いもこもこした塊が数度ほのかに瞬いた。

「間違いなく届けるクポ」
モーグリはそういって笑うと、サムルンティ宛ての手紙を胸に提げた鞄にしまった。

4

セレパティオン洞窟を出たクリムたちは、ジェゴン川に戻る途中で別の道に入りファム大農場へと向かった。
ファム大農場は、クラヴァットが築いた農耕の集落だ。まだ青々とした背の低い麦が埋め尽くす麦畑も大きな木が無数に並ぶリンゴ畑もティパの村のものの数倍はありそうなほどに広く、多くの牛や豚が広大な牧場をのんびりと歩き回っている。その景観は、やはり村よりも大農場という名がふさわしいだろう。
ジェゴン川との分かれ道を越えて四日ほどで、荷車はファム大農場の入り口に差しかかった。農場のはずれの小屋にパパオを繋いだ。小屋には、何頭もの牛がいて、その鳴き声に落ち着かない様子のパパオはきょろきょろと周りを見回している。
「ごめんよ。しばらくガマンしててくれよ」
集落の中に入ったクリムたちは、村の広場に農作業服を着たクラヴァットたちが集まっているのを目にした。人だかりの真ん中に、以前にマール峠の村で見たファムのキャラバンの姿がちらりと見えた。

「キャラバンが帰ってきたところなんだ」
村人たちに取り囲まれ笑顔を返すキャラバンを見て、クリムは呟いた。
「さあ、水かけ祭の準備だ。みんな、張りきれよ」
誰かがいい、集まった人たちのほとんどはぞろぞろと集落の奥の方へと歩きだした。その場には、キャラバンのメンバーと数人が残っていた。
「何か、忙しそうだよね。宿、泊めてもらえるのかな」
「平気だろ。ティパでだって、準備に忙しいからって店までは休まないぞ」
リッドが答えたのとほぼ同時に、イ・リュが頓狂な声をあげた。
「ちょ、ちょっと、あれ見てよ。あれ」
「なんだよ……えっ」
怪訝そうにイ・リュに向けられたリッドの顔は、彼女の指している先に目をやってすぐに驚きの表情に変わった。クリムも同じように、目を丸くしてイ・リュの示したものを見ていた。
彼女の指先には、よく見慣れた顔があったのだ。
「ヘルナド！」
思わずあげた大声に、ファムのキャラバンと話をしていたヘルナドがクリムたちの方を向いた。どうやら、人違いではないらしい。
「よう、おまえら。よく来たな」

ヘルナドはそういって笑顔で歩み寄ってくる。
「よく来たって……なんで、ヘルナドがここにいるのさ」
「おまえらが出発した後にな、ここのキャラバンに迎えに来てもらってだな」
「なんで？」
「なんでって、これから俺はここで暮らすんだよ」
「はぁっ!?」
クリムたちはそろって驚きの声をあげた。
「教えてなかったんですか。結婚するって」
後ろから集まってきたファムのキャラバンの男性が、呆れ顔でヘルナドに尋ねた。
「ん、まあ、機会がなくてな。こいつらの方が先に出発しちまったし」
「やれやれ」
「ねえ、今、結婚って」
「ああ、そういうわけだ」
照れくさそうに笑って、ヘルナドはファムのキャラバンの女性の腕を引いた。
「ルアージュだ。俺は、彼女と結婚してファムで暮らす」
女性は、紹介されにこやかに頭をさげた。つられて、クリムも頭をさげた。
「あ、この人って。マール峠でヘルナドが謝ってた」
ルアージュと呼ばれた女性の顔をまじまじと見つめていたイ・リュが、大きく手を打った。

「くだんねえことをよく憶えてるな」
「そりゃ、こんなきれいな人そんなにいないもん。簡単には忘れないわよ」
イ・リュがそういうとルアージュは「ありがとう」と穏やかに笑った。ヘルナドは照れくさそうに頭を掻いていた。
「大変だったんですよ。こっちはキャラバンの旅の最中だっていうのに、移動の間じゅう荷車の中でいちゃいちゃいちゃいちゃと……」
「馬鹿なこといってんじゃねえよ」
苦笑しながらキャラバンの男性の頭を軽くはたくと、ヘルナドは不意にまじめな顔をした。
「俺のことはいいからよ。それよりおまえら、サムルンティはどうした」
「あ、うん。シェラの里にいる。何か、魔術の研究がしたいって」
「はぁ？　なんだそりゃ。まあ、あいつらしいっちゃらしいが……」
ヘルナドは渋い顔であごを撫でた。
「それで、サムルンティ抜きで大丈夫なのか？」
「ちょっとつらいけど……」
不意にリッドに足を強く踏まれ、クリムは痛みに言葉を詰まらせた。
「ああ、ちゃんとやってるよ。心配ない」
クリムが足をさすってる間に、リッドが胸を張ってそう答えた。
「そうか、ならいい。まあ、今日はゆっくりしていきな」

「うん」
「どうせなら、結婚式までいてもらって、みんなにも祝福してもらいたいけどね」
ルアージュが笑顔でそういうと、ヘルナドは頬を赤くしながら眉間にしわを寄せた。
「馬鹿。こいつらだってキャラバンなんだ。そんな無駄な時間はないんだよ」
「わかってるわよ。だから残念だなっていってるんじゃない。もう、そんなに恥ずかしがらなくってもいいのに」
くすくすといたずらっぽく笑うルアージュに、ヘルナドはますます顔を赤くしながら口の端を歪ませていた。

*

その夜は、ファム大農場の水かけ祭の雰囲気を楽しみながら過ごした。ファムの人たちの神聖な祭事なので、さすがに儀式や宴の輪の中に参加するのは遠慮し、宿の近くから眺めて楽しむことにした。
宿の主人がくれた温かいミルクを飲みながら、ハーディとリッドと並んでクリムは宴に沸くファムの人々を見ていた。イ・リュは「お祭なんて、どうせどこも同じでしょ」といって、一人先に部屋で寝てしまっている。
確かに、クリスタルを清める儀式も、その後に開かれる宴も、ティパの村で目にするのとそ

れほど違いはなかった。それでも、やはりこうして楽しそうな人々を見ていると、温かい気もちになる。

「やはりこうしてクリスタルの浄化の成功に喜ぶ人々を見るのは、いいものだな」

感慨深げにそう呟いたのは、アルフィタリアの騎士団長だった。

アルフィタリアの騎士団は、ファムの西方にあるデーモンズ・コートと呼ばれる場所でミルラの雫を取ってきた帰りだとかで、やはり夕刻にファム大農場を訪れていた。

「俺たちも、負けてられねえって思うよな。やっぱ」

リッドは意気ごんだ様子で宴を見つめていた。

「そうだね」

クリムは小さく頷き、同意を求めるつもりで隣のハーディに目をやった。しかし、ハーディは宴を見ていなかった。何やら怪訝な顔で、騎士団の方を眺めている。

「よしっ」

リッドは突然立ちあがると、手にした木製のカップをあおりミルクを一気に飲み乾した。

「これから頑張るためにも、疲れは残しちゃいけないからな。オレは、もう寝る」

そういって、リッドは空になったカップをクリムに押しつけた。

「あ、うん。おやすみ」

あっけに取られながら、クリムは宿の中に駆けていくリッドを見送った。

「ふむ、さすがはリルティの戦士。若いのに感心な心構えだ。我らも、浮れてばかりいてはい

かんな」

騎士団長の言葉を聞きながら、クリムはハーディに視線を戻した。ハーディはまだ騎士団の方を見ながら、小さく首をかしげている。

「ハーディ、何を見てるの」

クリムは小声で尋ねた。

「あの人」

短く答え、ハーディはあごで自分の見ている先を示した。彼が指したのは、騎士団の中の若い騎士だった。そこにいる者が皆顔をほころばせている中、その若い騎士は一人沈痛な面もちで宴を眺めていた。

「どうして、あんな顔してるのかなって」

「うん……そうだね」

確かに、宴の賑わいには似合わない表情だ。気になるといえば気になる。

「すみません。先に休ませていただきます」

不意に宴の喧騒に背を向けると、若い騎士はそういって宿に向かって歩きだした。

「……やはり、人々の喜びと命がこんな危ういものに寄りかかっていていいはずがない」

宿に入ろうとする若い騎士が近くを通り過ぎたときに、彼が呟く言葉が耳に入った。

クリムは、彼が何のことをいっているのかわからず首をひねった。ハーディは何を考えているのか真剣な顔をしていたかと思うと、騎士の後を追って宿に向かい駆けだした。

一人取り残されたクリムは、クリスタルを取り囲み祝いの雰囲気に酔いしれる人たちを再び眺めた。宴の喧騒を耳にしながら、ノアからの手紙の内容を思いだしていた。

手紙には、ノアが本格的に麦畑の仕事を始めたことが書かれてあった。「今年は、わたしが作った麦を見せてあげられるからね」と楽しそうな文字が踊っていた。

――みんな、自分のやれることを見つけて、がんばってる。それなのに、ぼくは……。

夜空に煌々と浮かびあがったクリスタルを見つめ、クリムは強く拳を握った。

5

ファム大農場を後にしたクリムたちは、再びジェゴン川を渡り、マール峠を南下し、予定どおりリバーベル街道まで戻ってきた。

以前に来たときの記憶を頼りに、クリムたちはミルラの樹を目指した。やはり、赤ら顔の魔物たちの襲撃にあったが、以前のような苦戦をすることなく倒すことができた。

「すげえな、やっぱオレたち強くなってるよ」

リッドは手にした槍を見つめ、興奮気味にいった。

「うん……」

クリムは力なく頷いて答えた。確かに、初めてリバーベルを訪れた時に苦戦した魔物を難なく倒すことはできた。だが、目の前で戦うリッドとの力の差をいっそう強く感じる。

「この感じだと、今回は楽ができそうね」
魔物の手からこぼれ落ちた魔石を拾いながら、イ・リュが笑った。
「ほら、ファイアはあんたがもちなさい……って、なんでそんな顔してんのよ」
ファイアの魔石を渡そうとハーディに向けて手を出したイ・リュが、顔をしかめた。ハーディは横たわる魔物の亡骸を見つめ、難しい表情をしていた。
「うん、魔物の繁殖力がすごいなって思って。前に来たときも、それなりの数の魔物を倒したのに、もうこんなに増えてるなんて」
「でも、もう二年も前のことだろ」
「うん、そうだけど、僕たち以外のキャラバンだってここに来て魔物を退治してるはずでしょ」
「まあ、そうかな……」
「やっぱり、ものすごい勢いで増えてるってことだよね」
「そんなくだらないことどうでもいいでしょ」
いっこうに魔石を受け取らないハーディに苛立ったらしく、イ・リュは乱暴に押しつけた。
「どんだけ増えようが滅ろうが魔物が出てきたら戦う、それだけでしょ。いいから、あんたは魔法をうまく使うことを考えてなさいよ」
「あ、うん、ごめん。そうだね」
半ばあっけに取られた様子で、ハーディは頷いた。

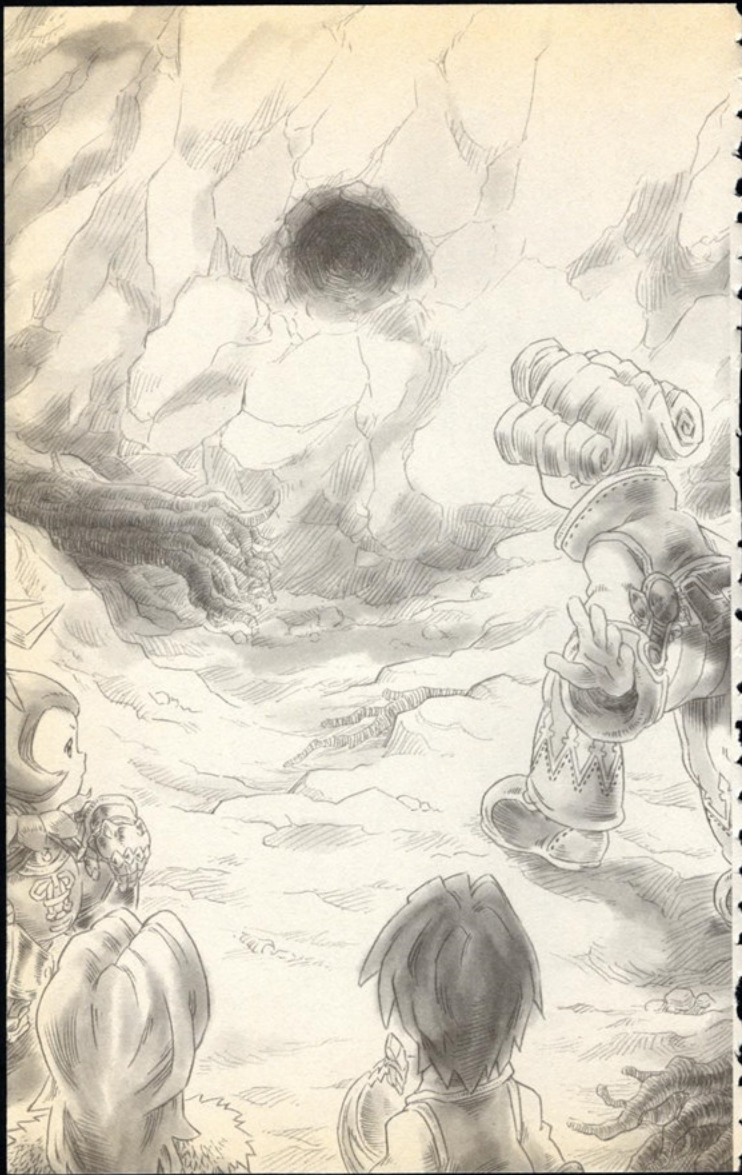
*

「えっと、この川を越えて、その先を川沿いに遡ってったんだよな」
古い崩れかけた橋の前で足を止め、リッドが振り返った。ハーディがうなずいたのを確認し、リッドは慎重な足取りで橋を渡り始めた。
「ちょっと待って」
「なんだよ？」
橋に一歩足を踏みだしたところで発せられたイ・リュの声に、リッドは面倒くさそうに振り返った。
「あそこよ、あそこ。あの上に、今宝箱が見えたの」
イ・リュは、後方に盛りあがった小高い丘の上を指さし早口にそういった。
「だからなんだよ」
「取りに行くに決まってるでしょ。ほら、ついてきて」
「そんなの、一人で行けばいいだろ」
「ばっかじゃないの。どう見たって聖域の外じゃない」
「じゃあ、あきらめろよ。ほら、馬鹿な話は終わりにして先に行こうぜ」
「わかったわよ。一人で行ってくればいいんでしょ。ほらハーディ、ケージを渡しなさいよ」
「へ？」

「おい、なにするつもりだよ」
「いわれたとおりに一人で宝を取りにいってくるのよ。あんたたちはここで待っててても、先に行ってくれても、どっちでもいいわよ」
イ・リュの勢いにたじろぎ、クリムは苦笑を浮かべリッドを見た。
「イ・リュのいうとおりにしよう、リッド。すぐそこなんだし」
「しゃあねえ、行ってやるよ」
不満そうに唇をゆがませながら、リッドは丘に向かって歩きだした。
緩やかな斜面を登りきると、イ・リュは宝箱に素早く駆け寄った。
「なぁにが、入っているのかな」
鼻歌まじりに宝箱を開けたイ・リュは、中身を確認すると急に表情を険しくした。
「だから、しましまリンゴなんかを宝箱にしまってんじゃないっての！」
激しい口調でいい放ち、イ・リュは宝箱をひっくり返した。
「もったいないなぁ」
「クリム、上！」
苦笑いでイ・リュを見ていたクリムは、背後から飛んできた声に反射的に顔をあげた。
目の前に太く長い尻尾を持つ小動物型の魔物の姿があった。とっさに盾を持ちあげ、クリムは防御の姿勢を取る。が、反応が遅れた。充分な体勢が取れていなかったため、魔物の体当たりに耐えられず、膝が崩れ谷底に転落しそうになった。

しかし瞬間、ハーディがクリムの手を引き体勢を入れ替えた。
「ひえええええっ」
悲鳴に振り返ったクリムの視界の中で、ハーディが斜面を転がり落ち遠ざかっていく。
クリムは慌て周囲を見回した。ひっくり返った宝箱の傍らで驚きの顔で立ち尽くしているイ・リュ。小動物の魔物を斬り払ったリッド。地面に投げだされたクリスタルケージ。
クリムはケージを抱えあげ、ハーディの落ちた方へ向きなおる。クリムたちが丘にあがってきたのとは反対側になる。こちら側は、急な斜面がより深くまでつづいていた。
「おい、クリム」
「ハーディが落ちたんだ。急がないと、瘴気にやられる」
「お、おう。わかった」
頷きあい、クリムたちは斜面を滑り降りた。
谷の底には岩と倒木がごろごろと転がっていた。乾いた色の土がむきだしになった地面にはわずかな草も生えていない。その真ん中でハーディは苦しそうにうずくまっていた。
クリムたちが近づき聖域がハーディを包むと、彼はむせながら大きな呼吸を繰り返した。
「……死ぬかと、思ったよ」
涙目でハーディはいった。
「大げさだな、ほんの少しの間だったろ。瘴気ん中飛びだして街道を走ったことのある奴が、何いってんだ」

「でも、あれが」
そういって、ハーディはクリムたちが滑りおりてきたのとは反対側の斜面を指さした。そちらの斜面は、土ではなく硬そうな岩盤だった。そこに小さな亀裂があった。ハーディの指はその亀裂を差している。
「あの穴が？」
「ちょっと、離れてみて」
ハーディはクリムの腕を引っ張った。いわれるまま、クリムはクリスタルケージを抱えたまま、亀裂から離れるように数歩後退した。聖域の外に出た途端、その亀裂からはものすごい勢いで風が噴きだし始めた。
「何、これ」
「瘴気だよ。それも、なんかすごく濃いんだ。ちょうど、あの瘴気ストリームみたいな感じ。あれを小さくしたみたいな」
穴から噴きだした瘴気は目の前で澱のようにじわじわと拡がり溜まっていく。クリスタルの力に守られているとわかってはいたが、空気が澱んでいくような感じを味わいクリムは思わず鼻と口を手で被った。
「気味悪いな」
「埋めちゃったほうがよくない？」
「うん、僕もそう思う」



「そうだな。何でもいいから、穴を塞げるもん探そう」
リッドの号令で、クリムたちは辺りに転がっていた石や倒木などを集め、岩盤の亀裂に詰めこんだ。不恰好ではあったが、穴はすぐに塞がった。ところどころに小さな隙間は残ったが、激しい勢いで噴きだしていた瘴気の流れは完全に止まっていた。
「一応、何とかなったみたいだな。さ、戻ろう」
「今度は、これ登るのよね。めんどくさい」
滑りおりてきた斜面を見あげ、イ・リュが深いため息をこぼした。
「元はといえば、おまえが宝箱なんかに目をくらませたせいだろうが」
「あたしが落ちたわけじゃないもん」
「ごめん」
イ・リュの言葉に、ハーディが肩を落とした。
「ぼくが悪いんだ。ぼくが魔物に気づかなかったから」
「でも、やっぱり落ちたのは僕だし。それに、クリムに声をかけるのも遅れたし」
「違う！　ぼくは魔物の接近に気づかなきゃいけなかったんだ。リッドならちゃんと対応してた。それなのに、ぼくはハーディの声にも反応が遅れて。しかも、ハーディまで巻きこんで、危険にさらして。ぼくが、ぼくの力が足りないのがいけないんだ！」
「クリム……」
声を荒らげたクリムをハーディは戸惑った様子で見つめていた。

「あーもう、うっとうしい。何でもいいわよ、そんなの。さっさと戻るわよ」
イ・リュは肩を怒らせそういうと、大またで斜面を登り始めた。

6

リバーベル街道でミルラの雫を手に入れ、クリスタルケージをいっぱいにしたクリムたちはティパの村へと帰ってきた。
ケージを持って荷車をおりたクリムたちを村人たちが取り囲み、労いの言葉がかけられる。
村人の声に笑顔を返しながら、クリムは人ごみの中にノアの姿を探した。ノアは集まった人たちの隅でうつむきがちに立っていた。
「ノア」
クリムが駆け寄ると、ノアは笑顔を彼に向けた。
「おかえり、クリム……」
ノアの笑顔がどことなく硬いのが気になり、クリムは顔をしかめた。
「どうしたの。何か、元気がないみたいだけど」
「そ、そう？　そんなことないよ」
答えながらノアが視線をそらせたのと同時に、人垣を押し分けてサムルンティの父と母がクリムたちの前に歩みでてきた。

「あの子は、本当にシェラの里に残ったの？」
クリムの前に出るや否や、サムルンティの母は問い詰めるような口調で尋ねてきた。クリムは、戸惑いながら頷いた。
「手紙をもらったときは冗談かと思ったが、まさか本当にキャラバンを放棄するとは」
サムルンティの両親は顔を突きあわせ、小声でいいあっていた。
「放棄だなんて、そんな。一年だけって約束だし、シェラの里にいるってわかってるんだから、そんな心配しなくても大丈夫ですよ」
「あの子のことは心配してないわ。しっかりしてるんだから。でも、あの子の身勝手のせいでキャラバンの調和の掟を乱してしまったじゃない」
「そのせいで村によくないことが起きたんじゃないかと、そのことを心配しているんだよ」
「よくないことって、何かあったんですか？」
ハーディが眉をひそめ尋ねると、サムルンティの両親はそろってノアをちらりと見た。二人の顔が向けられた瞬間、ノアの肩が小さくピクリと震えた。
「麦の実りが悪いんだ。いや、食べるに困るほどではないのだがね」
サムルンティの父が遠慮がちに発した言葉に驚いたクリムは、眼を見開きノアを見た。首をすくめて躰を小さくし、ノアはいっそう身を硬くしていた。
「ノア、どういうこと」
クリムがゆっくりと尋ねると、ノアはいきなりきびすを返し逃げるように駆けだした。

「待って、ノア」
追いかけながらクリムは呼び止めた。だが、ノアは振り返ろうともしない。
彼女を追って、クリムは麦畑までやって来た。畑を囲む柵の前で足を止めたクリムは、荒い呼吸を繰り返しながら畑を見渡した。
一面を被う麦穂は一目でわかるほど元気のないものが多かった。黄色く色づいてはいるものの太陽の光をはね返すような輝きを持たないものがほとんどで、病気にでもかかったのだろうか黒ずんでいる穂もそこかしこに見られた。
畑の真ん中にはノアの父が立っていた。ノアの姿は見当たらない。
「やあ、お帰りクリム」
ノアの父は困ったような苦笑いでクリムに声をかけた。
「ノアだったら、ものすごい勢いで家の中に入って行ったよ」
「そうですか……」
クリムは表情を曇らせ、ノアの家を見やった。
「まあ、あわせる顔がないと思ってるのだろうね。あの娘のことだ、どうせ手紙に自分が世話した麦を楽しみにしていてくれとでも書いたりしたのだろう」
「え、ええ……」
「別段、いつ起こっても不思議のないことなんだから、それほど気にすることはないのだけれどね。でも、初めて世話した麦がこのような姿では、ショックではあるか」

麦畑を見渡して、ノアの父はため息をこぼした。
「原因がはっきりとしないのは気がかりだけれど、本当にたまたまだから気にする必要はないのだよ。確かに質は落ちるが、ほとんどの麦は食べられないほどのことはないのだし」
「そうですね」
クリムは彼女の部屋のある辺りを見つめたまま、上の空で答えた。
「本当にたまたまだからね。あんまり気にしないでくれるといいんだけど…」
「え、ええ……そう、ですね」
頷きながら、クリムはノアにかける言葉を探しつづけていた。

第五章 永遠の力

1

木々の葉が色づき始め、今年もキャラバンの旅立ちの時期になった。出発の準備に追われ、クリムたちは忙しく村の中を走り回っていた。

その中に、今年はゲイル＝クルトの姿があった。クリムたちが、サムルンティが合流するまでの間だけでも戦力不足を補う人材が欲しいと進言した結果、彼が参加することになったのである。

加入メンバーを決める話しあいでは、四種族の調和が崩れたままなのは問題なのでユークのメンバーを加えるべきだという声が多くあがった。だが、ミモリが弟のゲイルを強く推した。クリムたちもゲイルならば安心だと同意した。それでもなお、ゲイルがリルティであることを理由に渋る一部の大人たちに対し、クリムたちは今年は必ずサムルンティと共に帰ってくると約束し納得させた。

ゲイルは鼻息荒く、次々と荷物を荷車へと運び入れている。

クリムは木箱を運びながら、見送りの人たちの中にノアの姿を探した。

村に帰ってきた日からずっと、ノアは元気がないままだった。いつもどおりに振舞っている

つもりなのだろうが、ふとした瞬間に表情が翳るのだ。クリムも何度も励ましてみたが、その度に話をはぐらかされた。

見送りに集まった人の中のノアは、クリムと目があうと小さく微笑んだ。その笑顔は、やはりどこか力なく感じられる。

笑顔を返しながら、彼女を元気づけられなかった非力さをクリムは感じた。ため息をこぼしながら落とした視線に、手首に巻いた腕輪が映った。奥歯を強く軋らせ、クリムは顔をあげた。

「ごめん。ちょっとこれお願い」

目の前を通りかかったゲイルに木箱を押しつけ、クリムは集まった村人たちの方へと駆けだす。

驚き戸惑った様子のノアの手を取り、クリムはそのまま広場のクリスタルの下へ彼女を連れていった。

「クリム、どうしたの、いきなり。もう、出発でしょ」

「あんなの偶然だよ、ノア。麦が病気にかかったのは、ノアのせいなんかじゃないから」

ノアの言葉を遮り、クリムは叫ぶようにいった。

「ありがとう。でも、もう、いいよ……」

ノアはうつむきがちに視線をそらし答えた。

「よくないよ。ノア、気にしてるもん。いい、こんなのたまたまなんだ。今年は絶対にうまく

いく。今度帰ってくるときは黄金色の麦畑を楽しみにしてる。だから、だからさ」
ノアは顔をあげた。クリムと目があうと暗く沈んだ彼女の顔に柔らかな笑みが浮かんだ。
「うん、わかった。楽しみにしてて」
「ああ、楽しみにしてる。じゃあ、行ってくるよ」
「いってらっしゃい」
笑顔でたたずむノアに手を振り返し、クリムは村の入り口に向かって走った。
クリムが戻ったときには荷物の積みこみは終わっていて、リッドたちは出迎えの人々の前に整列していた。
「遅いぞ」
とがめるような目のリッドに小さく謝り、クリムも列に加わった。
「では、行ってきます」
リッドを筆頭に出発の挨拶をし、クリムたちは村の外に向かって歩きだす。
「しっかりがんばって来るんだよ」
村人たちが投げかける無数の言葉の中で、ひときわ大きくミモリの声が響いていた。
照れくさそうにしながらも、ゲイルは大きく手を振り返していた。

*

初めて村の外に出た緊張よりも旅に出られた興奮の方が勝っているようで、ゲイルは何かを目にする度に大声をあげていた。

「すっげえな、ずっとずっと先まで草原だぜ。広いよなぁ。何か動物走ってこねえかな」

荷車の後方から幌の外を眺め、ゲイルはまた感嘆の声をあげた。

「来ないよ。瘴気の中で動物は生きられないんだから」

ハーディはキャラバン年代記に何か書きとめながら苦笑を浮べている。

「ああ、そっか。この周りは全部瘴気なんだ。あん中飛びこんだら死んじまうんだよな」

「いいわよ、どーんと飛びこんで来てくれて。いや、むしろそうしてもらいたいくらい」

木箱に寄りかかったイ・リュが、こめかみを抑えてゲイルを睨んだ。

「何だよ、そんないい方ねえだろ」

ゲイルは不満そうに唇をとがらせて振り返った。

「うるさいのよ！　さっきからわぁわぁわぁ。少しは静かにしたらどう」

「しかたねえだろ。俺はおまえらと違って村の外に出るの初めてなんだから」

「ガキ……」

再び外に顔を向けたゲイルの背中に、イ・リュがぼそりと呟いた。聞こえなかったのだろう、ゲイルは外を眺めたままた何かに対して感嘆の声をあげた。

「おい、ゲイル。元気が余ってるなら、こっちに座るか」

御者台からリッドの声が飛んできた。

「おう。何でもやってやるぞ、俺に任せときな」
そう答えて立ちあがり、ゲイルはばたばたと荷車の中を走りぬけ御者台に向かった。
ゲイルと入れ替わりにリッドが荷車の中に入ってきた。
「やっと静かになったわ」
イ・リュがそう呟いた時、荷車が大きく揺れだした。外を確認するまでもなく、パパオが猛然と走っているに違いない。
「馬鹿！　ゲイル！　もっとゆっくり走らせろ！」
床にしがみつくように姿勢を低くしてリッドが叫んだ。
「何でだよ。急ぐ旅だろ、一年であちこち回らなきゃならねえんだし。少しくらい飛ばしたほうがいいじゃねえか」
「パパオが疲れて倒れたらどうする！　旅がつづけられなくなるだろ」
「おお、そうか」
ゲイルの言葉と共にパパオが急停止したため、クリムは荷車の中でひっくり返った。
「んじゃ、改めて」
ゲイルの声と手綱を振る音がして、荷車がいつもどおりの速度で走りだした。
クリムたち四人はいっせいに大きなため息をこぼした。

＊

キノコの森の深奥で巨大な植物の魔物モルボルを倒したクリムたちは、ミルラの樹に向かって歩きだした。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ」

喘ぐようにいって、ゲイルはその場に膝をついてうずくまった。

「どうした。どこかやられたのか」

振り返ったリッドが慌てた様子でゲイルに駆け寄る。

「そうじゃねえよ。あ、足に力が入らなくて」

「肩、貸すよ。すぐそこがミルラの樹だから。そこでならゆっくり休めるよ」

「す、すまねえ」

そういって差しだされたゲイルの手を掴んだクリムは、彼の躰が小刻みに震えているのに少し驚いた。その驚きが顔に表れないように注意しながら、クリムはゲイルを支えて歩いた。

「俺、自信あったんだぜ。姉ちゃんにみっちり特訓受けたしよ。戦うだけなら、もうリッドにだって負けないって思ってた」

地面に目を落としながらゲイルは独り言のように話し始めた。

「うん、強いよゲイルは……。きみのおかげで、楽にここまで来れた」

お世辞でも冗談でもなく、ゲイルの槍捌きは鋭かった。さすがにリッドにはかなわないだろうが、それでも彼が加わったおかげでここまで苦戦することなく進んで来られたのは紛れも

ない事実である。三年もキャラバンの旅をつづけてきた自分よりもきっと強い。そう思い、クリムは小さく奥歯を噛んだ。

「そんなことねえよ、俺なんて」

ミルラの樹の側まで来ると、ゲイルはそういって腕を振り払うようにしてクリムから離れた。思ってもみなかった彼の言葉に驚きを感じながら、クリムはゲイルの背中を見つめた。

「……すっげえな」

光を放ちケージの中に雫を落とすミルラの樹を見あげ、ゲイルは大きく目を見開いた。嘆息をこぼしながら、ゲイルはその場にどっかりと崩れ落ちるように座りこむ。

「ほんと、すげえよ。おまえたちって、こんなことをずっとやってきてるんだよな」

「何、いきなり」

ゲイルの丸まった背中をイ・リュは怪訝そうに見た。

「俺なんか、全然ダメだ。情けねえよな。こんなに震えて」

自分の手を見つめ、ゲイルは力のない笑いをこぼしている。

「何いってんの。最初の頃のこいつらに比べたら、あんたの方が全然マシよ」

イ・リュがクリムやハーディを指さして笑った。

「そうそう。僕なんて今でも震えてるよ。戦いじゃ、役に立ってないし」

クリスタルケージを抱え、ハーディも笑う。

「ああ。オレたちの方が、ちょっとだけ経験があるってだけだ。そんなにかわんねえよ。なあ、

クリム」

「そ、そうだよ。ぼくなんかより、ゲイルの方が全然強いよ。初めての時、ぼくは、魔物を倒せなかったから……」

消え入りそうなほどに小さな声で、クリムはそういった。

「そういうんじゃねえよ。やっぱ、おめえらはすげえって。ぜったい。何年経ったって、俺はそうはなれねえと思う」

ゲイルはのっそりと振り返った。目があったクリムが首をかしげると、ゲイルはぎこちない笑みを浮かべた。

「いや、すまねえ。へへ、悪かったな、変なこと話して。忘れてくれ」

笑いながら呟いたかと思うと、ゲイルは再び皆に背を向けてうつむいた。小さく震える手を泣きだしそうな目で見つめながら唇を強く噛んでいるゲイルの横顔が、肩越しにわずかに見えた。

2

アルフィタリアの街を訪れたクリムたちが宿へ向かって歩いていると、広場の片隅から聞き覚えのある怒鳴り声が響いてきた。

「キャラバンをやめて、どうしようというのだ」

声のした方に目をやると、城門の脇にリルティの騎士同士が睨みあっている姿があった。一方は騎士団長で、もう一方は若い騎士だった。

「あれ？　あの人って」

騎士団長と睨みあう若い騎士を指さして、クリムは隣を歩くハーディに尋ねた。

「うん。あの時の人だよ。間違いない」

ハーディが頷くのを見てクリムも確信した。騎士団長と向かいあっているのは、去年ファム大農場で深刻な表情で水かけ祭の賑わいを見つめていた騎士だ。

「強さを求める旅に出ます」

若い騎士は、呟くように答えた。

「わからんな。キャラバンをやめてまでしなければならない旅とはなんだ。強さなど、キャラバンの中にあっても得られよう」

「私が求めるのはキャラバンの旅が求めるものとは遠く離れたところにあるのです。このままキャラバンをつづけていて得られるものではありません」

若い騎士の答えに騎士団長は、大きく顔をしかめた。

「……ならば問おう。おまえのいう強さとは何だ」

「強さとは、絶対的なものです」

答え、若い騎士は強く拳を握った。

「ティダの村の惨状を目にし、私は気づいたのです。あの村のありさまが、明日のアルフ

ィタリアの姿であるかもしれないと」
「そんなことみんな解ってるっての」
クリムの隣で、リッドが不満そうに呟いた。
「だから死なない覚悟があるんじゃないか。何があっても、ミルラの雫を村に持ち帰らなきゃいけないって思ってるんじゃないかよ」
リッドの吐き捨てるような呟きに、騎士団長の声が重なる。
「そのようなこと、おまえだけでなく皆が覚悟しておる。キャラバンは決して失敗を許されぬ任務だと、皆思っておるわ。だからこそ、魔物との戦いに負けぬようにと日々鍛錬に励んでおるのではないか」
「しかし、それは絶対ではありません」
若い騎士の鋭い言葉に、騎士団長は険しい顔で口をつぐんだ。
「いかに危険であろうとキャラバンの旅を止めることはできない。凶悪な魔物を踏み越え、ミルラの樹へ向かわねばならない。だから、私はキャラバンにはいられないのです。私は、私の求める強さを手に入れ、そして……」
「黙れ！」
騎士団長の怒鳴り声が、若い騎士の言葉を遮った。
「理屈をこねおって。おまえは単に逃げようとしているだけだ。たとえ絶対でなくとも、それがどれだけ危険であろうと、それを乗り越えキャラバンは旅をするものなのだ。おまえは、そ

の事実に怯えているだけではないか」
「ほんっと、そのとおりだぜ」
騎士団長の言葉に頷いたリッドは、苛立たしげに足先で石畳を踏み鳴らしていた。
「やっぱ、そうなのか」
「そりゃ、そうだろ。あんなこといったって、キャラバンをやめたいっていってるんだ。怖くなったか責任の重さに耐えられなくなったに決まってる」
「そうだよね。怖くっても何でも、村を守るためには戦わなきゃいけないのに……」
クリムは奥歯を軋らせながらいった。手に力が入り、握りこまれた拳が震えた。
「そ、そうか。そうなのか。やっぱ、そうなんだな……」
「……あの人の目、逃げだそうとしてるようには見えないけど」
ゲイルの言葉を遮って、ハーディが首をかしげながらいった。
「そうではありません。私は」
若い騎士の鋭い言葉に、クリムたちは広場の奥の二人に視線を戻した。
「言い訳など聞きたくないわ。貴様には、栄誉あるアルフィタリア騎士団の精鋭としての誇りがまるでないようだな」
「そこまでにせい」
静かに放たれた言葉に騎士団長は怒声を飲みこみ、声のした方へ顔を向けた。城の堀に架けられた橋を左右に跳ねた立派な口ひげを蓄えたリルティの老騎士が、二人に向かって歩いて

いる。
「どういうおつもりですか、クノックフィエルナ殿」
騎士団長は不満そうな顔で、老騎士を睨んでいた。
「このような往来で大声を張りあげて、みっともないと思わんのか」
「私は自身の職務をまっとうしているだけです。我が騎士団の統率と教育こそが、私がなさねばならぬことですのでな」
胸を張った騎士団長の前に立ち、老騎士は肩をすくめた。
「この者は騎士団をやめたのではなかったかな」
「私は認めた憶えがございません。であれば、こやつは未だ騎士団の者でありましょう」
「なるほどの」
老騎士は目を細め、口ひげを撫でた。
「しかし、王はお認めになったのじゃ。この者がキャラバンを離れ一人で旅立つことを」
「な、何ですと！」
心底驚いたのだろう、絶叫した騎士団長は目を丸くしていた。
「本当ですか。それでは」
若い騎士は嬉々とした表情を老騎士に向けた。
「うむ。王より預かってきた。さあ、受け取るがよい」
老騎士はそういうと、小脇に抱えていた豪奢な装飾の施された箱を開き、中から淡い光

を放つ小さな輝石を取りだした。
「ちょ、ちょっと。あれって、クリスタルじゃないの」
今まで騎士たちの会話に興味のない様子だったイ・リュが、鼻息を荒くした。少しでもよく見ようと思っているのだろう、リッドとゲイルの上から身を乗りだしている。
「お、重……」
頭を手で抑えつけるようにして圧しかかられたゲイルが苦しげな声をもらした。リッドも頭に乗ったイ・リュの手を払うように、躰をよじらせていた。
「うん、そうみたいだね」
「何で、そんなもんがあるのよ。クリスタルって、加工できないんでしょ。あんな小さいのだって削りだせないはずじゃない」
「大昔に、大きなクリスタルが砕けて世界中に飛び散って今のクリスタルになったって、古い本には書かれてあったからね。きっと、その時の破片なんじゃないのかな」
「へえ、そんなのがあるんだ。いいな、あたしも欲しい」
イ・リュは、若い騎士の手に握られた小さなクリスタルの欠片をうっとりと見つめていた。
「だが、いいか。このショートクリスタル、王は貸し与えると仰せられたのだからな」
「わかりました。必ずや目的を果たし、帰ってまいります。それでは」
きっぱりと答え、若い騎士は老騎士と騎士団長にそれぞれ頭をさげ、小走りに駆けだした。
「ま、待てっ」

目の前のやり取りを信じられないものを見るような目で見ていた騎士団長は、走り去る若い騎士を鋭い声で呼び止めた。だが、若い騎士はわずかも振りかえらずに走っていった。

「やっぱ、きれいよね、あれ」

商店の建ち並ぶ通りへ走り去っていく騎士の姿をイ・リュは恍惚の眼差しで追っていた。

「ね、イ・リュ。何か変なこと考えてない？」

「そんなことないわよ」

クリムが尋ねると、イ・リュは横目でクリムを睨んだ。

「そんなことより、ハーディ。あんなクリスタルの欠片って、他にもあるの？」

「え？　あ、うん。可能性はあるんじゃないかな。大きなクリスタルが砕けたっていうのが事実なら、欠片がいくつもあってもおかしくないと思うよ」

「ふーん。よし、決めた。あたしも、あれを手に入れる」

「でも、クリスタルが砕けたのって、すんごい昔だよ。欠片だって、その辺に落ちてるようなものじゃないよ」

「わかってるわよ。いいの、決めたの。絶対、見つけてやるんだから」

そういったイ・リュは、今までにないほどに目を輝かせていた。

「納得がいきませんぞ。クノックフィエルナ殿」

再び聞こえた騎士団長の怒鳴り声に、クリムは不敵に笑うイ・リュに向けていた視線を王城の方へと戻した。

「なぜ、あやつの騎士団脱退を認めたのですか。その上、王家の宝であるはずのショートクリスタルまで貸し与えるなど」
「わしに怒鳴るな。王が決めたことだ」
老騎士は両手で耳をふさぎ顔をしかめた。
「あの者が為さんとしていることに強く興味を惹かれたのだと王は仰っておられたがな。それが実現すればキャラバンの旅はより確かなものとなり、その帰りを待つ我々の不安も取り払われるだろうとな」
「何なのですか、あの男が考えていることというのは」
「それは、知らんよ。わしは聞いておらんからの」
「まったく、何だというのだ」
苛立った様子でそういって、騎士団長は老騎士に背を向けた。
「ねえ、いつまで見てんの。見世物はとっくに終わったじゃない。さっさと宿に行くわよ」
騎士団長たちを眺めていたクリムは、イ・リュに尻をはたかれ振り返った。いつの間にか、リッドもゲイルも宿の方に歩きだしていた。
「ほら、ハーディも」
「あ、うん……」
同じように尻をはたかれたハーディは、上の空といった感じの返事をして歩き始めた。
「どうかしたの、ハーディ」

「いや、あの人たちが話してたことってどういうことかなと思って」
「そんなの、わかんないよ。でも、もし本当に何の危険もなくミルラの雫を持ち帰ることができるようになるんなら、すごくいいだろうね」
クリムは心底そう思った。思いながら、そんな夢みたいな話に惹かれている自分の弱さを感じ、胸の奥に小さな痛みを覚えた。
「それは、そうだろうけどね。でも、問題はどうやってってところでさ」
「そんなもん、あるわけないだろ」
リッドは鼻で笑いながら、言葉を挟んだ。
「でも、アルフィタリアの王様が期待を寄せたみたいだよ。だったら、それなりに現実的な話なんじゃないかな……」
首をかしげながらそういったハーディは、前方をちらりと見やると、慌てた様子で口をつぐんだ。彼の視線の先に目をやると、不機嫌そうな顔で通りを歩いている騎士団長の姿があった。
騎士団長もクリムたちに気づいた様子で、足を止めた。
「おお、ティパのキャラバンか」
クリムたちを見た騎士団長が、わずかに頬を緩ませる。
「なるほど、リルティを増員したか。賢明な判断だな」
「はぁっ？　賢明？　何いってんの。リルティが多ければ、それでいいとか思ってるわけ」

「当然だ。リルティほどの力を他のどの種族が持つ」
イ・リュの言葉に、騎士団長の表情は再び険しくなった。
「リルティが四種族の中で最も秀でてるとか考えてるんだ。古臭い」
「何だと。我らリルティを愚弄するか」
「そんなつもりはないわよ。ただ、何でもリルティが一番だなんていってんじゃないっていってんの」
「小娘が、いわせておけば」
奥歯を軋らせ、騎士団長がイ・リュを鋭い目つきで睨んだ。
「やめろよ、イ・リュ」
リッドがイ・リュと騎士団長の間に躰を割りこませた。
「何よ」
「いいから、やめろって。すみませんでした」
そういって、リッドは騎士団長に向かって頭を軽くさげた。それを見た騎士団長が、わずかに表情を和らげる。
「確かにオレもリルティの武の力には自信を持っています。他の種族にリルティに敵う者などいないと思っています。ですが、それ以外のことにおいて他の種族が劣ることはないとも思っています。事実、リルティであるオレが仲間に助けられることも多くありました。こうやって、四つの種族が力を合わせてオレたちはやってきてるんです」

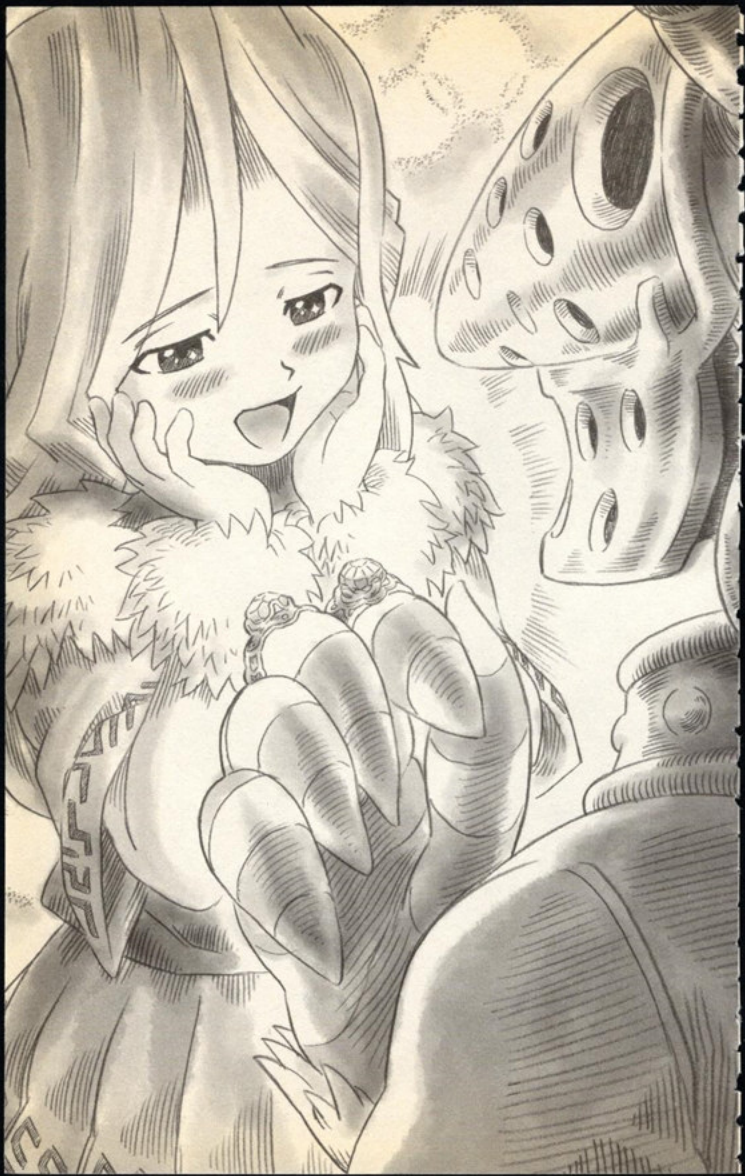
「む……」
リッドの言葉に騎士団長はたじろいだ様子で、口元をゆがめた。
「いや、すまなかった。余計な口だしをしたようだ。申し訳ない」
しばしの沈黙の末にそういって頭をさげると、騎士団長はクリムたちに背を向け大きな邸の建ち並ぶ方へ去っていった。

3

アルフィタリア北西にある瘴気ストリームを越えたクリムたちは、湖を傍らに見ながら高原の道をシェラの里へと向かっていた。その道の途中でシェラのキャラバンと出会った。
「おお、ティパの。ちょうどよかった」
間近に迫ったところで、御者台に座ったユークがそういってパパオを止めた。軽く挨拶しすれ違うつもりでいたクリムも、その言葉に手綱を引いた。
「どうか、したんですか」
そう尋ねたクリムに頷き、御者台のユークは幌を捲りあげ中に声をかけた。
「サムルンティ。ティパのキャラバンだ」
「え？　サムルンティ？」
予想外の言葉にクリムは思わず声をあげた。その声に反応するように、荷車の中からリッド

やハーディたちが顔を出した。
「どうも、わざわざすみませんでした」
その言葉と共に荷車の中からサムルンティが姿を現した。サムルンティは荷車をおりると、御者台に座るユークを振り返った。
「アミダッティ、本当にありがとうございました。おかげで、大変に有意義な時間を過ごすことができました」
「それは、こちらも同じこと。あなたの考え方は非常に興味深かった。また、機会があったら深く話をしたいものだ」
「ええ、私もそう思います。また、語り合いましょう」
「うむ。それでは、気をつけて」
「ええ、あなたたちも」
「皆さんも気をつけて」
御者台のユークはクリムたちの方へと顔を向け軽く頭をさげると、手綱を振るった。
半ばあっけに取られながら荷車を見送ったクリムは、すぐさまサムルンティに視線を戻した。
「サムルンティ。何で、シェラのキャラバンと一緒にいたの」
「送ってもらっていただけですが」
「迎えにいくっていってたじゃない。行き違いになったらどうするつもりだったのさ」
「ああ、考えてませんでした。この時期なら南に向かえば必ず会えると思っていましたから。

まあ、最悪ティパの村まで送ってもらえばよかったわけですし」
「もう、いい加減だな」
「ま、いいじゃねえか。こうして、ちゃんと会えたんだし」
荷車の中から半分身を乗りだしたゲイルが、なだめるようにクリムの背中を叩いた。
「おや、今年はゲイルも一緒なのですね」
「おまえがいなくて大変だからって、引っ張りだされたんだよ。おまえが帰ってこなかったせいで、村の大人たちは大変だったんだぞ。調和が乱れたって」
「そうだったんですか。それは、すみません」
「それより、魔術研究の方は？　永久魔石っていうのは手に入ったの？」
「ええ、もちろんです」
ハーディに問われたサムルンティは、自慢げに右手を持ちあげた。人差し指と中指に細かな紋様の刻まれた黄金色に輝く指輪があった。その台座には、それぞれ赤と紫に光る小さな石がはまっている。
指輪を目にした瞬間、イ・リュが瞳を輝かせ身を乗りだした。
「きれいね、それ。ねえ、サムルンティ……」
「あげませんよ、これは」
素早く返され、イ・リュはめいっぱい頬を膨らませた。
「ああ、そんなことより、ハーディに手紙を預かってきているんです」



「え？　僕に？」
「ええ。里の学校で子どもたちに魔術を教えてる古老からです。ハーディ、あなた何か彼に質問をしたのでしょう。それに関する面白いものが見つかったのだけれど、名前がわからなくてモーグリ便に託せないからと、私に」
いいながら荷物を探っていたサムルンティは、背負い袋の中から手紙を取りだしハーディに渡した。
「ありがと」
手紙を受け取ったハーディは、顔をほころばせながら幌の中に姿を消した。

＊

池の中から飛び出してきた蛙の魔物と対峙し身構えたクリムたちの前に、サムルンティが飛びだした。サムルンティは打撃用の鎚を腰にさしたまま両腕を大きく広げている。
「ここは、わたしに任せてください」
「任せろっていったって、魔石をまだ手に入れてないだろ」
「だから、もう必要ないんですよ」
そういったサムルンティの手の中に小さな光が生まれた。
「えっ」

驚き目を見張ったクリムたちの目の前で、サムルンティは腕を振りあげた。指先の軌跡を追い曲線を描いた光はいつしか赤く変じ、サムルンティの頭上で小さな炎の塊となった。

サムルンティが魔物に向け腕を振りおろすと同時に手の中の炎が弾ける。

一瞬遅れ、魔物の躰が燃えあがった。

全身を炎に包まれ絶叫をあげた魔物は、転がるように池の中に飛びこんだ。じゅっという音と共に水蒸気が立ちのぼり、水面に波紋が拡がる。

波紋が消え辺りが静寂に包まれても、魔物は水の上に姿を現さなかった。

「おい、今の何だよ」

リッドが顔中に驚きを表し、サムルンティを見た。

「何って、ファイアの魔法ですよ」

「んなこた、知ってるよ。だから、何で魔石もなしに魔法が使えるんだよ」

「だから、それこそが永久魔石の力です」

そういって、サムルンティは右手を持ちあげた。指にはまった二つの指輪が陽光を受け、煌いている。

「その指輪が、その……」

「そうです。ここにはまっている輝石こそが永久魔石。古代よりユークに伝わる魔道の力の結晶です」

「へぇ、なんかよくわかんねえけど、すげーな」

感嘆の声をあげたゲイルを押しのけ、イ・リュがサムルンティの前に出た。
「ねえねえ。それで、それってどこで手に入れたの。きれいだしすごいし、やっぱりあたしも欲しいから、それだけでも教えてよ」
「どこかに落ちているようなものではありませんよ。私が作ったんです。シェラの里に伝わる知識と里の古老の助けを借りて。一年がかりで二個作るのが精一杯でしたからね。欲しいからといわれて、そう簡単に作ってあげることもできません」
「いいじゃない、作ってよ。少しくらい待つからさ」
「そういう問題じゃありません。作るとなったら、またキャラバンを抜けることになりますよ」
「そりゃ、まずいだろ。また村でいろいろいわれるぜ」
「だな」
「……わかったわよ」
イ・リュはつまらなそうに唇をとがらせた。
「さあ、一気にミルラの樹まで行きましょう」
いつになく大きな声をあげたサムルンティの背中をクリムはじっと見つめていた。
——約束どおり永久魔石を手に入れて、サムルンティはまた大きく成長した。みんな、どんどん強くなっていくんだ。それなのに、ぼくは……。
クリムは胸の中に小さな疼きを感じ、剣を握る手に力をこめた。

4

「でよ、あのハーディだって、魔法でグワーって魔物を焼き払っちまうわけよ。驚いたぜ」
水かけ祭の宴ににぎわう広場の一角で、ゲイルが集まった村人たちを前に大げさな身振りを交えて声を張りあげていた。
「驚いたっていやあ、サムルンティだ。あいつなんて、永久魔石だかってもんを自分で作っちまって、それ使ってバンバン魔法を撃ちまくってよ。魔物なんざ、次々と炎に包まれるわ、雷に貫かれるわ」
「ほかの連中のことはわかったからよ、ゲイル。おまえさんはどうなんだよ」
ほろ酔い加減のビド・ルに言葉を挟まれ、ゲイルはわずかに眉をひそめた。
「俺？　俺はそりゃ、当然活躍したさ。あたりまえだろ、俺はあのミモリ＝クルトの弟だぜ。姉ちゃんの地獄の特訓を乗り越えてキャラバンに参加してんだ。俺の槍にかかりゃ、魔物どもはあっという間にあの世行きだっての。そんな、当たり前のこと話してもしょうがないだろ。そんなことより、クリムの奴だよ。あいつが……」
盛りあがっている人たちの脇を通り抜け、クリムは木製のカップを両手に広場のはずれへと向かっていた。クリムの視線の先には、宴の賑わいの片隅で居心地が悪そうにしているノアの姿があった。
「はい、ノア。ミルクもらってきたよ」

「ありがとう……」
沈んだ表情で、ノアはカップを受け取った。
「元気だしなよ」
散々思い悩んだ末にクリムの口からは、そんな言葉しか出なかった。
村に戻ってすぐに、クリムはノアの家を訪れ麦畑の様子を目にしていた。麦穂は去年と同じように濁った色をしていた。黒っぽく変色した穂も去年と同じか、それ以上の数見られた。
ノアが小さく手を震わせ、カップの中のミルクが波立った。
「何がいけないのかな。お父さんのいうとおりにやってるのに。なのに、どうして麦はちゃんと実ってくれないのかな。どうして病気にかかっちゃうのかな。今までは、こんなことなかったのに」
「たまたまだよ。たまたま二年つづけて同じような病気が流行っただけだよ」
「ごめんね。約束守れなくって……」
消え入りそうな声で、ノアが呟いた。
「いいよ、そんなの」
「だって……」
静かに首を横に振り、クリムが口を開こうとした時だった。不意に背後から、彼を呼ぶ声が飛んできた。
「ねえ、クリム。うちのバカ兄貴見なかった」

そういって不満そうな顔できょろきょろと辺りを見回しながら、イ・リュが駆け寄ってきた。
「ちょっと訊きたいことがあんのに、どこにもいないのよね」
「いや、ぼくは見てないけど」
「そ。んじゃ、家で寝てんのかな。ま、いいか。急ぐわけじゃないし」
クリムの方に顔を向けたイ・リュは、初めて彼の隣にいるノアに気づいた様子で、「あ、ノア」と声をもらした。
「大変だね、あんたんとこも。また、今年も不作だったんだって？」
「うん……」
「うちも、何か魚が獲れる量が減ったとかなんとかって親父がむずかしい顔して愚痴ってて」
「そうなの？」
「そうそう……って、あ、あたし邪魔しちゃってる？」
そういって、イ・リュは不敵な笑みを浮かべて、クリムとノアを交互に見た。
「そ、そんなことないよ」
「いいからいいから遠慮しないで。じゃ、あたしはこれで」
ひらひらと手を振って、イ・リュは足早にクリムたちの前を去っていった。クリムは彼女の後ろ姿を見送りながら、あごに手をあてた。
「もう、イ・リュったら変なこといって。ねえ、クリム。……クリム？　どうしたの」
わずかに頬を上気させながらそういったノアは、クリムの表情に不安を感じたのだろう、眉

根を寄せた。
「うん……イ・リュのいってたことがちょっと気になって」
「イ・リュのいってたことって、魚の数が少なかったっていう？」
「そう。麦の育ちが悪かった時に、魚の量も少なかった。これって、偶然重なっただけなのかな……」
「でも、イ・リュのところが漁をしてるのは海だよ。畑とは何にも関係ないよ。うちだって、海の水なんて使ってないもん」
「そっか、やっぱりたまたまかな……」
クリムは頭を掻き、脳裡に浮かんだ考えを遠くに追いやった。

5

朝早く、村全体を大きな揺れが襲った。クリムたちが村に帰ってから数日が過ぎた日のことだ。
昼間ノアの家で麦の刈り取りを手伝い疲れて眠っていたクリムだったが、揺れの大きさにすぐに目が覚めた。
枕で頭をかばいながらクリムはベッドの上で地震をやり過ごした。彼の部屋には、ベッドと机くらいしか家具もなく、倒れるものも落ちてくるものもなかった。

揺れが収まったのを確認し、クリムは躰を起こした。
「……ずいぶん、大きかったな」
地震の長さと大きさが気になり、クリムはベッドを抜け部屋の外に出た。
食堂に入る扉を開けると、すぐ目の前に母が立っていた。
「母さん」
「あ、クリム。だいじょうぶだった？　今見に行こうと思ってたのよ」
「うん。ぼくは平気」
答えながらクリムは食堂の中を見回した。床に、棚から落ちた食器が散乱している。
「こんなの、たいしたことないわよ。よかったわ、誰にも怪我がなくって」
「父さんは？」
「風車小屋の方を見に行ってるわ」
「そうなんだ。じゃあ、ぼくは外見てくる」
風車小屋へつづく扉に目をやった母にそういって、クリムは外に飛びだした。
外に出た途端にひんやりとした空気が躰を襲い、クリムは小さく身震いした。東の果ての空がわずかに白み始めたばかりで、辺りはまだ薄暗かった。
家の外壁や周囲の木々に異常がないのを確認したクリムは、そのまま村の中心につづく道の方へと足を伸ばした。
岬の上から見渡す限り、村の中の建物や木々にも被害はないようだった。クリムと同じよ

うに村の様子を心配して飛びだした人たちの姿が多く見える以外は、普段どおりのティパの村だ。

「どうだ、クリム。何か被害はあったか」

「こっから見えるところには変わったところはないみたいだけど、ぼくちょっと見てくるね」

戸口から心配そうな顔を覗かせたクラウスにそういって、クリムは坂道を駆けおりた。

皆が互いに無事を確認しているために騒然とはしていたが、どこの家も棚にあった小物や食器が散乱した程度で、大きな被害はないようだ。一人の怪我人もでなかったらしい。いくらもしないうちに騒ぎも収まり、村はいつもどおりの様子に戻っていった。

しかし、異変は昼を回った頃に起こった。

村の入り口近くに人だかりができていた。どうやら、川沿いに建つ漁師のビド・ルの家の前に集まっているようだ。

その様子を目にしたクリムは、胸騒ぎを感じ駆けだした。

「何があったんですか」

クリムが尋ねると、集まっていた人たちは互いに顔を見あわせ首をかしげた。

「いや、何か、仕掛けに引っかかってるとかって騒いでて」

「何か、大変だ大変だってな」

要領を得ない答えに、クリムは前に出て自分の目で確かめることにした。

人を掻き分けて進むと、ビド・ルの家の脇に数人の大人が集まっているのが見えた。裏の川

に設置された網を引きあげているようだ。
「おう、クリム」
そこには、リッドとゲイルとサムルンティがいた。
「ねえ、何があったの？」
「今来たばっかだからよくわかんねえよ。何か、仕掛けに大変なもんが引っかかったとかっていってたけど」
「ひでえな、こりゃ」
首をかしげながらのリッドの言葉を遮るように、川の中からそんな声が聞こえてきた。皆の目が集まる中、地面の上に引きあげられたものが投げだされる。
それを目にした瞬間、人だかりの中から小さな叫きがいくつももれた。
魚の死骸だった。動かなくなった何十匹もの魚が山となっている。
「ほんと、ひどいな。なんだよ、ありゃ」
「上流の方で何かあったんじゃないか」
「今朝の地震のせいかな、やっぱり」
「でしょうね。あまり嫌な臭いを発してませんし、死んでからそれほど経ってないでしょう」
クリムたちが小声で話しあっている前を横切り、村長が魚の死骸の山に近寄っていく。
「確かに、これはひどいの。原因はわからんのか」
魚の死骸を目にした村長は、渋面を川の中のビド・ルに向けた。

「さっぱりですよ。地震のせいだとは思いますがね」
ビド・ルは困りきったといった感じの顔で肩をすくめた。
「村長！」
不安そうにざわめく人たちを制して、リッドが大きな声をあげた。村長だけでなく、そこに集まっていた人が皆驚いた様子で彼を見た。
「オレたちが川の上流の調査に向かいましょうか。出発を少し早めれば、キャラバンの旅にそれほど影響を及ぼすことはありませんから。な？」
急に同意を求められ、クリムは戸惑いながら頷いた。サムルンティは当然だといわんばかりに、静かに首を縦に振った。
「ゲイルもかまわねえだろ」
「え？　あ、いや、俺は……」
「何だ。出発を早めると問題があるのか」
「あ、いや。そうじゃねえよ。問題はねえ」
リッドに詰め寄られ、ゲイルはぎこちなく頷いた。
「ふむ。確かに調査は必要かもしれんな。それでは、準備ができしだい出発してもらえるか」
「はい」
「では、皆もキャラバンの出発の準備を早々に始めてくれ」
村長の言葉に、その場に集まっていた大人たちがいっせいに駆けだした。

＊

荷車は街道をはずれ、川に沿って草原を進んでいた。御者台に座るゲイル以外は、皆荷車の外に出て川の様子に目を配りながら歩いていた。整備された道ではないため、パパオはどことなく歩きにくそうにしている。

「なんでこんなこしなきゃいけないのよ。出発まで早めてさ」

川を見つめながらイ・リュは不満そうに呟いた。

「しつこいぞ。村のためだっていってるだろ。川に異変があったら、おまえん家だって困るだろうが」

「うちの漁は海専門。川は関係ないの」

「そんなことありませんよ。魚が死滅するような異変があったとすれば、その水を飲むのは危険です。村全体の問題ですよ」

「とかいっても、何もおかしなところなんてないじゃない」

「おかしなところなんてない方がいいんだよ」

川を見つめながらクリムは肩をすくめ苦笑した。確かに川にはおかしなところは見られなかった。川の流れも水の色も、川の周辺の様子にも異変の跡すら少しも感じられない。

注意を払いながら川沿いを五日ほど歩いたが、やはり何の異状も見つけられなかった。

「これ以上は、調べても意味がないと思うな」
不意に顔をあげ、ハーディがそういった。
「そうか？」
リッドは訝しげな顔をハーディに向けた。
「確か、川の水は流れつづけてるから瘴気の毒気を含みづらいって教えられたぞ。だから、川魚はけっこう上流でも生きてるって。リバーベル街道でも魚が泳いでるの見た憶えあるし」
「うん、そうなんだけど。あの魚って、地震のせいで死んで村に流れてきたんでしょ。こんなに離れたんじゃ、一日あっても村まで流れ着かないと思うよ」
「確かに、いわれてみればそうですね」
「……そうだな。異常なしってことで、調査は終わりにするか」
力強く断言したリッドの言葉に居心地の悪さを感じ、クリムは口を開いた。
「でも、魚の死んだ原因がわからないっていうのは、気にならない？」
「そんなこといっても、川には変なとこなんて少しもなかっただろ」
「そうよ。あれから一度も魚の死骸も見なかったんだし、原因は地震でしょ。きっと、大きな揺れのせいで川底にでも頭をぶつけたのよ」
「そうかなぁ」
納得できずクリムは首をかしげた。
「ねえ、クリム。もしかして、麦の病気のこと気にしてる？」

「えっ」
ハーディの言葉にどきりとしてクリムは目を見開いた。
「麦の不作と今回のことと何か関係があるんじゃないかって考えるんじゃない？」
「……うん、まあ、少し。海の魚も数が減ったってイ・リュもいってたし」
「なるほど。確かに、それは気になりますね。ですが、クリム。何でも結びつけてしまうのはどうでしょう。今回のことは、地震が発端であることは疑いようがないわけですから」
「……そうだね。ごめん」
クリムはうつむきがちに頷いた。確かにサムルンティのいうとおりかもしれない。
「よし。それじゃ、調査は終了だ。村に戻るぞ」
「はぁっ？　何で戻んの。キャラバンの旅はどうすんのよ。そのつもりで荷物だって積みこんできてるでしょ」
リッドの言葉に、イ・リュが声を荒らげた。
「んなことといっても、報告はしなくちゃなんないだろ。みんな不安に思ってるはずだ」
「そんなの、手紙で充分じゃない。わざわざ戻る必要なんてないわよ」
「モーグリと会ったら、それでもいいさ。でも、今の状態だったら戻ったほうが全然速いじゃねえか」
「あーもう、信じらんない」
不満顔のイ・リュを無視し、リッドがパパオの手綱を掴んだ。

「ほら、行くぞ」
「あ、ちょっと待って。街道に出てくれないかな。パパオがずっと歩きづらそうにしてるんだよ」
クリムがいうと、リッドは少し考える様子を見せて頷いた。
「わかった。そうだな、いったん街道に出るか。じゃ、西だな」
「いえ、あそこにリバーベル街道の入り口が見えますから、北に出た方が近そうです」
「しゃーねえ、ちょっと大回りになるけど、そっちに行くか。もうちょっとガマンしろよ」
パパオの背中を叩き、リッドが手綱を引いて歩きだした。
街道に出るべく北に向かってしばらく歩いていると、リバーベル街道の入り口からリルティの一団が出てくるのが見えた。アルフィタリア騎士団とは異なり粗野な雰囲気を持ち、武具もそろいのものではなく各自が思い思いのものを持っている。マール峠のキャラバンだ。
「なあ、あいつらに頼んだらいいんじゃねえか」
そういったかと思うと、ゲイルは皆の意見も聞かずにマールのキャラバンに向かって大きく手を振った。
「おーい、待ってくれ！」
ゲイルが大声で呼び止めると、マールのキャラバンは足を止めクリムたちの方を見た。
「ん、なんだ。ティパのキャラバンか？　何で、そんな変なとこ歩いてんだ」
「まあ、そんなこたどうでもいいじゃん」

ゲイルは苦笑いを浮かべ、マールのキャラバンに駆け寄っていった。
「それより、あんたら。これからティパの村に向かわねえか」
「ん？　ああ、リバーベルで消耗したしな。よってもいいかとは思ってるが。それがどうした」
「だったら、俺を乗っけてってくれよ。ティパに戻って伝えなきゃいけないことがあるんだ」
「はぁっ？」
予想外のゲイルの言葉に、クリムたちはそろって目を丸くした。
「べつにかまわねえぜ」
「おい、ゲイル。何いってんだよ」
リッドが慌てた様子でゲイルの肩を掴んだ。
「そうよ。こいつらに頼むんなら、それこそ手紙で充分じゃない」
「いや、いいんだよ。こういうのは口で伝えたほうがいいことだろ。そもそも、六人のキャラバンなんて異例のことなんだし、俺はサムルンティの穴埋めだったんだぞ」
ゲイルは笑いながらそう答えた。
「待ってよ。だったら、ぼくが戻るよ。だから、ゲイルはキャラバンの旅をつづけて」
クリムは思わずそう叫んでいた。それを聞いたゲイルが鋭い目でクリムを睨んだ。
「ばーか。変な気、使ってんじゃねえよ」
「そんなんじゃ……」

「一緒に旅してわかったんだよ。俺はおまえたちみたいにゃなれないって」
「そんなことないって、ぼくなんかよりゲイルの方が強いよ。だから、ゲイルはキャラバンに残りなよ。村には、ぼくが帰る」
「そうじゃねえんだよ。なんつーか、根っこの部分で違ってる気がするんだよ。俺がどんなにがんばったっておまえたちにみたいにゃなれねえ。おまえら見たいな強さは身につけらんねえって、思ったんだよ」
そういいながらゲイルは、ゆっくりとクリムに近づいてきた。
「わけわかんないよ。絶対に、ぼくよりゲイルの方がキャラバンの力になるのに」
「うっせえな。だいたい、おまえ見てたから、俺には無理だって思ったんだからな。これでも、悔しいんだぜ。おまえなんかに負けた気がしてよ」
そういってゲイルはクリムの胸を拳で叩いた。
「なんで、そんなこと思うのさ。ぼくなんか、何の役にもたってないのに」
震える声を絞りだすようにして、クリムは尋ねた。だが、それには答えずにゲイルはクリムに背を向けた。
「待てよ、ゲイル」
立ち去ろうとするゲイルをリッドが呼び止めた。
「確かに、クリムみたいにゃなれないかもしれないけどさ。でも、おまえはそれで納得できるのかよ」

「でもよ。キャラバンにとっちゃ、一番大事なことじゃねえのか。俺には、それが足りねえって感じるんだからしかたないだろ」
「足りないとわかっているなら、それでいいじゃないですか。これからの旅で身につけることもできるでしょう」
「かもしれないけどな」
詰め寄ったサムルンティにたじろぎながら、ゲイルはちらりとクリムを見た。目があった瞬間、クリムは思わず目を伏せた。
「なんか、俺、クリムの負担になってるみたいだしよ」
「そんなことないよっ」
声を荒らげ顔をあげたクリムに、ゲイルは苦笑を返した。
「そんな顔でいってんじゃねえよ」
そういうと、ゲイルは皆を見回し小さく笑って背を向けた。
「んじゃ、後は頼んだぜ。報告は、俺がしっかりしといてやるから」
ゲイルは軽く手を振りながらそういって、マールのキャラバンの荷車に乗りこんだ。
クリムは困惑したまま、去っていくマールのキャラバンの姿を見送っていた。

第六章 それぞれの誓い

1

クリムたちを乗せた船は、ジェゴン川をくだり海に出た。左手に南方へ伸びる半島を眺めながら、船はきらきらと細かな光を反射する蒼い海原を波に揺られ進んでいく。

「ほらほら、あそこ。あの岬の上に風車小屋が見えるよ」

ハーディが左舷から身を乗りだし前方を指さして叫んだ。船の上でそれぞれに過ごしていた全員が、いっせいに彼の周りに集まり指の向けられた先を凝視した。

ティパ半島の突端近くに大きな羽を持つ建物がそそり立っているのが見える。

「さすがに風車小屋しか見えませんね」

「つまんねえな。もうちょっとばっちり見えりゃ手でも振るのにさ」

甲板の縁によじ登るようにして身を乗りだしたリッドは、つまらなそうに足をぶらつかせた。

「こうしてみると、風車小屋の上ってそうとう高いんだね」

「うん、そうだね」

ハーディの言葉に気の抜けた答えを返したクリムは、ぼんやりと止まったままの風車を視界の真ん中に捉えながら、まったく別なことを考えていた。

「なんだよ、イ・リュの親父の船もいねえじゃん。今日は休みなのか」
「こんな遅い時間に漁に出てるわけないじゃない。だいたい、うちの漁場は半島の反対側なの。いたとしてもこっからじゃ見えないわよ」
「なんだ、そうなのか」
リッドとイ・リュの会話を傍らに聞きながら視界の中を右から左に流れていく風車小屋を眺め、クリムはわずかに顔をゆがめた。
「ねえ、クリム。どうかした？　なんか、この辺にすっごくしわが寄ってるけど」
ハーディは自分の眉間を指さしてそういった。
「そ、そう？」
クリムは慌てて眉間を指でこすった。
「それで、何を考えてたの」
「あ、うん。ゲイルがね」
「ああ」
クリムの言葉を遮ったハーディは、大きく頷いて遠ざかる風車小屋に視線を転じた。
「大丈夫だよ。もう村に戻って何にもなかったこと伝えてるよ」
「そうじゃなくって」
声を荒らげたクリムに、ハーディは驚いた顔をした。
「ゲイルが、ぼくの方がキャラバンに向いてるんだっていってたんだ。どうしてそんなことを

いったのかわかんなくって。そのことを考えてた」
「それは、そう思ったからでしょ」
ハーディの返答にクリムは激しく首を振った。
「それがわかんないんだよ。だって、ゲイルは初めからしっかりと魔物と戦えたんだよ。ぼくなんか、今でもそんなにうまく戦えなくって、いつもみんなの足を引っ張ってるっていうのに。絶対、ゲイルの方が強いのに」
「そうかな？　クリムも充分に戦えてると僕は思うけど」
「そんなことない。ぼくはリッドみたいには戦えないし、サムルンティみたいに魔法を使うこともできないじゃないか」
「うん、そうだね」
ハーディはあっさりと頷いた。
「確かに、お互いに戦ったら、クリムはリッドにもサムルンティにも勝てないと思うよ。もしかしたら、ゲイルにだって」
「そうだろ」
「でもね、魔物を相手に戦うんだったら、リッドにだってサムルンティにだってクリムは負けてないと思うよ」
「……どういうこと？」
「そう訊かれても困るなぁ。ずっと後ろから見ててそう思っただけだから」

そういったハーディの笑顔を見て、クリムの眉間のしわはいっそう深くなった。
笑顔のままのハーディはクリムからわずかに視線をそらすと、急に大きな声を発した。
「わあ、ほら、見てよ。すっごいな、周り全部海だよ。蒼い色しか見えないよ」
歓喜の声をあげながらハーディは甲板を駆けだしていってしまった。一人取り残されたクリムは、ゆるくかぶりを振り力なくため息をこぼした。落とした視線に右手首の腕輪が映った。
クリムは右手首を左手で握り、腕輪を額に押しつけ強く目を閉じた。

2

「ったく、だらしないわね。だいたい、あんたがせっかくだから海に出て遠くまでいってみようとか無理いったんじゃなかったかしら」
船室の硬い寝台に横になっている顔色の悪いハーディにまんまるコーンのスープを差しだしながら、イ・リュは馬鹿にするようにいった。
「ご、ごめん。船がこんなに揺れるなんて知らなかったから」
ハーディは躰を起こすと、申し訳なさそうにスープの皿を受け取った。
「べつにあやまんなくていいわよ。それより、早いとこ起きれるくらいには元気になってよね。もう、三日も料理当番やらされてんのよ」
「う、うん。だいぶ慣れてきたから、もう大丈夫だと思うよ。明日からは僕がやるから」

「頼むぞ。焼いた肉とスープしか出せない奴が料理当番じゃ、いい加減つらいからよ」
そういって部屋の隅で笑ったリッドに、イ・リュが鋭い視線を飛ばした。
「文句があんなら、あんたが料理やんなさいよ」
「でも、何で肉とスープばっかりなの？　せっかく船に乗ってるんだし、新鮮な魚とか獲って出せばいいじゃない。イ・リュってそういう方が得意だったでしょ」
ハーディの傍らに座っていたクリムがそう尋ねると、イ・リュは大きなため息をこぼした。
「あんたねぇ。今、この船はかなりの速度で走ってるのよ。そんなに魚が獲りたいんだったら、まずは船を停めてもらってきなさいよ。キャラバンの旅は少し忘れて、のんびり釣りを楽しむっていうんだったら、あたしはべつにそれでもかまわないから」
「あ、そういうのも面白そうだね。少しくらいだったらいいんじゃない」
「まったく、あんたは……」
寝台の上で屈託なく笑うハーディに、イ・リュは呆れ顔を向けた。
「おい、おまえら。ライナリー島だ。もうすぐルダの村に到着するぞ」
部屋の外から渡し守のトリスタンの声が聞こえてきた。
その声にリッドたちは船室を飛びだしていった。クリムも足下のおぼつかないハーディに肩を貸しながら甲板に向かった。
外に出るとすぐ前方に大きな島が近づいてくるのが見えた。船は島の斜面に建ち並ぶ布張りのテントの群に近づいていく。ルダの村だ。漁業中心の村らしく浜辺に小さな舟がいくつも並

び、漁に使われるのだろう網がそこかしこに広げられている。家の軒先に腹を開かれた魚が干されているのも見えた。

「でも、なんでセルキーはこんな辺鄙な島に住んでるんだ？」

リッドが何気ない感じでイ・リュに尋ねた。

「知らないわよ。他に住むところがなかったからじゃないの。何か、セルキーって大昔は海賊だったって話しだし。他の町に住もうとしたって、煙たがれるでしょ。リルティなんか、絶対に認めなさそうじゃない」

そう答え、イ・リュはリッドを見て小馬鹿にするように笑った。

「なんだよ、いい加減なこといいやがって。何でもかんでもリルティを悪者にしてんじゃねえよ」

頬を膨らませ顔を背けたリッドは、説明を求めるようにハーディを見た。

「でも、だいたいイ・リュのいったとおりだよ。元々、セルキーはこの島を拠点に生活していたらしいんだけど、一部の民が新天地を求めて大陸に渡ったらしいんだ。でも、結局そんな場所は見つからずに、今もセルキーはほとんどがライナリー島で生活してる。まあ、セルキーって他人と係わるのが得意じゃない種族だからね、いろいろあったみたいだよ」

ハーディの説明に、リッドは面白くなさそうにさらにむくれた。

「別に、関係ないわよ。どうせ好きでここに住んでるんだから。ここがいやだったら、どっか他に生活できる場所さがすわよ。セルキーなんてそんなもんなんだから」

イ・リュは自嘲的な笑みを浮かべてそういって、リッドを見てけらけらと笑った。
クリムたちの乗った船は、舟が並ぶ浜から少し離れた桟橋脇に停まった。
「んじゃ、くれぐれも気をつけて行ってきな」
渡し守は船を桟橋に固定しながらそういうと、不敵な笑いをこぼした。
クリムはあいまいに頷き返しながら、桟橋に渡された板をパパオの手綱を引いて歩いた。
ハーディはサムルンティに支えられるようにして、クリムの前を歩いていた。
「お先！」
クリムやハーディたちを追い越すように、リッドが船の縁から桟橋へ飛びおりた。長い間船に揺られていたせいだろう、桟橋に着地したリッドは態勢を崩しそのまま数歩よろけた。近くを歩いていた漁師らしきセルキーが慌てた様子で、倒れかかったリッドを支えた。
「おうおう。あぶねえな、あんた。だいじょぶかい」
「え？　ああ、すみません」
「いいってことよ、これくらい。それより、気をつけなよ」
リッドの肩を軽く叩いてそういうと、セルキーの漁師は足早に去っていった。
「なっさけないわね。見てらんないわ」
イ・リュは甲板からリッドを見おろし、鼻で笑った。
「しょうがないだろ。初めて海に出て五日も船の中にいたんだし。ハーディに比べりゃ、全然まともだろ」

「そういうことをいってんじゃないわよ」
「ちょっと、お兄さん」
桟橋の上で手綱を手にリッドとイ・リュのやり取りを見ていたクリムに、セルキーの女性が声をかけてきた。
「パパオはね、この先のところに繋いでおいて欲しいのだけど」
セルキーの女性は村を回りこむように伸びる坂を指していった。
「あ、すみません。すぐに連れて行きます」
「そうじゃなくて、繋いでおく小屋がちょっとわかりづらいところにあるから、よかったら案内してあげようかと思ってね」
「そうなんですか。じゃあ、すみませんけどお願いします」
クリムは女性に頭をさげ、皆の方に目をやった。
「ちょっと、パパオを繋ぎに行ってくるよ」
「おう、頼んだ。オレたちはこの辺で待ってるから」
「それじゃ、行きましょうか」
そういいながらセルキーの女性が腰に手を回してきたので、クリムは思わず躰を硬くした。
「あら、ごめんなさい。こういうのには慣れてなかった？　さ、こっちよ」
くすくすと笑いながらそうって、女性はクリムの前に立って歩きだした。
パパオも船に酔ったのだろうか、躰を左右に揺らめかせながら歩いている。「だいじょうぶ？」

とクリムが尋ねると、パパオは「ふもっ」と小さく啼いた。
女性は村の出口脇に建つテントにクリムを案内した。
テントの支柱にパパオを繋いだクリムは、柔らかく手を振る女性に見送られて桟橋に戻る途中に「あれなら案内してもらわなくても見つけられたな」と少し申し訳ない気になった。
クリムが戻ると、ふくれっ面のイ・リュの周りで、ハーディが困り顔を、リッドが呆れ顔をしていた。
「今度は、何？」
クリムが尋ねると、リッドが大げさに肩をすくめた。
「また、こいつのわがままだよ」
「何がわがままなの。さっさと出発しようっていってるだけじゃない」
「なんで？」
「長いこと船に揺られてたから、歩きたい気分なのよ」
イ・リュの言葉に、リッドが小さなため息をこぼしクリムを見た。
「しかし、そうですね。今日はまだ日も高いですし、出発してしまうのもいいかもしれません。ハーディが無理でないというのだったらですが」
「僕はどっちでもいいよ。荷車の揺れには慣れてるから、平気だと思うし」
判断を迷っていたクリムの目に、鬼のような形相で睨みつけるイ・リュの顔が映った。クリムは思わず唾を飲んだ。

「……出発したほうが、いいと思う……かな」
「ちぇっ、わかったよ。じゃあ、このまま出発する。それでいいんだろ」
不満そうにリッドがそういうと、イ・リュはつまらなそうに唇をゆがめた。
先ほど案内された坂を登りパパオのところに向かったクリムたちは、荷車に乗りこみルダの村を離れ、島の奥へと移動を始めた。
「せっかく、久しぶりに柔らかいベッドで寝られると思ったのによ。あの船の寝床って硬かっただろ。腰とか痛いんだよ」
幌の隙間から遠ざかる村を眺め、リッドは残念そうに呟いた。
「ほんっと、おめでたいわね。あんたは」
「何だよ、そりゃ」
呆れきった口調のイ・リュの言葉に、リッドは顔をしかめ振り返った。クリムもハーディも首をかしげながら彼女を見た。
「あたしがいうのもなんだけど、あそこは生粋のセルキーの村なのよ。あんたたちみたいなのは、カモ以外の何者でもないの」
「何のこといってんだ？」
「さあ？　ためしに財布の中確認してみたら」
せせら笑うイ・リュに寒気を感じ、クリムは腰から提げた硬貨を入れた袋を手に取り中身を床に広げた。

「あ、足りねえ。五十ギルは減ってるぞ」
リッドの叫びを聞きながら、クリムは硬貨を見つめ唖然とした。船に乗る代金を払った時に確認したので、財布の中身は記憶していた。その記憶と、目の前に硬貨の金額に三十ギルの差がある。
「僕も、少し盗られてる……」
「そういうことよ」
「何だよ。知ってたんなら、先に教えてくれりゃよかっただろ。なんで、今さらいうんだよ」
「盗られる方が悪いのよ。こうやって教えてあげただけでも、充分すぎる親切だと思うけど」
薄い笑みを浮べたイ・リュをクリムはあっけに取られた表情で見つめた。リッドは絶叫しながら激しく頭をかきむしっていた。

*

ライナリー島の中央に拡がるライナリー砂漠をクリムたちは歩いていた。乾燥した風と照りつける太陽に多量の汗が流れ落ち、喉が異様に渇いた。砂漠の広さがわからないので水を浪費するわけにはいかず、渇きを堪え歩きつづけるしかなかった。
「あーもう、駄目。このままじゃ、乾涸びるわ。もう、耐えらんない水飲むわよ」
がらがらにしわがれた声でイ・リュがいった。

「馬鹿。もう少し我慢しろよ。水が尽きたら、本当に乾涸びるんだぞ」
「我慢我慢って、じゃあいつなら飲んでいいの。今飲まなかったら、死ぬかもしれないのよ」
「ねえ、サムルンティ。ブリザドって、今使える」
枯れかかった声でいい争うイ・リュとリッドの間を割って、ハーディがぽつりといった。
「あ！　ハーディ、あんた賢い。そうよ、ブリザドよ。氷出せば涼めるし、喉だって潤せるじゃない。水の補給もできるわ」
「え？　あ、うん。そんなつもりじゃ、なかったんだけど」
ハーディは戸惑いがちにイ・リュを見た。
「それで、ブリザドは使える？」
「ええ。魔石は手に入れましたから」
「じゃあさ、この三つの岩に向けて放って欲しいんだ」
そういってハーディは傍らにそびえる巨大な岩に目をやった。岩は彼の周囲に大中小と三つ、きれいに並んでいた。
「それは、かまいませんが。ええっと……どれからでしょうか」
青い魔石を手に岩と向きあったサムルンティは、首をかしげハーディを振り返った。
「えっと、ちょっと待ってね。次々ってことは兄さんからだよね……で、岩って風化するものなんだから……うん。小さいのから順番に頼むよ」
「わかりました」

サムルンティは頷き、岩に向かって手を突きだした。魔石が青い光を放ち、空気が緩やかにサムルンティの手の中に集まっていく。小さな白い氷の粒が手の中で踊ったかと思うと、激しい音と共に弾け岩が氷に包まれた。

立てつづけに三つの岩が凍りついた。一瞬の静寂の中、クリムたちは全員三つの岩を見つめていた。が、これといって何が起こる様子もない。

「あれ？　おっかしいな」

ハーディは変化のない岩を見つめ、大きく首をかしげた。

「おっかしいなじゃないわよ。さ、もういいでしょ。サムルンティ、こっちに氷お願い」

「はいはい、わかりました」

わずかに肩をすくめイ・リュの方へ向かうサムルンティと入れ替わるように、クリムはハーディに歩み寄った。

「何をしたかったの」

「ん？　ああ。ほら、前にシェラの里の人に手紙をもらったじゃない。あれに、僕が見つけたのと同じような詩が書いてあったんだよ。それに『岩の三兄弟次々凍てつき』って書かれてたからね。今、あれを見た瞬間に、これのことだって思ったんだけど」

ハーディは再び岩を見つめ、首をひねった。

「違うのかなぁ。これだと思うんだけど。それとも、何か足りないのかな」

*

ライナリー砂漠でミルラの雫を手に入れルダの村に戻ったクリムたちは、セルキーたちに金を盗まれることを恐れ、すぐさま船に乗りこみ島を離れた。

ジェゴン川東岸の船着き場に近づいていく船の上から、クリムは桟橋近くの小屋の前にアルフィタリア騎士団が固まって立っているのを見つけた。

「ようやく戻ってきたか」

クリムたちが下船するのにあわせるように、騎士団が隊列を組み船に歩み寄ってきた。

「対岸への渡しも南方の島への渡航も一隻でというのでは、やはり大変だな。トリスタンよ、誰か雇い入れて船を増やそうとは思わないのか」

船をおりるクリムたちを横目に、騎士団長は渡し守に問いかけた。船上から顔を覗かせた渡し守は、困った様子で頬を掻いた。

「無理いわないでくださいよ、団長。そんな余裕ありませんて」

「そうか。いや、そうだな。つまらないことをいった」

「あんだけ高い金取っておいて、余裕のない生活ってどんなのよ」

イ・リュは馬鹿にするように笑いながら、小さな声で呟いた。だが、その声はしっかりと渡し守の耳に届いたようだ。渡し守はわずかに頬をひくつかせイ・リュを見た。

「俺にもいろいろとあんだよ、嬢ちゃん。船造るのだって安くはないんだぜ」

渡し守の言葉には答えず、イ・リュは小さく肩をすくめた。
「それよりも、キランダ火山に向かいたいのだが、頼めるかな」
「ええ、了解しました」
「うむ。皆、出発だ。船に乗りこめ」
団長がそういうと、船の下で待っていた騎士団員たちがいっせいに動きだした。隊列の後方でパパオの手綱を手に控えていた騎士が、ひときわ大きく鎧を鳴らしきびきびと動いていた。
「あれ？　新しい人？」
クリムは何とはなしにパパオを引く騎士に問いかけた。すると、その騎士は大きな動きでクリムの方へ躰を向け、背筋をまっすぐに伸ばしアルフィタリア式の敬礼をした。
「はい。今年からアルフィタリア騎士団キャラバン隊に配属されたソール＝ラクトです。よろしくお願いいたします」
「あ、うん。ぼくはティパの村のクリム。こちらこそ、よろしく」
クリムは狼狽と恐縮を感じながら頭をさげた。
「ソール、何をしている。早く乗船しないか」
「はい。申し訳ありません」
船上から飛んできた団長の言葉に深く頭をさげソールと名乗った騎士は、もう一度クリムの方に向きなおり軽く会釈した。
「それでは、急ぎますので失礼します」

そういってソールはパパオを引き、足早に船に向かった。
ソールが乗りこむと、船は渡し板をしまい桟橋を離れた。川の流れに乗るようにゆっくりと進みながら、船体を反転させ船は遠ざかっていった。

3

麦畑の真ん中に立ったクリムは、鎌を手に小さなため息をこぼした。
今年も麦は不作だった。病気に侵されたと見て取れる麦の数も、明らかに去年よりも多くなっている。このような有様を目の当たりにすれば、クリムでも暗澹たる気もちになる。一年間手間をかけて世話をしてきたノアやノアの家族が暗く沈むのも当然だろう。
ノアはクリムのすぐ側にしゃがみこみ、悲痛な顔で麦を刈っている。体調が悪いのだろうか、彼女は時たま小さな咳をこぼしていた。
「さすがに深刻な事になってきたよ。三年もつづいたのではね」
力ない声でそういって、ノアの父は短く刈りこんだ髪を掻いた。
「この畑を捨てて、新しい畑を作ることも考えてみた方がいいかもしれないな」
独り言のように呟きながら、実をつけなかった麦穂を次々と刈り取っている。
何と答えていいかわからず、クリムは黙ったまま腰を落とした。視界を埋める元気のない麦穂の群をしばらく見つめ、刈り取りを再開した。

それから、クリムは黙々と麦を刈りつづけた。ノアもノアの父もわずかもしゃべろうとせず、麦穂を刈る鎌の音と時折こぼれるノアの咳しか聞こえなかった。

どれくらい麦刈りをしていたのだろう、遠くの方で人がざわめく音を耳にしてクリムは立ちあがった。ずっとしゃがんでいたせいで、躰を伸ばした時に腰が痛んだ。

「何があったんだろう」

腰を抑えながら声のする方へ目をやったクリムは、広場に人だかりができているのを見つけて首をかしげた。

「気になるのなら、行ってきたらどうだい」

「え？　でも」

クリムが不安顔を向けると、ノアの父はにっこりと笑った。

「いいよ。少し休憩にしよう。ほら、行ってきなさい。ずっとこんなところで座っていたんじゃ、つらいだろ。いろいろと」

「すみません。それじゃ、ちょっと行ってきます」

クリムは頭をさげながらそういうと、傍らでクリムに背を向けるように腰をおろし淡々と麦を刈っているノアを見た。

「さ、行こう。ノア」

「わたしは、いいよ……」

うつむいたまま答えたノアの手を強引に掴み、クリムは彼女の腕を引いて駆けだした。

柵をくぐり畑の外に出たクリムは、浮かない顔でたたずんでいるノアを抱えあげ柵を乗り越えさせた。
「きゃっ」
小さく悲鳴をあげたノアは、クリムが手を離した後もしばらく大きく見開いた目で自分の足下を見つめていた。
「どうかした？」
「だって、急に持ちあげるんだもん」
胸を抑えたノアが、息を荒くしながら驚き顔のままクリムを見た。
「あ、びっくりした？　ゴメン」
「そ、そんなことないけど」
答えながら、ノアはわずかに頬を赤らめ顔をそらした。と同時に、彼女は「こほん。こほん」と小さく咳こんだ。
「風邪？　さっきからずいぶん咳してるけど」
顔をしかめクリムが尋ねると、ノアは笑顔で首を振った。
「ううん。ちょっと、喉が痛いだけ。たいしたことないよ」
そういいながら、ノアはさらに数度咳をした。クリムはいっそう顔をしかめながら、それでも彼女の言葉に頷いた。
「そう。なら、いいけど……」

「うん、だいじょうぶ。ほら、行こう」
そういって、今度はノアがクリムの手を取って広場に向かって駆けだした。
「何があったんです？」
広場までやって来たクリムは、近くに立っていた人に尋ねた。
「ん？　ああ、ヘルナドが帰ってきたんだってよ。ファムのキャラバンと一緒に」
しきりに背伸びして人だかりの向こうを覗こうとしながら、リンゴ農家をしているクラヴァットの男性が答えた。
「いいの？　畑放ってきちゃって。おじさんのところのリンゴだって、今年は出来が悪いんでしょ」
うつむきがちにノアが尋ねた。その声には少しだが棘があるように感じられた。
「うん、まあそうなんだがな。でも、だからこそ、こんなことででも気晴らししないと、気が滅入ってやってられんのだよ。なんでもヘルナドが連れてきた女房ってのが、えらい美人だっていうからな。とりあえずは、きれいな顔でも拝んで元気を出そうとだな。他の連中だって、同じような気もちだろうさ。そうだ。ノアちゃんも畑のこと忘れて少しは遊んだほうがいいぞ。たまにはクリムとデートでもしてだな」
リンゴ農家の主人の言葉に、ノアはさらに深くうつむいてしまった。クリムはリンゴ農家の主人と顔を見あわせ苦笑した。その時、人垣の向こうから怒鳴り声が響いてきた。
「だーっ！　いい加減にしろっての」

絶叫と共に集まっていた人たちが散り散りに駆けだした。あっという間に人だかりはなくなり、その場にはクリムたち数人だけが取り残された。

人だかりのなくなった広場の真ん中に、険しい顔で肩を怒らせているヘルナドの姿があった。彼の後方には苦笑を浮べているルアージュとファムのキャラバンの人たちがいる。

「ったく、見世物じゃねえっての」

鼻息荒くそういったヘルナドは、クリムと目があうと笑みを浮かべた。

「よう、クリム。元気だったか」

「う、うん……」

クリムはあっけに取られながらぎこちなく頷いた。

「そいつは何よりだ。ノアも、久しぶりだな」

「うん」

笑顔で頷いたノアを見たヘルナドが、不意に表情を曇らせた。

「なあ、クリム。どうしたっていうんだ、この村の有様は。何かこう、暗い感じっていうか、いやな感じっていうか。あちこちぼろぼろじゃないか。それに、ノアまでえらく元気がないし」

「わたし、元気だよ」

ノアは咳をしながら慌てた様子でそういった。ちらりと彼女に目をやったヘルナドは、怪訝な顔を再度クリムに向ける。

彼の顔を見返していたクリムの意識は、一瞬ヘルナドの後ろに立っている一団に向いた。

「そうだよ！」
思わずあげた大声に、ヘルナドが驚きの表情に変わる。ノアもびっくりした顔でクリムを見ていた。
「相談してみようよ、ノア」
昂揚しながらいって、クリムはノアの手を強く握った。
「あの人たち、ファム大農場から来てるんだよ。ぼくたちなんかより、きっとずっと詳しいよ。ぼくたちが知らない対処法を教えてもらえるかもしれない」
クリムの言葉を聞いたノアの目は大きく見開かれ、明るく輝いた。
「よしっ。ヘルナド、ファムの人たちと一緒について来て」
「な、なんだよ、いきなり」
「いいから、早く」
有無をいわせぬ勢いのクリムに戸惑った様子で、ヘルナドは肩をすくめながらファムのキャラバンに声をかけた。

＊

「こりゃ……ここが一番ひどいな」
畑を一目見て、ヘルナドは顔をしかめてそういった。

「ここ数年、毎年こんな感じなの。どうしてこうなっちゃうのかわかんなくて……」
「なるほどな」
ノアがうつむきがちに説明すると、ヘルナドは大きく頷いて柵を乗り越えた。
「ヘルナド、わかるの？」
問いかけたクリムに、ヘルナドは馬鹿にするなといわんばかりの笑顔を向けた。
「こう見えても、今じゃファム大農場の麦畑の婿だぜ」
そう答えたヘルナドは、しばらくの間麦穂を凝視したり、土を掴んで睨んだり匂いを嗅いだり、ノアの父に何やら問いかけてみたりと、畑の中を右に左に動き回っていた。
「……どうしてかわかった？」
すがるような目で尋ねたノアに、ヘルナドは渋い顔で頭を掻いた。
「今見ただけじゃ何ともいえないが、本当に毎年こんな状態がつづいてるんだったら種籾自体が病気に冒されてるのかもしれないな」
「なるほど、確かにその可能性はあるね。でも、だとしたら対処が困難だな」
難しい顔で考えこんだノアの父に、ヘルナドは笑顔を向けた。
「ちょうど、土産代わりにと思ってうちの種籾を少し持ってきてるんだ。とりあえず、来年はそれを蒔いてみたらどうだろう」
「本当かい。そいつはありがたい。ぜひ使わせてもらうよ」
ノアの父は力ないながらも笑みを浮かべた。ヘルナドを見るノアの目も、ほのかに潤み輝い

ている。心配そうに胸の前で組まれていた彼女の手に力がこもるのが見えた。
「それじゃ、さっそく」
そういって柵を乗り越えたヘルナドは、その場に集まり成り行きを見守っていたファムのキャラバンたちの前で足を止めた。
「ああ、みんな、俺だけで足りるから、もういいよ。宿にでも行って休んでてくれ」
「やれやれ」
キャラバンのリーダーらしき男性が、ため息をこぼしかぶりを振った。
「まあ、こうなるんじゃなかとは思ってましたたけど。ほんっとに、あなたはマイペースですね。今まで僕たちのこと忘れてたでしょう」
「すみません、わたしが変なことお願いしたから」
苦笑まじりのファムのキャラバンリーダーの言葉に、ヘルナドより先にノアが恐縮した様子で深く頭をさげた。
「いやいや、別にいいんですよ。そんなつもりでいったんじゃないですから。そんなに謝られたら、こちらが悪いことをしている気になります」
笑顔のままでそういって、キャラバンリーダーはクリムたちに軽く会釈した。
「それでは、僕たちはこれで失礼しますね」
頭をさげるクリムとノアに手を振り、ファムのキャラバンたちは連れ立って広場の方へと去っていった。

「ルアージュ。おまえも先に行っててくれていいぞ」
キャラバンを見送りながらヘルナドが傍らに立つルアージュに向けてそういった。その言葉を聞いた瞬間、穏やかな笑みを浮かべているルアージュのこめかみが小さくぴくりと震えた。
「わたしは確か、あなたの実家にお邪魔することになってたと思うんだけど」
笑顔で発せられたルアージュの言葉に、ヘルナドは絶句した様子で大きく口を開いた。
「すまない。いや、そうだったそうだった」
狼狽しきった様子でそういいながら、ヘルナドは顔の前で両手をあわせ頭を深くさげた。
「悪い。ノア、おじさん、種籾は明日持ってくるから。んじゃ、ルアージュ行こうか」
「ええ」
ルアージュは笑顔で答え、ヘルナドの後について歩き始めた。
クリムはあっけにとられながら遠ざかる二人の後ろ姿を眺めていた。ノアはくすくすと笑っている。
「よかったね、ノア。何とかなりそうだよ」
「うん」
ノアは小さく咳こみながら満面の笑みをこぼした。ここしばらく見られなかった、明るい顔だった。
「ああ、本当にありがたい話だよ。でも、種籾をもらっても蒔くのはまだ先の話だ。今はまず、

今年の麦を刈ってしまわないとね」
「任せてよ」
クリムは威勢よく答え、勢いをつけて柵を乗り越えた。

*

翌日、昼を前にクリムは麦刈りの手を休め小休止を取っていた。ノアの家の軒下に置かれた椅子に腰をおろし畑を見つめていたクリムのところに、アイランが寄ってきた。
「なあなあ、クリム。昨日、なんかいいことがあったのか？」
アイランはクリムの前にしゃがみこんでそう尋ねた。彼の声は、去年聞いた声よりも幾分低くなっていた。見た目もすでに子どもから立派な少年のものに変わっている。このぐらいの年齢の子どもは成長が早い、クリムも毎年村に帰ってくる度にアイランの変化には小さな驚きを感じていた。
「いきなりなんだよ。なんで、そんなこと思ったのさ」
「ほら、ここんとこ毎年畑がこんな感じじゃん。だから、夕食の席っていつもどんよりとした空気があったんだよ。それが昨日は、何かみょうに明るかったから」
「ああ、そういうことか」
クリムは納得し大きく頷いた。

「昨日、ヘルナドが来てファム大農場から持ってきた種籾をもらえることになったんだよ。だから、来年の麦のことを心配しなくてよくなったんだ」
「なんだ、そんなことかよ」
アイランは本当につまらなそうにがっくりと肩を落とした。
「そんなことってことはないだろ」
「てっきり、クリムがねーちゃんに結婚でも申しこんだのかと思って期待したのに」
「ば、ばかっ。何いってんだよ、いきなり。変なこというなよ」
クリムは顔を真っ赤にし、うろたえた。
「何でさ。べつに変じゃないだろ。クリムもねーちゃんも、もう結婚していい歳になっただろ」
「そそ、そういう問題じゃないだろ」
狼狽し視線を彷徨わせたクリムは、柵の向こうにヘルナドとルアージュの夫婦とファムのキャラバンの面々が近づいてくるのを見つけた。
「あ、ほら、ヘルナドが来た。アイラン、おじさんとノアを呼んできて」
椅子から立ちあがり、クリムはそういいながら逃げるように足早に柵の方へ向かった。
「わざわざ、みんなで来てくれたんだ」
クリムがそういうと、ファムのキャラバンリーダーは軽く首を横に振った。
「いえ、僕たちはもう出発するんで、挨拶をと思いましてね。キャラバンの方たちとは何かと出会う機会も多いですから。せめて代表の方だけにでも挨拶はしておきたくて」

クリムは激しくかぶりを振った。
「ぼくたちのリーダーは、リッドです。鍛冶屋にいます。ぼくなんかに、キャラバンを率いるなんて無理ですよ。とても、そんなことできません」
「そう、なんですか。まあ、いいです。僕はあなたに挨拶をしようと思ったんですし」
不思議そうに首をかしげたキャラバンリーダーはそういって、手を差しだした。
「あ、はい。お気をつけて」
クリムは戸惑いながら、手を握り返した。
「ありがとう。それでは、失礼します」
にこやかに会釈し、ファムのキャラバンのメンバーは去っていった。
彼らの背中を見送りながら、小さな疑問が浮かんだクリムは首をかしげた。
「ヘルナドたちはいいの？　あの人たちもう出発しちゃうんでしょ」
「こんな状況の畑見せられたってのに、種籾だけ渡して、はいさようならって帰れるわけないだろうが。俺は残ってしばらく畑の様子を見させてもらうよ」
「それは、そうかもしれないけど、ルアージュさんはかまわないの？」
「亭主が残るっていってるのに、わたし一人で帰るわけにもいかないでしょ。こういう人だってわかって結婚したんだし、ちゃんとつきあわせてもらうわ」
そういってルアージュは笑顔のまま肩をすくめた。
彼女の言葉を感心しながら聞いていると、ノアとノアの父がやってきた。

「ああ、おじさん。これが昨日いってた種籾」
そういってヘルナドは、手にしていた皮の袋をノアの父に差しだした。
「本当にすまないね。助かるよ」
「それで、今クリムにもいってたんですけど、俺もしばらくティパに留まって畑の様子を見ていきますから」
「そんな、悪いよ」
「いえいえ。俺の好きでやるんですから。向こうでそれなりに鍛えられてるんで、一応は期待しておいてくださいよ」
そういって軽く頭をさげたヘルナドは、急にクリムに顔を向けた。
「だから、おまえは妙な心配したりしないでキャラバンの旅に専念しろよ」
鋭い目に見つめられ心臓が小さく跳ねるのを感じたクリムは、唾を飲みくだし胸を張った。
「わ、わかってるよ。しっかりやるさ」

4

ヘルナドやルアージュを含む村人たちに見送られ、クリムたちはキャラバンの旅に出発した。
ノアも去年までとは異なる、本来の明るい笑顔で手を振っていた。
——麦の心配はもういらない。ノアに負けないように、ぼくもしっかりやるんだ。

少し色あせほつれ始めた腕輪を強く握り締め、クリムは自分に言い聞かせるように心の中で繰り返した。

「気持ち悪いわね、なにをそんなにニヤニヤしてんのよ」

イ・リュの言葉に顔をあげたクリムは、彼女の視線の先に樽の上に腰をおろし頬を緩ませているリッドの姿を見つけた。リッドは、手紙の封を切るのか果物を切るのに使うような小型の剣を手にしていた。

「へっへっへっ、いいだろう。すげえだろう」

にやにやと笑いながら、リッドは突きつけるように小剣をクリムとノアに向けた。よく見るとその小剣は、刃がいびつにゆがんでいて、輝きにもむらがある。

「何がいいのよ。全然切れなさそうだし、小汚いし。少しもうらやましくないわよ」

「おまえなんかにわかるかよ、バカ。こいつはな、テッドが初めて鍛えたもんなんだぞ」

「へえ、それはすごいや」

クリムは心底感心し声をあげた。

「だろ、だろ。去年から親父に習って鍛冶の修行を始めたんだってよ。いつか、オレが使う立派な武器を作るんだっていってさ。その約束代わりだってこいつをくれたんだ。まだまだガキだと思ってたのにな……」

リッドはますます頬を緩めて、嬉しそうに語った。

「ほんとね。そんなだらしない顔見てると、あんたの方が遥かにガキっぽいわ」

呆れ顔で放たれたイ・リュの言葉など耳に届いていないらしく、リッドは緩みきった顔で小剣をしきりに磨いていた。

5

クリムたちはジェゴン川を渡り、大陸西部をファム大農場のさらに奥地へと進み、コナル・クルハ湿原と呼ばれる大湿原にやって来た。無数の沼を持つこの湿原は、長い草に被われた地面も水を含みひどくぬかるんでいる。大気にも水分は染みだしていて、空気がまとわりつくように重かった。ほかの場所よりも濃いのだろう瘴気が、高湿のために立ちこめた霧と混ざりあい見通しを悪くしている。

クリムたちは警戒しながらゆっくりと湿原の中を進んだ。一歩足を踏みだす度にぐちゅりぐちゅりと足下で湿った音がして、靴に水が染みこんでくる。初めのうちイ・リュは、その不快感に一歩ごとに愚痴をもらしていたのだが、それにも疲れたのだろうか今はひどく不機嫌そうな顔で黙々と歩いている。

クリムもしばらくの間は足下の不確かさと靴の中の気もち悪さが気になったが、今はそれよりも大きな疑問が頭の中にあった。

「魔物、全然襲ってこないね」

「ああ」

頬から汗を滴らせながらリッドが頷く。
「いいことじゃない」
能天気な声でいったハーディをリッドが一瞥した。
「視界が悪いから、いつも以上に気を張ってそこらじゅう見てんだよ。こう静かだと、かえって疲れる」
「そういうもんなんだ」
ハーディの言葉を耳にしながら、クリムは唾を飲み剣を握る手に力をこめた。前方の濃い霧の中に一瞬影が踊ったのが見えた。
「どうした」
クリムの緊張が伝わったのだろう、リッドが身構えクリムの見ている方へ顔を向けた。だが、影はもう見あたらなかった。
ゆっくりと前進すると、不意にクリムたちの耳に静寂を裂く剣戟の音が届いた。霧の隙間から魔物の群と戦うアルフィタリア騎士団の姿が浮かびあがる。多数の魔物に囲まれ、騎士団は苦戦を強いられているようだった。
クリムの目に、新人騎士ソールの姿が映った。
彼の右腕には大蛙の舌が絡みついていた。滴る唾液が毒か酸を含んでいるのだろうか、舌が絡まった篭手から煙が一筋立ちのぼっている。ソールは必死にもがき腕を振り回し逃れようとしていたが、彼の腕を捕らえた魔物の舌はわずかも緩む気配を見せない。ぬかるむ足場の

せいで踏ん張りも利かないのだろう、ソールの躰はずるずると魔物の方へと引き寄せられていっている。他の騎士たちは目の前の魔物の相手をするので精一杯らしく、誰もソールを助けに向かえずにいた。

――このままじゃ、危ない。

そう思うと同時に、クリムは駆けだしていた。柄を握る手に力をこめ、剣を鞘から抜き放つ。大きく息を吸いこみ口を引き結ぶ。目の前に聖域と瘴気の境界が迫った。アルフィタリアのクリスタルケージの聖域までは、わずかだが距離がある。クリムは強く前へ踏みだすべく身を沈めた。

その瞬間、視界の隅を黒い人影がよぎった。その大きさから、リッドだろうとクリムは思った。しかし、違った。黒い鎧と黒い鉄仮面で全身を被った見知らぬ騎士だった。

脇から飛びだしてきた黒ずくめの騎士は高く跳びあがると、クリムの胸を蹴り飛ばした。その反動で騎士は前へ飛んでいく。クリムは地面に転がりながら黒い鎧の騎士の姿を目で追った。

黒い騎士はソールを襲っている蛙へとまっすぐ飛んでいく。まるで切り裂かれるように瘴気は彼の周囲から退いていく。クリスタルにでも守られているのだろうか。

着地と同時に黒い騎士は手にした長い斧を振りおろした。魔物の舌が両断され、ソールの躰が後ろに倒れる。黒い騎士は振りおろした勢いのまま斧を返し、薙いだ。蛙の魔物は大きく弾き飛ばされ、血を撒き散らしながら転がっていく。

「おい。大丈夫か、クリム」
いつの間にか隣にリッドが立っていた。クリムを助け起こそうと手を差しだしている。
彼の手を掴みながら、クリムは茫然と黒い騎士を見つめていた。黒い騎士は信じられない勢いでアルフィタリア騎士団を襲っていた魔物を次々と倒していった。
「それにしても、すごいな。何者なんだ、あいつ」
クリムを助け起こしたリッドも、口を半開きにしていた。
一帯の魔物をすべて倒した黒い騎士は斧を振り刃についた血を落とすと、そのまま湿原の奥に向かって歩きだした。
「待てっ」
去ろうとする黒い騎士の背中に、アルフィタリアの騎士団長が怒鳴るように声をかけた。
その一言で、目の前で起きたことを信じられない様子で固まっていた騎士団員たちが我に返ったらしく、いっせいに黒い騎士に顔を向けた。黒い騎士も足を止めた。
「それが、おまえの求めた強さとやらか」
団長が静かに問いかけると、黒い騎士が半分ばかり振り返った。
「なるほど、確かにみごとだな。正直驚嘆した。それだけの力を手に入れたのだ。もう充分だろう。どうだ、騎士団に戻ってこんか」
「おっしゃってることが、よくわかりません。人違いをなさっているのではありませんか」
低い声でそう答え、黒い騎士は再び騎士団長に背中を向けた。

「待てといっている！」
騎士団長は声を荒らげ叫んだ。
「おまえの妻ジョナ＝エズラが子どもを産んだのだ。名は、レオン。男の子だ。おまえは、息子に父のない生活をさせるつもりか。帰って来い！」
「ですから、人違いだといっています。私は黒騎士。それ以外の名は持ちません」
そういい放つと、黒騎士は地を蹴り霧の中へと姿を消した。
騎士団長は苛立たしげに槍の尻で地面を叩いた。
「何だったんだ、あいつは。いきなり現れて。だいたい、一人でこんなところで何してたんだよ。クリスタルケージも持ってないみたいだったし」
黒騎士の去った方を見つめつづけていたクリムは、訝しげに発せられたリッドの呟きに我に返った。
「魔物を倒していたのではないでしょうか。ここにはミルラの樹と魔物しか存在しないのですから。私たちがここまで魔物と遭遇しなかったのも、あの黒騎士なる人物が駆逐していたのだと考えれば筋が通りますし」
「でも、そんなことして何になるんだ」
リッドは納得できない様子で首をかしげ、サムルンティを見た。
「なんでもいいじゃない。あたしたちには関係ないんだし。それに、あの黒いのが魔物倒してくれるっていうんなら、楽にミルラの樹まで行けていいじゃないの」

からからと笑うイ・リュの傍らで、ハーディが小さく呟いた声がクリムの耳に入った。
「そうか。もしかして、そういうことなのか……」
一人納得した様子で何度も頷くハーディを見て、クリムは首をかしげた。

6

村に戻ったクリムは、出迎えに集まった村人の中から農家の人たちを探して、小さな革袋を配っていった。ヘルナドに倣い、ファム大農場を訪れたときに野菜や果物などの種をできるだけ分けてもらってきたのだ。しかし、種をもらった村人たちは、おざなりな礼を述べるだけであまり喜んでいないようだった。
その態度に疑問を感じながらも、種を配り終えたクリムはすぐに麦畑に向う。
広場を横切ったクリムはクリスタルの前に立っているヘルナドを見つけた。ヘルナドは何やら真剣な表情でクリスタルを見つめている。
「ヘルナド！」
クリムが呼ぶと、ヘルナドは弾かれたように振り返った。
「おお、クリム。帰ったのか、お疲れさん。で、どうしたんだ？」
「ノアのところに行こうと思ってたところ。ヘルナドは何をしてたの？」
「ちょっと考え事をな。それより、麦畑に行くんだったら、俺もいっしょに行こう」

そういってヘルナドはわずかに表情を曇らせながら、クリムの背中を叩いた。
ヘルナドと共に麦畑の前にやって来たクリムは、呆然と立ち尽くした。麦は去年までと同じひどい状態だった。病気に冒され黒ずんだ麦は去年よりも多いかもしれない。畑の真ん中で、暗い表情で枯れた麦穂を刈っているノアの姿を見つけ、クリムは唇を噛んだ。
「種籾が原因じゃなかったんだよ。間違いなく、土か水がいかれちまってる」
隣に立つヘルナドが重いため息をこぼしながら、いった。
「そんな……」
「でも、畑のことはそんなに気にする必要はない。この一年いろいろ見てきて、わかったからな。来年からおまえたちキャラバンが頑張ってくれれば、少しずつだろうが間違いなく何とかなる」
「……ぼくたちが？」
首をかしげたクリムに、ヘルナドは強く頷いた。
「ああ。そんなことよりも、今、問題なのはノアだ」
「えっ？　ノアが、どうかしたの」
クリムは心臓が強く脈打つのを感じながら畑を見た。
「畑の仕事によっぽど責任を感じてるんだろうな。あんな調子で働きつづけてる。それに、ずっと体調が悪そうだ。あれじゃ、いつ倒れてもおかしくない」
ヘルナドの言葉を聞き慄然としていたクリムの目の前で、ノアが湿っぽい咳を繰り返しなが

らうずくまった。
「ノア！」
柵を飛び越え、クリムはノアに駆け寄った。傍らにしゃがみ、彼女の背中をさする。
「家に入ろう、ノア。休んだほうがいい」
ノアは小さく首を横に振ると、クリムの手から逃れるようにして立ちあがった。
「いいよ。だいじょうぶだから」
「大丈夫じゃないだろ、そんな咳して」
クリムはノアの手を捕まえた。が、ノアはその手もすぐに振りほどいた。
「畑の世話しなくちゃいけないし、休んでなんていられないの。ほんとうにだいじょうぶだから、ほっといて」
「何いってんだよ。躰の方がだいじだろ」
立ちあがり、クリムは今度は彼女の肩を掴んだ。掌にノアの肩が小さく震えているのが伝わってきた。
「わたしまだちゃんと麦実らせてないんだいもん。まだ、約束守れてないんだもん」
ノアは消え入りそうな声で呟くようにいった。
「このまんまじゃ、わたしどんどんクリムに置いてかれちゃうじゃない」
そういったノアの目から大粒の涙が落ちるのが見え、クリムは言葉を詰まらせた。
「クリムは、キャラバンの旅でどんどん大きく強くなっていって。それなのに、わたしは何に

もできなくって……」

「そんなことない！」

震える声で発せられたノアの言葉を遮り、クリムは叫んだ。驚いた顔で振り返ったノアの、涙に濡れた瞳がクリムを見つめた。

「ぼくは、強くなんてなってないよ。全然、強くなんかなってない。リッドみたいに戦うこともできないし、サムルンティみたいに魔法を使うこともできない。ハーディみたいに頭を使って、みんなの役に立つことだってできないんだ」

激しくかぶりを振り、クリムは声を荒らげた。

「村を守らなくっちゃって必死に頑張って、でもあんまり役に立てなくって。それでもね、ノア。それでも、ぼくがどうにか今までやってこれたのは、きみのおかげなんだよ」

「わたしの……？」

不思議そうに首をかしげたノアの眼前に、クリムは右手をそっと出した。

「これだよ。この腕輪がずっとぼくを元気づけてくれたんだ。くじけそうなぼくを励ましてくれたんだ。ノアのくれたお守りがあったから、ノアが側についていてくれると思えたから、ぼくは今まで頑張ってこれたんだよ」

腕輪を見つめるノアの目から、また涙が数滴こぼれた。

「ノアがいるから、ぼくは頑張れるんだ。だから、ぼくはノアを置いていったりなんてしないよ。だからさ、ノア。あんまり、無理しないで」

ノアは頬を真っ赤にしながら、頷いた。また涙がこぼれそうになったのだろう、瞳を潤ませたノアはうつむき、クリムの胸に顔を押しつけた。

「……いっしょだね、クリム」

くぐもった涙声でノアはいった。

「え？」

「自分だけが何にもできないんだって焦って。置いてけぼりにされるって思って。わたしとクリム、同じこと悩んでた」

「……そうだね」

「クリムも、無理しないでね」

「うん、わかった。いっしょに、ゆっくり強くなっていこう」

胸の中で小さく頷いたノアの背中をクリムは優しく抱きしめた。

第七章　二人の見るもの

1

「馬鹿野郎！　どういう了見で、そんなこといってんだ。てめえは！」

畑に向かって歩いていたクリムは、突然聞こえてきた怒鳴り声に足を速めた。

半分ほど刈り取られた麦畑の中には、ノアの家族とヘルナドの姿があった。そして、畑を囲む柵の外にヘルナドの父が立っていた。ヘルナドの父は肩を怒らせ鼻息を荒くして息子を睨みつけている。

クリムは距離を開けて迂回しながらヘルナドの父の後ろを通り過ぎ、麦畑の中に入った。

「ねえ、何があったの？」

クリムが小声で尋ねると、ノアは睨みあうヘルナドたちを気にするように横目で見ながら口を開いた。

「あのね、ルアージュさんのお腹の中に赤ちゃんがいるのがわかったんだって」

「へえ、そうなんだ。おめでたいことじゃない。なんで、おじさんは怒ってるの？」

「うん。そのことを報告に来たおじさんが、ルアージュさんが安心して元気な赤ちゃんを産めるように、すぐにでもファムに帰るようにヘルナドにいったの。そしたら、ヘルナドが、『わ

かった。すぐに帰るようにルアージュにいっとく』って答えたのよ」
「それって、ヘルナドは帰らないってこと？」
顔をしかめたクリムに、ノアはゆっくりと頷いてみせた。
「おじさんもそう訊いたの。そしたら、ヘルナドがあたりまえだって答えたのよ。だから」
「なるほど」
納得し、クリムはヘルナドたちの方を見やった。ヘルナドの父は額に血管を浮きあがらせていた。怒りのせいだろう、柵を掴む手も小刻みに震えている。
困ったような顔で頭を掻いていたヘルナドは、長いため息をこぼした。
「あのな、親父。ティパの村がこんな状態にあるのに放っておけるわけないだろ」
「だから、初めての出産って一大事に挑もうとしてるてめえの女房は放っておくわけか」
声を荒らげながら、ヘルナドの父はせせら笑った。
「出産なんて、俺がいなくたってできるだろ。だいたい、あいつが赤ん坊を産む時に俺が何の役に立つよ」
「へっ。この村だって、てめえなんざいなくたってどうとでもやっていけるってんだ」
父の言葉に、ヘルナドがこめかみをひくひくと痙攣させながら表情を険しくした。
「さっきから何だってんだ。自分の生まれ育った村の心配すんのがそんなに悪いことだってのかよ。うちの牛だって痩せてきてるじゃないか。それをどうにかしようって思うのどこが気に入らないってんだ」

「笑わせんじゃねえ！」

柵に握り拳を叩きつけ、ヘルナドの父はひときわ大きな声で怒鳴った。

「うちの牛だぁ。ありゃあ、俺んちの牛だよ。この村にはなあ、てめえの家はねえんだよ。てめえが今寝泊りしてるのは、ありゃ俺の家だ。俺が守り、俺の家族が住む、俺の家なんだよ。てめえらは、ただのお客さんだ。お客さんに家のこと心配してもらうほど、俺は落ちぶれちゃいねえ」

強くいい放ったヘルナドの父が言葉を切ると、静寂がその場を包んだ。ゆっくりと一度呼吸をし、ヘルナドの父は再び口を開いた。

「いいか、よく聞け。てめえは新しい家族を作った。作った以上は、それを守っていかなくちゃなんねえ。てめえの愛する家族を何よりも大事に思う。当たり前のことだろ。それに比べりゃ、それまで自分の暮らしてた場所だの思い出だのなんてのは、屁ほどの価値もねえ」

「そうだよ、ヘルナドくん」

深く頷いたノアの父が言葉を継いだ。

「この一年で充分すぎるほどいろいろ教えてもらったしね。今年はもう、僕たちだけで大丈夫さ。心配しないで帰るといい」

ヘルナドは、しばらくの間うつむいたまま何も答えなかった。皆が固唾を飲んで見つめていると、不意に顔をあげ短い吐息をこぼして笑った。

「わかった。確かに、親父のいうとおりだ。俺はルアージュといっしょにファムに帰るよ」

その言葉を聞いて、クリムは詰めていた息を吐きだした。隣でノアも同じように長い吐息をついていた。クリムとノアは互いに顔を見あわせ、笑った。

「んじゃ、次に来るのは孫の顔を拝ませてやる時だな」

「おうよ。その頃には、この村もきれいさっぱり元どおりになってるぜ」

父と向きあって笑ったヘルナドは、クリムやノアたちの方へ顔を向けると軽く会釈をして、急ぎ足で麦畑を出ていった。

「ったく、手間かけさせやがって」

嘆息とともにそういったヘルナドの父は、不意にまじめな顔をしてクリムを見た。

「クリムよ。悪いけど、キャラバンであいつらを送ってやってくんねえか。村長の方には俺が頭さげとくから」

「わかった。リッドたちに話してくる」

笑顔で頷き、クリムは駆けだした。

2

ヘルナドとルアージュを乗せたキャラバンの荷車はマール峠を登っていた。ルアージュの躰を気遣い、パパオの足取りはいつもよりもゆっくりとしている。幾分お腹の大きくなったルアージュは、柔らかな綿がいっぱい詰まったクッションを躰の下に敷き荷車に横になって

いた。

「んんっ？」

御者台に座っていたクリムは、奇妙なものを見つけ思わず声をあげた。その声に反応して、幌が開き中からリッドたちが顔を覗かせた。目をしばたたかせ、クリムはもう一度前方を凝視した。だが、目にした奇妙なものは消えなかった。どうやら見間違いではないらしい。

遥か前方に見えるマール峠の村から伸びている坂道を猛然とくだってくる人がいた。ともにセルキーだろう老人と子どもだ。それに、モーグリも一匹彼らの後を追って必死に飛んでいる。二人と一匹はそろって濃淡二色の紫の横縞の服を着て、れぞれに布袋を抱えていた。どう見てもキャラバンだとは思えない。それなのに、聖域に包まれ瘴気の中を走ってくる。いったい、どういうことなのだろうか。

クリムが唖然としながら首をひねっていると、二人と一匹はものすごい勢いで近づいてきた。

「待てよ、じーさん。もう、ここまでくれば、だいじょぶだろ。いいかげん、止まろうぜ」

「いかんぞ、バル・ダット。何が、あるか、わからんのじゃ。峠をくだりきるまでは、気を抜くんで、ないわい。ほれ、ああした、キャラバンの、ような者もおる」

息を切らせながら交わされる会話が聞こえてきたかと思うと、縞々服の一団は必死の形相で全力疾走したままクリムたちの荷車とすれ違った。老人の首にかけられたペンダントの先に小さなクリスタルの欠片が輝いているのが見えた。

あっけに取られながら眺めるクリムたちの脇を通り抜け、彼らは近づいてきた勢いのまま後

方へ遠ざかっていった。
「なんなのよ。なんなのよ、あれは」
走っていく一団の後ろ姿を睨むように見つめ、イ・リュが忌々しそうに呟いた。
「んなこと訊かれても知るかよ。まともな連中じゃないだろうってのはわかるけど」
「そんなことどうでもいいわよ」
苛立った様子で言葉を返すイ・リュに、リッドは顔をしかめた。
「じゃあ、何なんだよ」
「クリスタルよ、クリスタル。今のじいさんの胸にあったの、あれ、どう見てもクリスタルの欠片だったじゃない」
「あ、ああ、そうだったな」
「なんで、あんな奴らがそんなすごいお宝持ってるのよ。あたしだってまだ見つけてないのに」
悔しそうに激しく何度も床を叩くイ・リュを見て、クリムたちはそろってため息をこぼした。ルアージュは可笑しそうにくすくすと笑っていた。
イ・リュが何度も何度も繰り返していた「あーもう、納得いかない」という呟きがおさまってきた頃、荷車はマール峠の村に到着した。
「おい、見つかったか」
「ダメ。どこにもいないわよ」

村の入り口には、商人らしき服装のリルティが集まり息を弾ませながら険しい顔を突きあわせていた。

「何か、あったんですか」

御者台をおり、手綱を引きながらクリムは尋ねた。

「泥棒よ。泥棒。この村に泥棒が出たの」

「泥棒？」

「そうよ。まったく、年寄りと子どもだからと思って油断してたら。まったく、忌々しいあのセルキーどもめ」

「なるほど。彼らが抱えていたのは、盗品だったわけですか」

サムルンテの言葉に、リルティたちがいっせいに彼を見た。

「見たのか、あんたら。奴らがどこに行ったのか、知ってるのか」

「え、ええ。ここに来る途中に、すれ違いました。峠を南に向かってくだっていきましたよ」

「もう、村の中にはいないのか……」

サムルンテの指した先を見て、リルティたちは苦々しそうな顔をした。

「だから、なんでそんな連中がクリスタル持ってんのよ」

イ・リュは村のリルティたち以上に険しい表情で呟いた。

「南って、ティパに向かってるのかな」

ハーディが心配そうに南に伸びる道の先を見つめていった。

「その可能性は高そうですね」
「そうだね。注意するように手紙を送っておこうか」
「ああ、それがいいだろうな」
クリムの提案に皆が大きく頷いた。それを確認したクリムは、荷車の後ろで成り行きを見守るよう立っていたヘルナドに視線を移した。
「どうするヘルナド。今日はここで休む？　それとも、このままファムに急いだほうがいい？」
「ああ、そうだな。どうするルアージュ」
ヘルナドは荷車の中を覗き、尋ねた。
「べつに、そんなに急がなくてもまだだいじょうぶよ。それより、ずっと荷車に揺られてたから疲れちゃった。柔らかいベッドでゆっくり休みたいわ」
「だらしねえな。一昨年までキャラバンで世界中飛び回ってた奴の言葉とは思えないぞ」
にこやかに談笑するヘルナドたちを眺めながら、クリムは村におりる準備を始めた。

*

宿の前で、若い男性セルキーの一団と出会った。ルダの村のキャラバンだ。
「よう。おまえら、この村に泥棒が出たって話知ってるか」
クリムたちが近づくと、ルダのキャラバンのリーダーは軽く手をあげて挨拶し、気さくに話

し始めた。
「うん。入り口で聞いたよ」
「まったく、大変だったんだぜ。その泥棒ってのがセルキーのじいさんとガキだったらしくって、俺たちまで疑われてよ。とんだ濡れ衣だぜ」
「俺たちは、そんな騒ぎになるような盗み方しねえっての」
そういってけたけたと笑うルダのキャラバンに、クリムは困惑しながら苦笑いした。
リッドは、ルダのキャラバンと距離を取り身構えていた。以前のお金を掠め取られた一件以来、ルダの村の人間を強く警戒する癖がついたみたいだ。
「そうそう。濡れ衣っていやあよ。うちの村に変な奴がいついてよ。真っ黒い鎧を全身にまとったリルティなんだけどな」
「黒騎士？」
ルダのキャラバンリーダーの言葉に、強い興味を抱いた様子でハーディが身を乗りだした。
「ああ、そう。その騎士様だよ。そいつがな、もう何十日もうちの村でじっとしてんのよ。ほとんど毎日石像みたいに海岸にたたずんでさ」
「……黒騎士が？　なんで、そんなこと」
「そいつがな。ショートクリスタルつったか、何か大事なもんを盗まれたとかって。俺たちを疑って凄みやがってよ。濡れ衣だっての。いや、あん時は怖かった。本気で斬られるんじゃないかって勢いで。その犯人も、たぶんじじいなんだよ。あの黒い騎士が俺たちに詰め寄ってく

るちょっと前に、逃げるみてえにガキとモーグリ連れて村出てったの見たし」
「まったく、あのじじいは疫病神ってやつだな。ろくなもんじゃねえ」
「ほんとほんと、俺たちってば不幸だよな」
そういうとルダのキャラバンはそろってまたけらけらと笑いだした。
ハーディは何か考えこむ様子であごに手をあてうつむいてしまった。
「なんだ、盗んだのか。せっこい奴ら」
イ・リュは鼻で笑うように小さく呟いた。
「なあ、おまえら。ちょっと頼んでもいいかな」
馬鹿笑いをしているルダのキャラバンに近寄りながらヘルナドが声をかけた。ルダのキャラバンが、そろって笑いを止め怪訝な顔をヘルナドに向ける。
「悪いんだけど、俺と彼女をファムまで連れてってもらいたいんだ。それなりの礼はさせてもらうから」
「ん？　まあ、べつにかまわないけどよ」
ルダのキャラバンリーダーは値踏みするようにヘルナドとルアージュを眺めながら答えた。
「ちょっと、待てよ。ヘルナド、何いってんだ。ちゃんとオレたちがファムまで送ってってやるって」
「そうだよ。そのために出発も早めたんだし」
驚き声をあげたクリムたちをヘルナドが振り返った。真剣な眼差しがクリムたちを見つめ

る。

「いや、おまえらはミルラの雫を急いで集めろ。俺たちのことなんか、かまってなくていい」

「べつにキャラバンの役目はきっちりやるさ。そんな心配しなくていいって」

「そうじゃない。少しでも早くミルラの雫を村に持ち帰ってほしいんだ」

「……なんで？」

真剣なヘルナドの表情に、クリムも口元を引き締めた。

「村を襲ってる異変のことを俺なりに考えてみたんだよ。それでな、クリスタルの力が弱まったせいなんじゃないかって結論に達した。だから、クリスタルの力を取り戻すためにも、いつもよりも早い時期に清めてほしいんだ」

ヘルナドの言葉に、クリムたちは互いに顔を見あった。

「……確かに、今の村の状況からするとその可能性は充分にありますね」

「だとしたら、のんびりしてらんねえんじゃねえか」

「……うん」

強く頷きあいクリムたちは、再びヘルナドに視線を戻した。と、ハーディが首をかしげた。

「でも、何で今まで黙ってたの。もっと早くいってくれればよかったじゃない」

「村ではさすがに話せないだろ。下手に噂にでもなってみろ、村の連中を必要以上に不安にさせるだけだからな。それに、これまでは……」

言葉を切り、ヘルナドは背後のルアージュに目をやり肩をすくめた。

「俺たちがいたせいで、急げなかっただろ。おまえらを焦らせちゃいけないと思うと、どうにも話せなくてな。でも、これからは違う。俺たちみたいな重荷はなくなるんだ。おまえらの思うとおりに行動できる。だから」

そういって、ヘルナドはクリムたちの肩に手を置いた。

「頼んだぜ。絶対にティパの村を守ってくれ」

掴まれた肩が痛く感じるほどの力が彼の手にはこもっていた。

3

ヘルナドの言葉に従い、クリムたちはミルラの雫を求め旅を急いだ。

ヘルナドたちを見送ってすぐにマール峠を出発し、カトゥリゲス鉱山、キランダ火山と順調に雫を手に入れた。普段のキャラバンの日程からすれば、まだ半年以上も旅の期間は残っている。

「あと一箇所か。次は、どこへ向かう？」

キランダ火山を船着場へとくだる途中で、リッドが皆にそう尋ねた。

「そうですね。このまま船でジェゴン川に戻って、一番近いのは……セレパティオン洞窟かデーモンズ・コートでしょうか」

「ライナリー砂漠はどうかな」

ハーディが提案した。クリムたちが振り返ると、ハーディは得意げににっこりと笑った。
「このまま大陸に戻らないで船でライナリー島に向かってもらった方が早いと思うよ」
「うん、そうだね。それが一番早そうだ」
「ええ。確かに、ここからならライナリー島の方が近そうですし」
クリムとサムルンティとイ・リュは、すぐさまハーディの意見に賛同した。だが、リッドだけは難しい顔で腕を組んでいた。
「どうしたの、リッド。何か、問題でもある？」
「いや、問題なんてねえよ。距離から考えたって、それが一番の選択だとオレも思う。ただ、ライナリー砂漠に行くには、ルダの村通らなきゃいけないだろ。それがな」
苦笑を浮かべながらリッドがいうと、イ・リュが呆れた様子で肩をすくめた。
「そんなの、あんたがちょっと注意してればいいだけのことじゃない」
「苦手なんだよ、そういうの。いちいち人を疑って目を光らせてって。想像しただけで息が詰まってきそうだ」
ため息混じりにそういったリッドは、何か思いついたらしく突然大きく目を見開いた。
「そうだ、イ・リュ。おまえが財布預かっててくれよ。おまえだったら、盗られないだろ」
「やーよ。なんであたしが他人のお金まで守んなきゃいけないのよ」
「あ、いや、駄目だ。そんなことしたら、イ・リュに盗られちまう」
かぶりを振りリッドが呟くと、イ・リュは顔を真っ赤にして目を吊りあげた。

「盗らないわよ！　バカにして」
二人のやり取りを眺めながら、クリムはまったく別のことを考えていた。リッドの口からルダの村の名前を聞いた時、脳裡にマール峠でルダのキャラバンから聞いた話が甦ったせいだ。今、ルダの村には黒騎士がいる。
――だからハーディは、ライナリー砂漠に行こうっていったんじゃ……。
思いながらクリムはハーディを見た。
リッドとイ・リュの会話を苦笑しながら眺めていたハーディは、視線に気づいたらしくクリムの方へ顔を向けた。
「ん？　どうかした？」
「あのさ、ハーディ。どうして、ライナリー砂漠に行こうって思ったの？」
不思議そうに首をかしげるハーディにクリムは尋ねた。
「なんでって、こっから近いと思ったからだよ。さっき、いったじゃない」
「本当に、それだけなんだね」
さらに問い返すと、ハーディは一瞬表情を翳らせた。が、すぐにまた笑顔に戻って大きく頷いた。
「……そうだよ、あたりまえじゃない」
「そう……」
言葉を返しながらクリムはじっとハーディを見つめた。ハーディがわずかに視線をそらせた

のを目にして、クリムは胸の奥にもやもやとしたものを感じた。

*

ルダの村の船着場におり立つと、ハーディは桟橋の上から村の中に視線を巡らせていた。

「おい、何してんだよ」

ハーディの腕を掴みリッドが小さな声で鋭くいった。ハーディは弾かれたように、驚き顔で振り返った。

「こんなところでぼーっとしてたら、また財布の中身取られちまうぞ。ほら、さっさと村を出るんだから、来いよ」

「あ、うん……」

あいまいに頷きながらハーディはまた村の中を見回していた。と、彷徨っていた視線がぴたりと止まった。それと同時に、ハーディの顔に小さな笑みが浮かぶ。

じっとハーディを眺めていたクリムは、ハーディの見つめる先へと視線を移した。そこには予想どおり黒騎士の姿があった。黒騎士は海を見おろす断崖にかがみこみ身じろぎひとつせずに海原を見つめていた。

「ハーディが、どうかしたわけ？」

不意に背後から声をかけられ、クリムの心臓は激しく跳ねた。たじろぎながら振り返ると、

怪訝な顔のイ・リュと目があった。
「な、何が？」
「何がって、あんた今ずっとハーディ睨んでたでしょ。それも、なんかびっみょーに怖い顔してたわよ。ケンカでもしたわけ？」
「ケンカなんてしてないよ。別にハーディを睨んでもいないし。村の人たちが寄ってこないように警戒してただけ」
「そ？　そのわりには隙だらけだったみたいだけど」
「そうかな……」
苦笑を浮かべ髪を掻きながら、クリムはわずかに視線をそらした。
「ま、何だっていいけどね。それより急ぐんでしょ」
「うん」
クリムが頷くと、イ・リュは小さく吐息をこぼし未だ断崖の上を見つめているハーディに向きなおった。
「ほら、ハーディ。あんたも、いつまでもそんなとこでグズグズしてないで行くわよ」
「え？　あ、僕は……」
「ああ、もう。いいから、行くわよ。ほら、さっさと歩きなさい」
そういいながらイ・リュはハーディに大股で近づき、彼の腕を掴んで歩きだした。
その姿に笑いをもらしながら、クリムも後を追った。

4

砂煙を巻きあげ地中から大きな蠍が飛びだして来た。立てつづけに四匹。

クリムの目の前に現れた蠍が、毒針を持つ二本の尾を連続的に突きだした。蠍の尾を盾で受け、クリムは剣を抜き放つ。

視界の隅で雷撃が数度またたいた。サムルンティのサンダーが蠍一匹を貫いたのだ。

「イ・リュ。ケアルの魔石です」

サムルンティの声を後方に聞きながら、クリムは休むことなく突きだされる蠍の尾を盾で受けていた。剣を握る手を引き絞る。強い打撃の連続にクリムの膝は徐々に沈んでいく。堪えきれず、クリムは地を這う魔物に向け剣を突きだした。固い背の殻に刃は受け止められた。だが刺突の強さに蠍の細い肢が崩れた。尻尾の動きが止まる。

――今だ！

クリムは大きく足を踏みだし剣を振りかぶった。クリムの靴底が蠍の背を踏みつける。気合と共に斜めに薙いだ剣は、蠍の尾を見事斬り払った。剣を返し、さらにもう一方の尾を斬った。分断された二本の尾が砂の上に毒液を撒き散らしながらのたうつ。

剣を逆手に握りなおし、クリムは叫びと共に蠍の背へと突きおろす。背中を貫かれた魔物は一瞬全身を硬直させ震えたかと思うと、動かなくなった。だらしなく砂の上に投げださ

れた蠍のはさみからブリザドの魔石がこぼれ落ちた。

「サムルンティ、ブリザドを」

そういって魔石を拾い顔をあげたクリムの視界に、真正面から蠍の頭を槍で貫いたリッドの姿が映った。槍を引き抜きながら身を翻し、リッドは残りの一匹の蠍へ向かっていく。と、そのリッドがわずかにふらつき足をもつれさせた。彼の肩口に大きな切り傷があるのが見えた。傷口の周りが黒っぽく変色している。蠍の毒にやられたのだ。

さらによろめき槍を支えにどうにか踏みとどまったリッドに、蠍が迫る。

「リッド！」

クリムは駆けだし、リッドと魔物の間に躰を割りこませた。

振りおろされた鋏を剣で受ける。不完全な体勢で激しい衝撃を受け膝が崩れた。

尻尾の先の毒針と鋏がクリムに狙いを定める。

盾をかざし、蠍の攻撃をクリムはどうにか受け止めた。が、矢継ぎ早に襲いくる尾とはさみに反撃どころか立ちあがる隙もない。躰を小さくしながら、盾で受けるのが精一杯だ。

「クリム！　ブリザドの魔石を！」

サムルンティの叫びが耳に届いた。手に握ったままだった魔石に気づいたクリムは、反射的に声のした方へと放り投げていた。

視界の隅に、放物線を描き飛んでいった魔石を跳びあがり掴み取ったサムルンティの姿が見えた。サムルンティは着地と同時に魔法を放った。

クリムの目の前で冷たい風が渦を巻き、弾けた。次の瞬間には、雨のように降り注いでいた攻撃がぴたりとやんだ。蠍は全身を厚い氷に包まれ凍りついていた。

安堵の息を吐きだし立ちあがったクリムが思い切り蹴り飛ばすと、魔物は粉々に砕け散った。

「すまない、助かった」

槍を支えにうずくまったリッドが搾りだすような声でいった。やはり、毒に冒され立っているのがやっとといった感じだった。

「イ・リュ、治療を頼むよ」

「はいはい。わかってるわよ」

クリムの声に答えリッドに向かって魔石を突きだしたイ・リュを、巨大な影が被った。巨鳥が彼女の頭上に迫っていた。

「イ・リュ、危ない！　逃げて！」

叫び駆けだそうとしたクリムの脇から人影が飛びだした。リッドだ。

猛然と走ったリッドは倒れこむようにイ・リュの躰を突き飛ばした。と同時に、大きく翼を広げた巨鳥が降下する。

突き飛ばされ倒れこんだイ・リュは躰を起こし、砂の上に投げだされた槍を目にして引きつけのような短い悲鳴をもらした。さらに視線をあげ、鋭い爪を持つ巨鳥の足に捕らわれたリッドの姿を見て、絶叫に似た悲鳴をあげた。

一瞬茫然とし立ち尽くしていたクリムは、剣を握りなおし地を蹴った。

目にいっぱいの涙を浮かべ叫んでいたイ・リュは、突如立ちあがると目の前に転がる槍を手に取り巨鳥に斬りかかった。

「離しなさいよ、この化け物！」

泣き叫ぶような声をあげながら、イ・リュが槍を滅茶苦茶に振り回している。槍先は何度も巨鳥の躰を叩いた。が、力が足らず傷を負わせるには至っていない。それでも、堪らなくなったのだろう。大きな鳴き声をあげると、巨鳥はリッドを落とし、身をよじるように旋回しながら上昇した。

リッドの躰が砂の上に落ちるのにあわせるかのように、イ・リュもへなへなとその場に崩れ落ちた。

上空で弧を描き、巨鳥が再びリッドたちめがけ降下してくる。

クリムは巨鳥の前に踊りでて剣を構えた。

「イ・リュ！　リッドを連れて離れて！　治療を頼む！」

鋭い嘴を突きだし降下してくる巨鳥を睨み据え、クリムは叫んだ。

「あ、あ、うん。わかった」

呆けたような声で答え、イ・リュがリッドを引きずるようにして運んでいく。

巨鳥の顔がサムルンティの放った炎に包まれた。甲高い声で鳴き巨鳥が身をよじる。クリムは大きく剣を振りかぶり、体勢を崩しながら迫る巨鳥の躰めがけ斬りかかった。刃が巨鳥の胸に突き刺さる。瞬間、巨鳥の重みと突進の衝撃が剣を伝わりクリムの両腕に圧しかかっ

た。

「くっ、うっ、うおおおおおっ」

クリムは持っていかれそうになる剣を抑えこみ、両手に力をこめた。巨鳥の躰を刃が斬り裂く。

胸を裂かれクリムの頭上を通り過ぎた巨鳥は、そのまま斜めに落下した。半ば埋まるように砂の上に横たわった巨鳥の下に大きな血溜りが拡がっていく。わずかに翼を震わせたのを最期に、巨鳥は動かなくなった。

詰めていた息を吐きだし、クリムは周囲に視線を転じた。もう辺りに魔物の姿はなかった。その代わり、イ・リュがリッドを膝枕し、治療をしている姿が目に入った。

「すまない。だいぶ楽になった」

「そう、よかった」

リッドの言葉に、イ・リュは震えた声で答えた。

「でもよ、何であんな無茶したんだ。らしくもない」

「何よ、あたしが仲間助けちゃいけないの」

「セルキーってのは、何よりも自分を大事にするもんだろ。自分を危険にさらしてまで、仲間助けたりなんてしないもんだろ。なのに、何でこんなことしたんだよ。オレの事なんか、クリムとかサムルンティに任せときゃよかったんだ。おまえは、今までみたいに離れた場所からケアルでも使ってれば、それだけでよかったんだよ。それなのに……」

彼の言葉にイ・リュは頬を大きく膨らませた。それを目にしたリッドは、うろたえた様子で口をつぐんだ。

「……そうよ。そういうもんよ。自分の身を危険にさらして他人を助けるなんて、そんなバカバカしいことするなんてどうかしてるわよ。そう思うわよ。何であんなことしたかなんて、あたしだってよくわんないわよ。でも、しょうがないじゃない。助けなきゃって思ったんだから。そう思ったら、躰が勝手に動いてたんだから。あんな怖い思いしても、どうしても助けなきゃって思っちゃったんだから」

いいながら、イ・リュはぼろぼろと涙をこぼした。彼女の頬を流れた涙の雫は、すべてリッドの顔に落ちた。

「……悪い。助かったよ。ありがとう」

呟くようにそういうと、リッドは照れくさそうに鼻を掻いた。

5

ライナリー砂漠のミルラの樹からミルラの雫を手に入れクリスタルケージをいっぱいにしたクリムたちは、ルダの村まで戻ってきた。

「ちょっとゴメン。先に行ってて」

船着場へ向かう坂をくだっていた時、ハーディは突然そういってきびすを返して走りだした。

「おい、どこ行くんだよ」
リッドの声に振り返りもせず、ハーディは村の奥へ伸びる坂道を駆けていく。
「ぼく、見てくる」
ハーディの背中を見つめていたクリムは、堪えきれず彼を追って走りだした。
「あっ、おい。クリム」
「すぐに戻るよ」
戸惑った様子のリッドに答え、クリムは足を速める。
村の中央の道が交差する広場に出たハーディは、迷う様子もなく村はずれの崖へ向かう道を登っていった。
「待って、ハーディ」
追いついたクリムが呼び止めると、ハーディは少し驚いた様子で振り返った。
「何、クリム。どうしたの？」
「黒騎士に、会いにいくんでしょ」
ハーディの言葉を遮るようにクリムは尋ねた。一瞬狼狽したような顔をしたハーディは、しかしすぐに笑みを浮かべて頷いた。
「うん、そうだよ」
「何で」
「話が聞きたいんだ。あの人が何をしようとしてるのか確かめたいんだ」

ハーディの返答を聞いたクリムは、激しくかぶりを振った。
「そんなことはわかってる。ぼくが聞きたいのは、どうして今それをしなきゃいけないのかっていうことだよ。そんなの、ただのハーディの好奇心だろ。わかってる？　今は、村が大変な時なんだ。急いでミルラの雫を持ち帰らなきゃいけないんだよ」
クリムが訴えると、ハーディは少し寂しそうに表情を曇らせた。
「わかってるよ。それでも、僕は黒騎士に話を聞きたいんだ。いや、聞かなくちゃいけないと思ってる。あの人がしようとしていることは、それだけ大事なことなんだって気がするんだ」
「わかんないよ。何でそんな風に思うのさ」
「何となく、かな」
ハーディは苦笑しながら答えた。
「ただの僕の思い違いかもしれないしね。それを確認するためにも、まずは話を聞いてみなくっちゃならない。でしょ？」
そういって微笑んだハーディを見つめ、クリムはしばし黙考した。
――きっと、またいろいろ考えてるんだろうな。ぼくなんかにはわかんないようなことを……。
ハーディは笑顔を崩さずに、クリムを見つめつづけている。
クリムは小さな吐息をこぼし、頷いた。
「……わかったよ。でも、そんな話がすぐに終わるの？　そんなに時間はないよ。すぐにでも

出発しなきゃ。みんなだって待ってる」
「大丈夫、僕に考えがあるんだ」
首をかしげたクリムに笑いかけ、ハーディは崖に向かって歩きだした。
彼を追って崖の上に出たクリムは、そこに黒騎士の姿を見つけた。黒騎士は、前に船着場から見た時と同じように座り海を眺めていた。まるで、あの時から少しも動いていないように感じられた。
「すみません」
ハーディが黒騎士の背中に声をかけた。だが、黒騎士は振り返るどころかぴくりとも動かなかった。
「僕の話を聞いて欲しいんですけど」
「悪いが、俺は見ず知らずの者の話をきく耳は持ちあわせていない」
黒騎士は背を向けたまま吐き捨てるようにそう返した。
「見ず知らずじゃありません。前に、コナル・クルハ湿原で会ってます。それに、たぶんその前にも何度か」
ハーディがそういうと、黒騎士は首をひねりクリムたちを見た。仮面に隠れて表情はわからないが、睨みつけるような雰囲気があった。
「……ティパのキャラバンの者か。確かに、コナル・クルハで見かけた記憶はあるな。それ以前というのは、知らんが」

「じゃあ、そういうことでもいいです。とにかく、僕の話を聞いてください」
真剣な表情でそういったハーディは、何も答えない黒騎士をまっすぐに見つめていた。
長い沈黙の末、黒騎士が躰をクリムたちの方へと向けた。
「まあ、いいだろう。聞いてやる」
黒騎士の言葉に、クリムは安堵の息をもらした。
「じゃあ、単刀直入にいわせてもらいますね」
そういうと、ハーディはにっこりと微笑んだ。
「僕たちと一緒に行きませんか」
「ええっ？」
黒騎士が何らかの反応を示すより先に、クリムは声をあげてしまった。
「何いってんの。ハーディは、この人の話が聞きたかったんだろ。それを何で」
「いったじゃない、考えがあるって」
クリムは戸惑いながら黒騎士をちらりと見た。クリムに同意を示すように、黒騎士は深く頷いた。
「何を考えているのか知らんが、そんな提案を俺が受けると思っているのか」
「ええ」
ハーディは、自信ありげに笑って答えた。
「あなたは、僕たちと行くべきです。少なくとも、今のあなたはそういう立場にある」

「ほう。それは、ずいぶんと大きな物いいだな」
「話に聞いて知っています。あなたがセルキーの老人にクリスタルの欠片を盗まれて、瘴気の中を旅する術を失ってやむなくこの村に滞在しているんだって。僕たちは、マール峠の近くでその老人たちを見かけました。瘴気の中を自由に動き回れるようになったのに、彼らがこの村に帰ってくる可能性は少ないんじゃないかって、僕は思いますよ」
「なるほど、確かにそのとおりかも知れん。だが、それがどうした。俺は、ここで奴らの帰りを待っているわけではない。自らの成すべきことのためにここにいるのだぞ」
「それは、そうなのでしょう。それでも、あなたは旅をつづけるつもりでいる。いつかはここを離れ、世界中を旅する必要があると思っているはずだ。そのためには、あのクリスタルの欠片が再び必要になる。違いますか」
問いかけるハーディを黒騎士は黙って見返していた。
「だから、僕たちといっしょに行くべきなんです。クリスタルを取り戻すためにもあの老人たちと遭遇する機会を少しでも作らなくちゃ。そうしなければ、あなたは一生この村で悔いながら生きていくことになる。どうです？　マール峠辺りまでといいんです、僕たちといっしょに行きませんか？」
「……何を求めている。何故、そのような提案をする」
わずかに身を乗りだした黒騎士は、睨みつけるような姿勢でハーディに問いかけた。
「別に、何かを貰おうとかってわけじゃないですよ。ただ、船の中で話し相手になってもらい

たいと思っているだけです」
ハーディが答えると、黒騎士の仮面から小さな笑い声がこぼれた。
「いいだろう。きさまの口車に乗ってやろうじゃないか」

＊

船着き場に行くと、リッドが不満そうな顔でクリムたちを睨みつけた。
「おまえら、いったいどこに行ってたんだ。オレたちが今どういう状況にあるのかわかってんのかよ」
責めたてるような早口でそういったリッドは、クリムの傍らに立つ黒騎士の姿を見つけ大きく目を見張った。
「黒騎士？　な、なんで？　どういうことだ？　おまえら……」
目を白黒させクリムたちと黒騎士を交互に見ていたリッドに、ハーディが笑顔を返した。
「うん。僕が誘ったんだ。一緒に大陸に戻ろうって。ルダのキャラバンに話を聞いたときから気になってたんだ。リッドだって、この村にずっと一人で取り残されたら、嫌でしょ」
「そりゃ……嫌だな」
ルダの村に一人残ることを想像したのだろう、リッドは答えながら顔をしかめ小さく背中を震わせた。

「だから、せめて大陸まで帰る手伝いができないかって思ったんだ。いいでしょ、リッド。しばらく彼が一緒でも」
「ああ。まあ、別にかまわないけどな」
答えながら、リッドは意見を求めるようにサムルンティとイ・リュを見やった。
「問題ありません。むしろ、ハーディの気遣いは正しいと思いますよ」
「いいんじゃないの。何か、辛気臭い感じだけど害はなさそうだし」
そういって、イ・リュは黒騎士を見て馬鹿にするような薄笑いを浮かべた。しかし、黒騎士はそんな彼女の態度に何の反応も示さず、軽く頭をさげただけだった。
「マール峠辺りで放りだしてくれればかまわない。それまでしばらく世話になる」
淡々とそういうと、黒騎士は足早に船に乗りこんでしまった。
「……愛想もないわけ」
黒騎士の後ろ姿を見て、イ・リュは肩をすくめて首を横に振った。

6

岸を離れるとすぐに、船尾の辺りに集まっていたクリムたちのところに黒騎士がやってきた。
「それで、俺に聞きたいこととはなんだ」
ぶっきらぼうにそういうと、黒騎士はハーディの正面にどっかりと腰をおろした。

「……どういうこと？」

イ・リュが訝しげにハーディを見た。

「うん。船に乗っている間の話し相手になって欲しいって頼んだんだよ」

「こんな重っ苦しい話しかできなさそうな奴に？」

驚いたのか呆れたのか、イ・リュは眼を見開いて黒騎士を指さした。ハーディは苦笑しながら頷いた。

「あんたって本当に変わってるわね。べつにあんたの趣味だし、かまわないけどさ。あたしは、パスよ。こんなのの話し聞いたら、絶対夜うなされるわ」

そういってイ・リュは、船首の方へと去っていった。

苦笑いのままイ・リュを見送ったハーディは、黒騎士の正面に腰をおろした。クリムは、ハーディの隣に座った。リッドとサムルンティも話につきあうつもりらしく、その場に腰をおろした。

「それで、何を聞きたいのだ。まさか、時間つぶしの四方山話がしたいわけでもあるまい」

黒騎士はハーディだけを見据え、挑みかかるような口調でいった。

「そんなに凄まないでください。僕はただ、あなたの旅の目的が知りたいだけなんだから」

わずかに身じろぎながらハーディは答えた。黒騎士は訝るような様子で乗りだしていた身を引いた。リッドとサムルンティも怪訝な様子でハーディを見ていた。

「旅の、目的だと？」

「ええ。どうして、あなたが一人で旅をしているのか。その理由を教えて欲しいんです」
真剣な顔でハーディがそういうと、黒騎士は鼻で笑った。
「わざわざ俺を連れだしてまで訊きたかったのは、そんなことか」
ハーディは黒騎士を見つめ大きく頷いた。しばらくの間黙ったままハーディを見返していた黒騎士は、おもむろに答えた。
「強さだ。俺は、強さを求めて旅をしている」
その言葉に、リッドが驚きの声をあげた。
「だから、あんな化け物みたいに強いのか。でも、どうやったらあんだけ強くなれるんだよ。あんたの強さは、今まで見てきた誰と比べたって桁違いだ」
リッドが問いかけると、黒騎士は自嘲的に肩をすくめて小さな吐息をこぼした。
「ひたすらに強さだけを追い求め、戦いの中に身を置いただけのことだ。そうすれば、誰にでも得られる強さでしかない。この力では、まだ俺の求めるものには遠く及ばない」
黒騎士の言葉に、リッドは理解できないといわんばかりの表情でかぶりを振った。
「その強さは、何のためのものなんですか？」
黒騎士の告白を待っていたかのように、ハーディが鋭い口調で尋ねた。黒騎士は睨むようにハーディに顔を向けた。
「あなたは手に入れた強さで、何をしようとしているんです」
まっすぐに自分を見据える黒騎士に臆した様子もなく、ハーディはさらに問いかけた。

きっとこれこそが、ハーディの訊きたかったことなのだろう。クリムはハーディの横顔を見てそう思った。

「魔物の殲滅だ。すべての魔物を滅ぼすことこそが俺の目的だ」

低く鋭く黒騎士はいい放った。彼の雰囲気に、クリムは唾を飲んだ。

「それはいくらなんでも無茶でしょう。すべての魔物をだなんて」

サムルンティがわずかに上擦った声で返した。

「確かに、無茶だ無謀だと感じるだろうな。だが、できないことではないはずだ。そりゃキャラバンが旅の途中で立ち寄り戦う程度では無理だろうが、俺のように戦うことだけを目的にしている者ならば、なしえないことではあるまい」

そういった黒騎士に睨まれ、サムルンティは身じろぎながら頷いた。

「でも、何のためにそんなことを……」

息苦しさを感じながらクリムは問いかけた。

「何のため？　本気で言っているのか？　だったら逆に教えてもらおう、魔物がいることに何の意味がある。奴らのために人々の命は脅かされるのだぞ。キャラバンの旅が危険なものとなっているのも、魔物がいるからだろう。奴らが存在しなくなれば、キャラバンは何の障害もなくミルラの雫を得ることができるのだぞ」

黒騎士の勢いに圧され、クリムは思わず身を引いた。背中が船の縁にぶつかる。

確かにそのとおりかもしれない。魔物がいなくなれば、ミルラの樹へ向かう道で戦いを強い

られることはなくなる。今よりもっと安全にミルラの雫を村に持ち帰ることができるようになるだろう。ティダの村のような悲劇も、もう起こらなくなるに違いない。

だが、それを成し遂げるのはやはり尋常なことではないだろう。襲い来る無数の魔物を相手に戦いつづけなければならないのだ。その様を思い浮かべ、クリムは目の前にある黒騎士の姿に恐怖を感じた。

「でも、それは成功してないでしょ」

重苦しい沈黙を破って、ハーディが静かにいった。黒騎士が弾かれたように彼を見た。

「どこか一箇所でもミルラの樹の周囲から魔物がいなくなったら、キャラバンの間で噂になると思いますからね。それを聞いたことがないのは、魔物の殲滅には一度も成功していないっていうことでしょ」

「確かに……そのとおりだ」

呟くように答えた黒騎士から小さな歯軋りの音が聞こえた。

「俺は確かに殲滅した。デーモンズ・コートの魔物もコナル・クルハの魔物も、すべて駆逐したのだ。だというのに、数日もしないうちに一帯には再び魔物があふれている」

黒騎士は激しくかぶりを振り、仮面を手で被った。

「それは、魔物の巣のようなものが近くにあるということでしょうか。そこで、魔物が繁殖しているために絶滅しないと」

「それくらいのことは考えた。だが、いくら探そうとそんなものは見つからなかった。痕跡さ

えも発見できなかった。どこでどうやって魔物どもが繁殖しているのか、見当さえつかない」
「そこが一番大事だと思いますよ」
深く頷きながらハーディが言葉を挟んだ。
「……どういうことだ」
「闇雲に戦いつづけても、きっと今の繰り返しになるでしょう。だから、もっと魔物のことを知るべきだと僕は思います。どうやって生まれてくるのかとか、そういうことを知らないといつまでも変わらないと思います」
「確かにそのとおりかも知れないな。だが、どうやってそれを知る？」
「それは……」
黒騎士の問いに、ハーディは腕を組み考えこむ様子を見せた。クリムはハーディの答えを待ち、彼の顔を見つめた。
「いや、やめよう」
そういって、突然黒騎士が立ちあがった。
「え？」
クリムたちはあっけに取られ、いっせいに彼を見た。
「おまえたちはキャラバンだ。俺とは進むべき道が違う。これ以上俺にかかわるべきではない。今の話など忘れて、おまえたちはミルラの雫を自分の故郷に持ち帰ることだけを考えてくれ」
そういうと、黒騎士はクリムたちに背を向け船室に向かう階段をおりていった。

黒騎士が去ってもクリムたちはしばらくの間、その場を動けずにいた。皆、一言も発さずにその場に座りつづけていた。

ひたすらに何事かを考えつづけている様子のハーディの横顔を見て、クリムは顔をしかめた。

*

船はティパ半島を通過し、ジェゴン川の河口にやってきた。

岬の上にわずかに覗く風車小屋を見つめ村のことを思っていたクリムは、傍らで聞こえた渡し守の低い唸り声に振り返った。

「どうかしたんですか？」

そう尋ねると、渡し守は難しい顔で首をかしげたままクリムを見た。

「いや、この辺りの空気が年々悪くなってる気がしてな。何事かと思ってよ」

「どういうこと？」

どこで聞いていたのか、叫ぶようにそう尋ねながらハーディが駆け寄ってきた。

「空気が肌を刺すような感じがするんだよ。それに、空もやけにかすんで見えるしな」

渡し守が指をさしたのにあわせ、クリムは空を見あげた。確かに、空は白く濁りぼやけていた。流れる雲の形もはっきりと目に映らない。

「あんたたち、何してんのよ」

そろって不安顔で空を見あげているクリムたちが奇妙だったのだろう、イ・リュやリッド、サムルンティも集まってきた。

「うん、トリスタンさんが空気が悪くなってるっていうから」

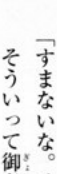
「これって、瘴気が濃くなってるってことかな」

リッドたちに説明していたクリムの言葉を遮るようにハーディが呟いた。その一言に、クリムは息を詰め彼を振り返った。リッドたちも同じように、驚きの顔をハーディに向けた。

「俺も、そんな気がしてな。しばらく、この辺から離れたほうがいいかと思ってよ……」

何気ない調子でそういった渡し守は、クリムたちの顔を見て言葉を途切れさせた。

クリムたちは皆険しい表情を作り、互いに顔を見あわせた。



第八章 暗闇の魔物

1

ジェゴン川のほとりで船をおりたクリムたちは、パパオを飛ばしティパの村へ急いだ。手綱を握るクリムの胸の中には、焦燥感が激しく渦巻いていた。

「着いたよ、黒騎士」

マール峠の村のはずれでパパオを止め、せかすように呼びかける。

間もなく幌が開き、中から黒騎士が姿を現した。

「すまないな。助かった」

そういって御者台をまたいで荷車をおりた黒騎士は、数歩いって振り返った。

「キャラバンの旅の無事を祈っている。頑張ってくれ」

「あ、うん、ありがとう。……黒騎士も」

言葉を胸につかえさせながら、クリムは答えた。黒騎士は小さく頷くと、荷車に背を向け歩きだした。

「それじゃ、このままティパに向かうよ。いいね、みんな」

去っていく黒騎士を見送りもせず、クリムは荷車の中に声をかけた。

「ああ、頼む。急いでくれ」
「待って！」
リッドの声を掻き消すようにハーディの叫びが聞こえた。それにつづいて騒然とした空気が幌の向こうから伝わってきた。
驚いて振り返ったクリムは、荷車の後方から転げ落ちるように飛びだしてきたハーディの姿を見た。彼は、何故か腕にクリスタルケージを抱えている。
「黒騎士も待って！」
地面に倒れたままハーディはさらに叫んだ。その声に黒騎士が足を止め、クリムたちの荷車を見た。
「何やってんだよ、ハーディ！　いきなりどうしたってんだ！」
荷車の中から責めるようなリッドの声が響いた。
クリムは御者台をおり、ハーディに駆け寄った。が、顔をあげたハーディの鋭い眼差しに射抜かれ足を止めた。
「村に戻る前に、行って欲しい場所があるんだ」
ケージを抱えて立ちあがったハーディは、真剣な顔でいった。
「あんた、今がどういう時かわかってんの？　急いで村に雫持ち帰んなきゃいけないのよ」
「わがままいえる時かどうかくらい、おまえだってわかるだろ。ほら、さっさと乗れよ」
ハーディは隠すようにケージを抱えこみ、首を左右に振った。

「いいかげんにしろよ、ハーディ」
「僕だって状況は充分理解してるよ。わかってて、それでもいってるんだ」
「わかったよ。そんなに行きたいとこがあんなら、一人で行って来いよ。止めねえから。だから、ケージを返せよ」
激しく放たれた言葉の勢いに臆する様子もなく、ハーディはまっすぐにリッドを見返していた。
「ハーディ！」
怒鳴り声と共に、リッドが荷車の外に飛びだそうとした。
「待ってください、リッド。ハーディだって、何の理由もなくあそこまで頑なな行動には出ないでしょう。こうして私たちを足止めまでして出した要求です。まずは理由を訊いてみるべきだと思います」
リッドを抑え、サムルンティが静かにいい放った。腕を掴まれたリッドは、荒々しく舌を鳴らし腰をおろした。
「理由を話してくれますね、ハーディ」
穏やかなサムルンティの言葉に促され、ハーディは頷いた。
「本当に村を救う方法を探した方がいいと思ったんだ」
「……どういうこと？」
クリムは一歩足を踏みだし尋ねた。

「確かに瘴気が濃くなってるのかもしれないし、クリスタルの力が弱まってるのかもしれない。少しでも早くミルラの雫を持ち帰った方がいいのかもしれない。でも、それじゃ今の状況を変えることはできないんじゃないかな。僕、ずっと考えてたんだ。ミルラの雫で清められたクリスタルは、確かに一時的に力を回復する。でもそれは、いつもの年と同じことでしょ。この異常な状況を打破することはできないと思うんだよ。黒騎士が闇雲に魔物と戦っているのと同じなんだ。根本的な解決にはならない」

「それでも、少しでもよくなる可能性があるなら早くミルラの雫を持ちかえるべきじゃないか。それしか、今のぼくたちが村のためにできることはないんだから。そんな理屈をこねたって、それこそ何の解決にもならないだろ」

クリムが絶叫するようにいい返すと、ハーディはわずかに表情を曇らせた。

「確かにそうだね。今の僕たちには、それしかできることがない。それは、僕たちが知らなすぎるからなんだ。瘴気のことも。クリスタルのことも。だからまず、知るところからはじめなくちゃいけない。黒騎士が、魔物の殲滅のために魔物のことを知らなくちゃいけないのと同じように」

ハーディはそういい放つと皆を睨んだ。クリムはハーディを見返し考えこんだ。皆も同じように逡巡しているのだろう、長い沈黙があった。

「……それで、どうしようというのです」

沈黙を破り、サムルンティが口を開いた。

「瘴気やクリスタルのことなど、魔物のこと以上に知ることが困難だと思いますが」
「そうだよ。だから、その知識が得られるだろう場所に行きたいんだ」
「どこだよ、その場所ってのは」
リッドの言葉に、ハーディは得意げな笑みを浮かべた。
「ジャック・モキートの館だよ。あそこにあった本、憶えてるでしょ。あの中に、クリスタルとか瘴気のことについて書かれてるらしいものがあったんだよ。あの本を読めば村を救うための知識が得られると思うんだ」
「本当だな……？」
低く発せられたリッドの問いかけに、ハーディはわずかに目を伏せかぶりを振るった。
「わかんないよ。本の中に何が書かれているのか、僕はまだ知らないから」
「バクチかよ」
忌々しそうにリッドが呟いた。
「行ってみる価値はあると、私は思いますね。いつもの年から考えれば、まだかなりの時間が残っているのですから」
「あたしは、どっちでもいいわよ。どっちにしても村のためってことみたいだし」
「……クリムはどう思う」
リッドに尋ねられ、クリムはわずかに逡巡した。
——確かにハーディのいうことは理解できる。それが本当に村のためになるなら、多少時間

を割いてでも行くべきかもしれない。ここからなら、急いでいけばそれほどの時間の浪費にはならないだろう。だが、同時にジャック・モキートの館という場所にクリムは躊躇を感じるのだ。あそこに踏み入るのは、館に暮らす害のない魔物の生活を踏みにじるようでどうしても気分がよくない。

「本を取りに行くだけ、だよね。だったら、行ってもいいと思う」

クリムは横目にハーディを見て尋ねた。ハーディは黙って頷いた。

「よし。そうと決まったら、急ぐぞ。村には少しでも早く帰りたい」

リッドの言葉に力強く頷き、クリムが御者台に向かって駆けだした時だった。今までじっと黙っていた黒騎士が口を開いた。

「その決意を聞かせるために、俺を呼び止めたのか？」

不満そうにいう黒騎士に、ハーディは微笑みかけた。

「まさか。あなたを呼び止めたのは、いっしょに行くように誘うためですよ」

ハーディの言葉に、クリムは眉をひそめた。黒騎士にとっても予想外だったらしく、怪訝そうに肩を小さく震わせていた。

「聞いた限りでは、おまえたちの村のことのように思えたが？　そんなことに俺を巻きこもうというのか」

「そうじゃありません。ジャック・モキートの館には、魔物に関する本もありましたから。あなたにとっても意味のあることだと思っただけです」

そういって、ハーディは不敵な笑みを浮かべた。
しばらくの間まっすぐハーディを睨みつけていた黒騎士は、諦めるように肩をすくめた。
「わかった。それが俺のためになるというのなら、共に行ってやろう」
そういって、黒騎士は足早に荷車に戻ってきた。
皆が乗りこんだのを確認し、クリムは御者台に座り大きく手綱を振るった。

*

ジャック・モキートの館に向かう荷車は、猛スピードでアルフィタリア手前の十字路を左に曲がった。
不意に黒騎士が立ちあがり、荷車の後ろへと動いた。
首をかしげながら彼を目で追っていたクリムは、幌の隙間からアルフィタリアの町が覗いているのを見た。黒騎士は幌の近くに腰をおろし、遠くに見えるアルフィタリアをじっと眺めているようだった。
「どうしたの、黒騎士？　アルフィタリアに用事があった？」
クリムが尋ねると、黒騎士は小さく背中を震わせ半分ばかり振り返ってかぶりを振った。
「そういうわけではない」
短く答えた黒騎士は再び背を向け、遠ざかるアルフィタリアを見つめた。

「……ジョナ……レオン」

黒騎士が小さくそう呟くのが聞こえた。見ると、強く握りこまれた拳が小刻みに震えている。

どうしたのだろうかとクリムは心配に思った。だが、黒騎士の背中にはそのことについて問われるのを強く拒むような雰囲気があったので、何も訊けずに口をつぐんだ。

2

ジャック・モキートの館に踏み入ったクリムたちは、書庫を目指して走った。

廊下を曲がった時、コック姿の魔物と鉢あわせした。瞬間、斧を手に黒騎士が地を蹴った。

クリムは反射的に、黒騎士の腕を掴んでいた。腕を引かれた黒騎士は無様に後ろに倒れる。

「くっ。きさま、どういうつもりだ」

躰を起こしながら黒騎士は声を荒らげた。

「戦っちゃ駄目だ。ここの魔物は、ただ生活しているだけなんだ。襲う必要なんてないよ」

「何をふざけたことをいっている。奴らは魔物だ。キャラバンを脅かす存在だ。何故それを見逃してやらねばならない」

「だって、普通に暮らしてるだけの魔物を襲うなんて、それじゃ人を襲う魔物と変わらないじゃないか」

声を震わせ叫んだクリムの眼前に顔を近づけ、黒騎士は睨みつけてきた。クリムも息を詰め彼を見返す。

「そんなケンカは、もっと暇な時にやってくれないかしら」

呆れた様子で発せられたイ・リュの言葉に、黒騎士は舌打ちしながら顔を背けた。

「ん？　魔物はどうした」

黒騎士は自分を取り囲むように立っているリッドたちを見て怪訝そうに首をかしげた。

「逃げたよ、一目散に。オレたちに相当驚いたみたいだったな」

「仲間を呼びに行ったのかもしれません。急いで移動したほうがいいと思いますよ」

サムルンティがそういうと、黒騎士は忌々しげにまた舌打ちした。

＊

書庫に入るや否やハーディは飛びつくように書棚に向かって駆けだした。クリムたちも彼につづいて書棚に近づいた。黒騎士とリッドの二人は戸口近くで足を止め、魔物の進入を警戒するように扉を睨んで身構えていた。

「これと、これと……あと、あの上の方に確か……」

ぶつぶつと呟きながらハーディは器用に書棚をよじ登り、本を引き抜いていった。

「これ、運んでくの？」

ハーディに渡された本を床に投げるように置きながら、イ・リュが嫌そうに顔をゆがめた。巨大な魔物のものだけあって、本も常識はずれの大きさだった。一冊一冊が、リルティの背丈ほどもある。

「よし、これで全部だな。さあ、帰ろう」

書棚から飛びおりてきたハーディはそういって床に置いたクリスタルケージに手を伸ばした。が、彼より先にイ・リュがケージを抱えあげた。

「ケージはあたしがもってあげるから、あんたは自分で本を運びなさいよ」

イ・リュの言葉に一瞬顔をゆがませたハーディだったが、すぐに納得した様子で頷いた。

「そうだね、うん。クリム、サムルンティ、手伝って」

「わかったよ」

返事と共にクリムは足下に落ちている本を抱えあげた。

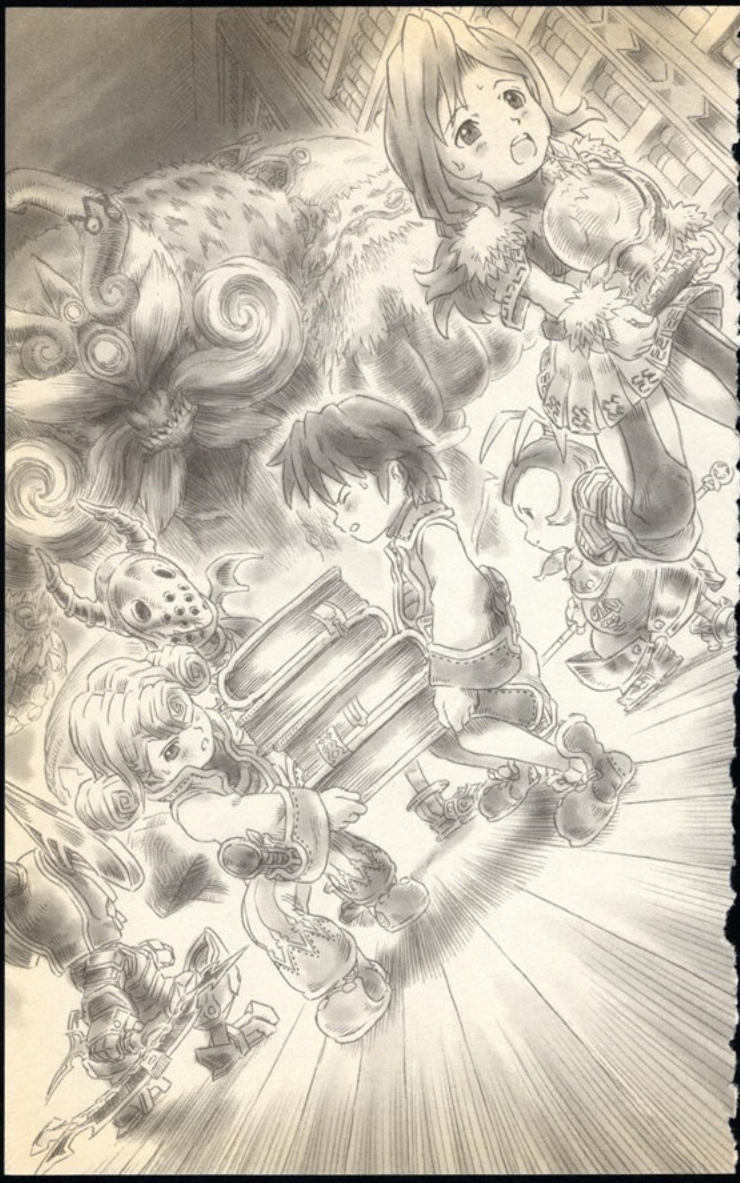
ハーディが取りだした四冊の巨大な本を一つにまとめて積みあげ、クリムとハーディとサムルンティが三人がかりで運んだ。リッドと黒騎士は本を運ぶ三人を護衛するように横について歩いた。

廊下を進み、後少しで外に出られるところまで来た時、大きな足音が背後から迫ってきた。息を飲み振り返ったクリムの視界に猛然と駆けてくるジャック・モキートの姿が映った。

黒騎士が斧を構えジャック・モキートに向かって駆けだす。

「駄目！」

声を限りに叫んだクリムを黒騎士が鋭く睨んだ。
「またふざけたことをいうつもりか。戦わねばこちらがやられるのだぞ」
「駄目だ、黒騎士」
今度はハーディが叫んだ。
「魔物退治の是非はともかく、こんな大きな荷物抱えてるんだ。あれだけ強力な魔物を相手になんてできないよ。今は、とにかく逃げるんだよ」
「放っておけば追いつかれるぞ。問題ない。あれくらいは俺一人で対処できる」
「それでも、僕たちも巻きこまれちゃうじゃないか」
「では、どうしろと」
いいあっている間にも、ジャック・モキートの姿はみるみる近づいてくる。
「リッド、変わってください」
そういってサムルンティが本から手を離した。急に増した重みにクリムは体勢を崩した。リッドが慌てた様子で、落ちそうになる本を支える。
「あなたも走って！」
黒騎士に向かってそう叫ぶと、サムルンティは大きく手をかざした。掌に赤い光が収束し、ファイアの魔法が放たれる。
顔面を炎に包まれたジャック・モキートがよろめいた。炎を払うように顔を拭いながらもだえている。サムルンティは、さらに立てつづけに三発ファイアを放った。ジャック・モキー



トは暴れまわるようにして躰中の毛を焼く炎と格闘を始めた。
「今のうちです、早く！」
サムルンティの声に促されるように、クリムたちは足を速めた。
門を飛びだしたクリムたちは、放りこむようにして本を荷車に載せ、大急ぎでジャック・モキートの館を離れた。
猛スピードで走る荷車に揺られながら、黒騎士はひどく苛立った様子で足を揺すっていた。

3

いつもの年よりも五十日以上も早く帰ってきたキャラバンを村人たちは驚きで迎えた。
「いったい、どうしたわけだ。まだ、水かけ祭の時期には早すぎるぞ」
訝しげに尋ねる村長に、クリムは半島を被う瘴気が濃くなっている恐れがあることを話し、すぐにでもクリスタルを清めて欲しいと頼んだ。
村長はわずかも悩む様子なく首肯し、村人たちに水かけ祭の準備に取りかかるように指示を出した。
水かけ祭の準備のために散っていった村人たちを見送り、自身も立ち去ろうとした村長をクリムは呼び止めた。
「確証がないんでみんなの前ではいいづらかったんですけど、もしかするとクリスタルの力が

弱まっているのかもしれないってヘルナドがいっていたんです。ぼくたちもその可能性が強いんじゃないかって思って。だからこそ、早くクリスタルを清めた方がいいと思ったんです」

周囲を気にしながらクリムがそういうと、村長は神妙そうに頷いた。

「なるほど、それはあるやもしれん。ここ数年の作物の不良に加えて、最近では老人や小さな子どもといった者たちの中に、体調を崩し寝こむ者が何人も現れておる。確かに、おまえたちのいうようにクリスタルの力が弱っていると考えれば理解できる」

いいながら村長は何度か小さく咳こんだ。

「とはいえ、今のわしらにできるのは、水かけ祭を行ないクリスタルの力を少しでも回復することだけであろう。さて、準備を急ぐとしようか」

村長は深いしわを寄せてそういうと、足早にクリムたちの前から去っていった。

その夜に行なわれた水かけ祭は、普段とは異なった緊張感に包まれていた。集まった村人は皆、悲痛とも思えるほど真剣な表情で息を詰め、儀式を見守っていた。

滞りなく儀式が終わり、クリスタルが眩い輝きを取り戻しても、騒ぎだす者は一人もいなかった。皆、祈るような眼差しでクリスタルを見つめつづけている。中には実際に手をあわせ祈りを捧げる者もいた。村を襲っている災厄が取り除かれるようと、声に出し何度も繰り返している者もいた。

宴も行なわれず、深刻な雰囲気のまま水かけ祭は終わった。

しかし、それもしかたのないことだろう。ティパの村の状況は、明らかに去年よりもひど

くなっていた。

まだ収穫まで間があるため緑色をしている麦穂は、目に見えて力がないものばかりだ。リンゴやいもといった他の農産物も弱々しく葉を萎れさせている。川や海には、魚の姿がほとんどなくなった。家畜の牛も痩せ、乳をあまり出さなくなっていた。小さな地震もたびたび起こっているらしい。

せめてもの救いは、村の状態を深刻だと感じていたヘルナドが、多量の食料をファムから送ってきてくれていたことだ。村の備蓄とこの食料のおかげで、今すぐに食料難に陥るという事態だけはどうにか免れることができていた。

そして、村の状況の悪化と呼応するかのように、体調を崩す人も増えている。

「無理はしないって約束したじゃないか」

クリムは畑の中を忙しそうに歩き回っているノアを見つめ、顔をしかめた。

「うん、わかってる、無理なんてしてないよ。ちゃんと躰には気をつけてるから」

そういって微笑んだノアの顔は、とても健康そうには見えなかった。

「もう、そんな顔しないで。ほんとうに気をつけてるんだから。それとも、クリムはわたしに家でずっと寝てろとでもいうつもり？　わたし、病人じゃないんだよ」

いいながら、ノアは小さく数度咳こんだ。

「ほらっ。それだけ咳してたら立派な病人だよ」

「ちょっと喉が痛いだけ。ほんとうにだいじょうぶなんだから、そんなに心配しないで。そん

なふうにいわれると、ほんとうに病気なのかなって気になっちゃうよ」

笑いながらいって、ノアは麦穂の間を駆けていった。

彼女の姿を心配顔で見つめながら小さなため息をつき、クリムは視線を落とした。

昨夜の水かけ祭の時の村の人々の顔が脳裡に浮かんだ。誰もが村に起きていることに強い不安を感じているのは明らかだった。縋るように祈っていたのは、ただミルラの雫でクリスタルを清めるだけでは今の状況は変わらないと皆が思っているからだろう。皆、どうにかして安心したいのだ。何でもいいから、明るい兆しが欲しいと思っているのだ。

その兆しを見つけだすため、今ハーディはジャック・モキートの館から持ち帰った本を読み解いている。慣れてない人間が係わるより一人でやったほうが捗るからとクリムたちが手伝おうとするのを断り、ハーディは本を持って家にこもった。ただ、黒騎士だけは同じようにハーディが持ち帰った魔物に関する本を調べるために彼の家にいる。

――様子を見にいってみようか。

そう思ったクリムは、顔をあげノアに声をかけた。

「ねえ、ぼくちょっと……」

言葉を途切らせ、クリムは息を飲んだ。視界いっぱいに拡がる麦畑の中にさっきまであったノアの姿が見当たらなかった。

「ノア？　ノア」

麦穂の海の中でしゃがんでいるだけかもしれない、そう思いながらクリムは叫ぶように彼女

の名を呼んだ。だが、ノアは姿を現さなかった。それどころか、声も返ってこない。
「ノア！」
激しい焦燥感に襲われ、クリムは駆けだした。ノアの名を繰り返しながら、畑の中を走った。
彼女の姿はすぐに見つかった。麦穂の中に埋もれるようにノアは倒れていた。
「ノア！　ノア！　ねえ、ノア！　返事して！」
クリムはノアを抱き起こし叫んだ。だが、ひどくぐったりとしているノアが返事を返す様子はなかった。わずかにまぶたを痙攣させるだけで、目も開こうとしない。
クリムは彼女の口元に顔を寄せ呼吸がしっかりと安定していることを確認すると、ノアを抱えたまま立ちあがり彼女の家に急いだ。
「おじさん！　おばさん！」
家に向かって走りながら、クリムはさらに叫んだ。
クリムの声にただならぬものを感じたのだろう、乱暴に扉が開けられ家の中からノアの父と母と弟のアイランが飛びだしてきた。外に出た三人は、ノアを抱え血相を変えて駆けてくるクリムの姿を見つめ、一瞬声を失って立ち尽くしていた。
「ど、どど、どうしたんだ」
震える声でそういって、ノアの父は大きな音を立てて唾を飲んだ。
「わかんない。気がついたら倒れてたんだ。ごめん、ぼくがもっと注意してれば」

「い、いや、そんなことは。それより、とにかくだな、まずは、えっと……」
ノアの父は、ひどく混乱した様子で意味もなく手を宙に躍らせていた。
「ほら、あんたがそんなに取り乱してどうするの」
そういうと、ノアの母は夫の背中を平手で打った。
「そ、そうだな」
一瞬躊を大きく仰け反らせたノアの父は、目にうっすらと涙を浮かべながら妻を振り返り小さく頷いた。ノアの母はクリムに顔を向けた。
「とりあえず、ベッドまで運んでちょうだい。それから、アイラン。あんたは、お医者さん呼んできて」
「わ、わかった」
アイランは短く答え、すぐさま駆けだした。
「さ、クリム。お願い」
ノアの母に促され、クリムはノアを彼女の部屋のベッドまで運んだ。
彼女を寝かせたクリムは、ベッドの傍らの椅子に腰をおろし、じっとノアを見守った。
クリムはそっとノアの額に触れた。熱はないようだ。多少呼吸が大きく荒い気はするが、こうしているとただ眠っているだけにも見える。
間もなく、アイランが呼んできたユークの医者が部屋に入ってきた。
「ほれ、診察をするぞ。おまえさんは、部屋を出ていきなさい」

一瞬戸惑ったクリムは、すぐにいわれている意味に気づき椅子を立った。
「あの、それじゃ、お願いします」
深く頭をさげ、クリムは足早に部屋を出た。
「……どうしたんだ、クリム。そんなに慌てて。ねーちゃん、そんなに悪いのか」
扉の外にいたアイランとノアの母が、クリムの様子を見て怪訝な顔をしていた。
「そ、そんなことないよ。ほら、ここは先生とおばさんに任せよう」
水を張った器を抱えたノアの母に会釈し、アイランを追い立てるようにしてクリムはその場を離れた。

*

クリムは食卓の椅子に座り、出されたお茶のカップを両手で握り締めていた。足先を小刻みに揺すりながらじっと医者が出てくるのを待っていた。ノアの父とアイランも落ち着かない様子で食卓についていた。
カップの中のお茶がゆらゆらと波立っている。その水面に落ちつかない気もちを煽られているように感じ、クリムはカップを煽りお茶を一気に飲み乾した。
空になったカップを置きクリムが長い吐息をついた時、医者とノアの母が食堂に姿を現した。クリムたち三人は、弾かれたように一斉に立ちあがった。

「先生っ」
クリムは叫ぶように呼びかけた。医者は落ちつけといわんばかりにクリムを手で制し、皆を見回した。
「安心せい。単なる疲労だ。病気の類ではない。しばらくおとなしく寝ておれば、すぐによくなる」
落ちついた調子で放たれた医師の言葉に、クリムは顔をしかめた。
「でも、あんなにずっと咳をしてたのに」
「そうはいっても、どこも悪くないのだからしょうがなかろう。相当疲労が溜まっているようだから、明日明後日に元通り元気にとはいかんだろうがな。それとも、クリム。おまえさんは、ノアを是が非でも病人にしたいか」
「そんなこと……」
クリムは口ごもりながらかぶりを振った。
「ともかく、栄養のあるものを食べさせ、ゆっくり家の中で休ませることだ。おまえさんたちも大変だろうが。忙しいからなどといって、畑仕事を手伝わせたりするんじゃないぞ。あの娘が働きたがってもだめだからな。私の名前を出してでも、おとなしく寝ておるように命じておきなさい」
「わかりました」
ノアの父と母は、神妙な顔で頷いた。

「それでは、私は帰らせてもらうよ。クリム、すまないが送ってくれないかね」
「え？　でも……」
いきなりの医者の言葉に戸惑いながら、クリムはノアの部屋の扉に目をやった。
「ノアだったら、まだ眠っておる。今は静かにしてやることが彼女のためだ。ほれ、わかったら行くぞ」
「……はい」
強い調子の医者の言葉にクリムは渋々頷いた。
「では、頼むぞ」
そういって歩きだした医者の後をクリムは慌てて追った。
ノアの家を出ると、医者は黙ったまままうつむきがちに歩きつづけた。横を歩きながら、クリムはちらちらと医者の顔を窺った。
「……クリムよ。おまえさんにだけはいっておこうと思うのだがな」
不意に低い声でそういって、医者がクリムを見た。
「どうもな、病状が気になるのだよ。もしかすると、あれは瘴気に冒されたのやも知れん」
「えっ」
絶句し目を丸くしたクリムは、次に眉間に深いしわを寄せた。
「こら、おまえさんがそんな顔をしてどうする。そのような顔、絶対にあの娘の前でするなよ。いらん不安は、躰に余計な負担をかける」

「でも、先生……」

「無論、私の思い過ごしかも知れん。何せ、生まれてこの方瘴気に冒された者など診察したことはないからな。おまえさんもすでに聞いているかもしれんが、村の年寄りや小さな子どもの中にあの娘と同じように倒れた者が何人もおる。皆、体力のないものばかりだ。弱った躰に瘴気が悪い影響を与えている。そう考えなければ納得のできない衰弱の仕方なのも事実なのだよ」

淡々と発せられる医者の言葉にクリムは歯噛みした。

「なあ、クリムよ。おまえさんは、キャラバンだろ。何とかできんか」

まっすぐに見つめられ、クリムの心臓は大きく跳ねた。拳に力がこもりぶるぶると震えた。

「あ、いや、すまん。こんなことをいってはいかんな。患者を診るのは私の仕事だ。ここで私が他人を頼ってしまってどうする」

医者は自戒するようにうつむきかぶりを振った。

クリムは堪えきれず、駆けだした。突然のことに戸惑った様子で彼を呼ぶ医者の声にも答えずに、猛然と走った。

「ハーディ！　ハーディ！」

ハーディの家まで駆けてきたクリムは、玄関に取りつき何度も何度も乱暴に扉を叩いた。破れるほどに叩きつづけ、ようやく扉が開いた。中からのっそりとハーディが顔を覗かせる。徹夜をしたのだろうか、目が真っ赤に充血していた。

「何かわかった？　どうしたら、瘴気は元に戻る」
いきなり息荒く尋ねたクリムに驚いたのだろう、ハーディは眼を丸くしながら躰を引いた。
「ねえ、教えてよ。どうしたら、村は元通りになるの」
「ちょ、ちょっと待って。まだ調べ始めたばっかりだよ。そんな簡単にはわかんないよ……」
狼狽した様子でいって、ハーディはまじまじとクリムの顔を見つめ眉をひそめた。
「……何か、あったの？」
ハーディの問いかけに、クリムの胸の奥で何かがざわりと蠢いた。
「ノアが倒れたんだ。医者の先生が、瘴気に冒されたんじゃないかって」
「えっ！　それで、ノアはどうしたの。大丈夫なの？」
「今は寝てるよ。おとなしくしてれば、とりあえずは大丈夫みたいだけど。でも、このままじゃどうなるかなんてわかんないだろ」
早口でいって、クリムはハーディ胸を締めあげるように掴んだ。
「ねえ、ぼくはどうしたらいい。何でもいい、何でもするから。だから、ぼくにできることをいってよ。どんなことだって手伝うから」
「落ちつけ。そのように慌てふためいても何の解決にもなるまい」
奥から姿を現した黒騎士がとがめるようにいった。クリムは、思わず強く歯噛みして彼を睨みつけた。
襟首を掴み震えるほどに強く握り締めたクリムの手に、ハーディの手が置かれた。その感触

に視線を戻したクリムの目の前に、わずかに表情をゆがめながら笑うハーディの顔があった。
「黒騎士のいうとおりだよ。落ちついて、クリム。苦しいよ」
「ご、ごめん……」
クリムはハーディを掴んでいた手を離し、うつむいた。おろした手には無意識のうちにまた力がこもった。強く握られた拳がぶるぶると震える。
「悪いけど、クリムに手伝ってもらうようなことは何もないんだ。今は、とにかく待っていてもらうしかないよ」
「そんなっ。本当に何でもいいんだよ」
詰め寄ったクリムに、ハーディは静かに首を振った。
「本当に何もないんだよ。できるだけ早く瘴気のことを調べるから、今は僕を信じて待ってて」
「……わかったよ」
クリムは唇を噛みうなだれた。
「ごめん、邪魔したね」
うつむいたままぴすを返したクリムをハーディが呼び止めた。
「そうだ。一つだけ、クリムにしかできないことがあるよ」
「ほんとっ？」
クリムが目を見開き振り返ると、ハーディはにこやかに頷いた。
「ノアがこれ以上躰を悪くしないように看病するんだ。同じようにこの村で生活している他

の人たちはまだ平気なんだ。ノアが瘴気のせいで倒れたんだとしても、きっと、今までの無理で躰が弱っていたせいもあるはずだよ。だから、ゆっくり休めるようにしてあげるんだ」
「ああ……そうだね。うん、そうするよ」
「だったら、そんな顔してちゃ駄目だよ。いつもどおりのクリムじゃないと」
ハーディにいわれ、クリムは笑顔を作った。
「わかった。それじゃ、ハーディ。頼んだよ」
「うん、任せておいて」
力強く頷きあい、クリムはハーディの家を出た。

4

「ん？　どうしたの？」
じっと自分を見つめるノアの視線に気づき、クリムは首をかしげた。目があうと、ノアは恥ずかしそうに顔を伏せた。ベッドに視線を落としながら頬を緩ませたノアを見て、クリムはさらに首をかしげた。
「こうしてるのも、たまにはいいかもね」
楽しそうにそういって、ノアは笑顔をクリムに向けた。
「こうやって毎日クリムが来てくれるんだもん」

ノアの言葉にクリムはわずかに顔をしかめた。
「だって、ぼくが見てないとノアはまた無理するだろ。また、いきなり倒れられたら困るからね。あの時は本当に心臓が止まるかと思ったんだからさ」
「ごめんね。でも、わたしもびっくりしたんだよ。急に苦しくなって気を失っちゃって。クリムとの約束守って、ほんとうに無理はしてないつもりだったのに」
そういったノアは、小さな咳を数回した。
「もういいよ。とにかく今はちゃんとおとなしくして、早く元気になることだよ。麦の収穫までには元気になってもらわないとね。ぼくの仕事が増えちゃうから」
「もう、そんな理由で優しくしてくれてたの」
頬を膨らませ、ノアは顔を背けた。
「べ、べつに、そんなわけじゃ」
うろたえたクリムの言葉を無視するように、ノアは窓の外に見える麦畑をじっと眺めていた。実りの時期を間近に控え、麦は黄色く色づき始めている。だが、どれも力なく黒ずんでいて、麦畑は濃い影が落ちたかのような色をしていた。
「今年も、駄目だったね。いつになったらちゃんと育ってくれるのかな」
ノアはため息混じりに呟いた。
「大丈夫。もうすぐ全部元通りになる」
クリムは力強くいい放った。彼の声に驚いた様子でノアが振り返った。

「絶対に、もうすぐみんな元通りになるよ。ううん、ぼくが戻してみせる」
「……うん」
クリムの言葉に何故かほのかに顔を赤らめながらノアが頷いた。その時、不意に窓枠がかたかたと小さな音を立てて震えた。その音をクリムの耳が捉えたのとほとんど同時に、部屋全体が大きく揺れだした。
「きゃっ」
短い悲鳴をあげ、ノアはベッドの上でうずくまるように躰を小さく丸めた。
「ノア！」
クリムは被いかぶさるように彼女を抱きしめた。
地震は激しさを増し、けたたましい音を立て棚や箪笥が倒れた。
壁や床を軋ませ揺れは長くつづいた。
ノアの手が縋りつくようにクリムの胸を握り締める。彼女の躰が小さく震えているのが、地震の揺れの中でも伝わってきた。
波が引くように揺れが小さくなっていく。
地震が収まってもまだ、ノアはクリムの胸の中で震えていた。
「大丈夫、ノア？」
クリムが問いかけると、ノアは慌てた様子で手を引っ込めた。
「う、うん。わたしは、だいじょうぶ」

そういって顔をあげたノアは、部屋の中の惨状を見て顔を引きつらせた。
「ここでじっとしてるんだよ。父さんたちも心配だし、ぼくは一度家に戻るから」
「えっ？」
ノアは弾かれたように振り返り、縋るような目でクリムを見た。
「アイランに側にいるようにいっておくから、心配しなくても大丈夫だよ」
「でも……」
「ぼくも、すぐにもどってくる。だから、ね」
不安そうな顔で頷くノアに、笑顔で軽く手を振りながらクリムは部屋を出た。
食堂も家具や食器でひどい状態だったが、幸いなことにノアの母が腰を打った他には怪我らしい怪我をした者はいなかった。アイランにノアの側についておくよう頼んで、クリムは家を飛びだした。
外へ出たクリムは、戦慄した。あちこちで家が半壊し、幾筋もの煙が立ち昇っている。
その光景の恐ろしさに膝を震えさせながら、クリムは家へと急いだ。岬の高台に向かう坂を駆けあがりながら、クリムは目に涙をあふれさせた。坂の上に見える風車小屋の屋根が三分の二ほどなくなっている。
「父さん！　母さん！」
叫びながら坂を登りきったクリムは、家の前に父と母の姿を見つけた。
父は額を切ったらしく大きな布で頭を抑えていたが、とりあえず二人とも無事なようだ。た

だ、彼らの後ろに見える風車小屋は右半分が崩れ瓦礫と化していた。風車の羽も壊れ地面に突き刺さっている。

「ああ、よかった。無事だったのね、クリム」

顔をあげた母が、泣きそうな顔でいった。

「うん、ぼくは何ともない。ノアの家もみんな無事だよ」

答えながら、クリムは崩れかかった風車小屋を見あげた。

「そう。よかったわ……」

「ああ。うちもこの程度で済んでよかったよ。母屋は無事だったしな。暮らすだけなら何も問題はない。他の家に比べれば……」

いいながら顔をあげ、村の中心を見たクラウスは不意に表情を強張らせた。

クリムは首をかしげ父の見ている先に視線を転じた。そして、目に映ったものに思わず息を飲み声を失った。

北の空が赤黒く染まっていた。どろどろの液体のように黒と赤が渦を巻き、ゆっくりと染みだすように空いっぱいに拡がっていっている。

「な、何なのあれ……」

母の震える声にクリムは我に返り、村の入り口に向かって駆けだした。

村の広場にリッドとサムルンティとイ・リュの姿を見つけた。クリムが駆け寄ると、皆が深刻な顔を彼に向けた。

赤黒い染みはすでに空を半分ほど埋め、さらに拡がりつづけていた。
「これって、やっぱり」
クリムの声は、不意に吹き荒れた突風に掻き消された。重く激しい音と共に砂と草を巻きあげ暴れまわるように風が吹き抜けていく。
舞う砂に閉じていた目を開けると、視界が薄暗くなっていた。
「な、何だってんだよ」
空を見あげたリッドが苛立たしげな声をあげた。
同じように空を見あげクリムは、ただ茫然と立ち尽くしていた。空には、先ほどまでの青さは欠片も残っていなかった。赤と紫と黒の色をそれぞれ水に流しこみ混ぜあわせているような異様な対流が空一面を被い尽している。
「あ、みんな！」
呼び声に、クリムは深刻な顔を向けた。ハーディと黒騎士が走ってくるのが見えた。
「ちょっと、ハーディ！　これって、どういうことよ。いったい何が起こってるの！」
駆け寄ってくるハーディに向けて、イ・リュが怒鳴りつけた。
「そんなこと僕に訊かれてもわかんないよ」
「だってあんた、瘴気のこと調べてるんでしょ。そのためにわざわざ遠回りして本まで取りに行ったんじゃない」
「だからって、そんな簡単にはわかんないよ。それに、こんな突然の事態のことまでわかるわ

けないじゃない」
「俾そうなことといって、全然何の役にも立ってないじゃない。何とかしなさいよ」
「やめなよ、イ・リュ」
掴みかからんほどの勢いで声を荒らげるイ・リュをクリムはなだめた。その瞬間、イ・リュの眦の吊りあがった目がクリムに向けられた。
「何いってんの。このまんまじゃ村がティダの村みたいになっちゃうかもしれないのよ」
「わかってるよっ」
クリムは怒鳴り返した。いわれるまでもない。この空を見た瞬間からクリムの脳裡にも以前目にしたティダの村の光景が強く甦っている。ティパの村が同じように滅んでしまうのではないかという不安が胸の中で強く渦巻いている。
「でも、だからってハーディを責めてもしょうがないだろ。それよりも、どうしたらいいかを考えないと」
「そうだよ。何かできることを探そう」
ハーディがそういうと、イ・リュは苛立った様子で歯軋りした。
「だったら教えてよ。どうしたらいいの」
「そうですね、このままでは対処法の考えようもありません。せめて、この瘴気がどこから流れてきているのかがわかればいいのですが」
「あ、おまえらこんなところに集まってたのか」

サムルンティの言葉を遮るように叫びながら、ゲイルが血相を変えて走ってきた。
「大変なんだよ。外の瘴気が、少しずつだけど村に近づいて来てんだ」
ゲイルの言葉に、クリムたちはそろって絶句した。
「なあ、どうにかなんねえのか。おまえら世界中旅してんだろ。こんな濃い瘴気が出てきそうな場所とか知らないのかよ」
「そういわれても、思い当たる場所など瘴気ストリームくらいしか……」
サムルンティが悔しそうに頭を振りながらうつむいた。
――確かに村を取り囲んで漂っている濃密な瘴気なんて、瘴気ストリームでしか見たことがない。でも、村から一番近い瘴気ストリームだって遠く離れすぎてる。あそこから流れてきても、きっと村に届くまでに拡散して薄まってしまう。ということは、もっと村に近い場所で、瘴気ストリームみたいな濃密な瘴気が噴きだしている場所があるっていうことか。
「……ん？」
黙考していたクリムは、何か引っかかるものを感じた。
――瘴気ストリームみたいって、どっかで……。
「そうだ。リバーベル街道！」
記憶を探っていたクリムは、ハーディの叫びに思わず手を打った。
「ああ！　あの谷底！」
「そうだよ。あそこ。あの穴からすごく濃い瘴気が噴きだしてた」

「ちょっと待ってください。どのことです？」
サムルンティが不思議そうに首をかしげた。
「ああ、おまえはいなかったんだっけ。リバーベルの谷底で、濃い瘴気が噴きだしてるこのくらいの穴を見つけたんだよ。って、あの穴はこんなに小さかったぞ。それが、こんなにたくさんの瘴気をいっぺんに出すのか？」
手で穴の大きさを示しながら説明していたリッドは、怪訝な顔をハーディに向けた。
「いえ、可能性はあります。穴から瘴気が流れでていたということは、その奥に空洞が拡がっているということですから」
皆の顔を見回したリッドに、クリムは強く頷いた。
「よし。じゃあ、急いで出発の準備だ！」
リッドの言葉と共に、クリムたちはいっせいに駆けだした。
家に駆け戻ったクリムは部屋に置いてあった剣と盾を手に取り、戻ってきた時と同じ勢いで部屋を飛びだした。
家の前に、不安そうな顔で立つ父と母の姿があった。
「行ってくる」
短くそれだけいって、クリムは坂を駆けおりた。

＊

村の入り口ではゲイルがパパオの手綱を握って待っていた。
「二、三日分しかないけど、うちの店にあった食料積みこんどいてやったぜ」
駆け寄るクリムたちに、ゲイルは自慢げにそういった。
「すまない」
リッドが頭をさげると、ゲイルは照れくさそうに鼻の頭を掻いた。
「なに、俺にはこれくらいしかできないからよ。んじゃ、頼むぜ」
「ああ」
強く頷き返し、クリムたちは急いで荷車に乗りこんだ。
「行きますよ」
御者台に座ったサムルンティが手綱を強く振るった。
手綱がパパオの背を叩く乾いた音が聞こえたのとほとんど同時に黒い影が荷車の中に飛びこんできた。黒騎士だった。
「俺も手伝わせてもらおう」
転がるように荷車の中に入りこんだ黒騎士は、息荒くそういった。
パパオが猛然と走りだす。と、後方から大きな声が聞こえてきた。幌をあげると、いつの間に集まったのか幾人もの村人の姿が村の入り口に見えた。
その姿は普段のキャラバンの見送りとは大きく違っていた。集まった人の数も少なく、大

きな傷を負った者のすがたも何人も見えた。しかし、何より異なっていたのは、彼らが発しているのが悲痛な叫びに似た檄だったことだ。

「必ず、この異常な瘴気を消す！　絶対に村を救ってみせるから！」

クリムは集まった人たちに向かって声を限りに叫んで答えた。

六人を乗せた荷車はリバーベル街道へ猛スピードで走った。

5

リバーベル街道の谷底に足を踏み入れたクリムは、思わず口を抑え小さな呻きをもらした。

一帯の空気はひどく澱んでいた。濁った白色をした瘴気が立ちこめ、重々しく漂っている。地面に転がる岩も倒木も風化してからからに渇いていた。わずかでも触れれば崩れて塵になってしまいそうだ。

「やっぱり、ここに間違いなさそうだな」

憂鬱そうに顔をゆがめたリッドが、正面を見据えて呟いた。

前に来たときに亀裂を見つけた岩盤は大きく崩れていた。手で隠せそうなほどに小さかった亀裂は、今は洞窟の入り口のように大きな穴となっている。そのぽっかりと開いた穴から、気分の悪くなるほどの濃密な瘴気が吐きだされていた。流れだした濃密な瘴気は一帯に立ちこめた澱んだ空気を掻き乱し、渦を巻きながら異様な色をたたえる暗い空へと登っていく。

「どうすんのよ、こんなの。また、埋めるわけ？」
「それじゃ、同じことの繰り返しだよ。もっと根本的な部分を何とかしないと」
小さくかぶりを振ったハーディは、そういって穴に目をやった。それだけで彼が何をいわんとしているのかは充分に理解できた。
「うん、行こう」
クリムは頷き、瘴気を吐きだす大穴の中の闇を睨み拳を強く握った。
「よし、こいつを止める方法をなんとしてでも見つけるぞ」
力強くそういって歩きだしたリッドを先頭に、クリムたちは穴の中に入った。
穴の中は洞窟のような道が伸びていた。薄暗い洞窟の奥からは濃密な瘴気が絶えず流れてきている。クリムたちは細く長い洞窟のくだり坂を進んだ。
しばらく行くと、不意に開けた空間に出た。左右の壁も天井も瘴気と闇にまぎれぼやけてしまうほどの広い空間だった。
その空間に足を踏み入れた瞬間、クリムは瘴気の流れが変わったのを感じた。広い場所に出たからかと一瞬思ったが、どうやらそうではないようだ。高い場所から流れ落ちてきている。
「何か、いる……」
手にした斧を鳴らし黒騎士が低くいった。その声に緊張感を高め、クリムは剣にかけた手に力をこめた。

周囲を警戒しながらゆっくりと進んだクリムたちは、前方に巨大な影を見つけ足を止めた。太い幹のようなものが、天井に向かいまっすぐに伸びていた。小さな枝が無数に伸び、風にそよぐように揺れている。それを目にした瞬間、クリムは大樹がそびえているのかと思った。しかし、それが間違いであることにすぐに気づいた。目の前のそれは、小さく左右にうねり蠢いていたのである。小枝に見えたのは、どうやら繊毛の類のようだ。

クリムは息を詰め、視線を持ちあげた。

大樹のように見えたのは、とてつもなく巨大な魔物だった。先端は天井に届きそうなほどに高い場所にあり、遥かかなたの闇の中までつづく躰はどれほどの長さを持つのか検討もつかない。

魔物の先端には、ただぽっかりと大きな穴のような口が開いてるだけで、他には何もなかった。そして、その口からは唾液のようにだらだらと濃密な瘴気がこぼれ落ちている。

とてつもなく巨大なミミズのようにも、天に向かって伸び自由に動く大きな木の根のようにも感じられた。

「こいつが……」

得体の知れない巨大な魔物の姿に戦慄しながら、クリムは剣を抜いた。

ゆらり。魔物の躰が大きく揺れ、大きく開かれた口がクリムたちに迫る。激しい勢いで瘴気が吐きだされた。

瘴気はケージの聖域に押し返され渦を巻く。魔物の呼気が巻き起こした突風だけがクリムた

ちの間を吹き抜けていく。その風を浴びた瞬間、クリムは頬や手がひりひりと痛むのを感じた。瘴気が強すぎるのか、瘴気とは別の毒素を含んでいたのか。

「また、ずいぶんと桁外れな化け物が現れたもんだな。こいつはさすがにやばいかも知れん」

「でも、こいつを倒せば、この瘴気はなくなるんだ。こいつを倒せばっ」

「おうっ。一気にぶっ倒しちまおうぜ」

クリムとリッドと黒騎士はほとんど同時に地を蹴り魔物に斬りかかった。

第九章　クリスタルの輝き

1

黒騎士は高く飛びあがり、振りかぶった斧を大きく薙いだ。刃が肉厚な魔物の皮を裂く。身を翻しさらに斜めに振りおろす。魔物の躰に十字の傷を刻みつけられた。

だが、巨大な魔物はわずかの痛みも感じていないのかひるむ様子すらみせなかった。魔物の巨体が大きく振られる。巨木のような魔物の躰に弾き飛ばされ、黒騎士は地面に叩きつけられた。

「黒騎士！　くっ、このっ」

肩で大きな息をしていたクリムは、支えにしていた剣を握りなおし魔物に向かって駆けた。突進の勢いと体重を乗せ剣を突きだす。刃は魔物の躰深くに突き刺さった。確かな手ごたえと共にクリムは剣を横に払った。魔物の躰が裂ける。大きな傷を負った魔物の躰が蠢いた。クリムに向かって巨体が倒れこんでくる。クリムはとっさに転がるように横に跳んだ。魔物の躰を寸前でかわす。巨体に押しつぶされ、地面に転がるいくつもの石が弾けた。飛び散った石礫が掠め、クリムの頬が裂け血が流れた。

もう、どれくらい攻撃を繰り返しているだろう。魔物の躰にはクリムたちがつけた傷が無

数に刻まれている。だが、巨大な魔物はダメージなどまるで感じていないようだった。クリムたちの度重なる攻撃を嘲笑うかのように悠然と瘴気を撒き散らしつづけている。

「くそっ。せめて、あそこに攻撃が届けば……」

リッドの忌々しげな声に、クリムも遥か上を見あげた。瘴気を吐く口を襲うサムルンティのファイアが小さく感じられるほど高くに魔物の先端はあった。

「何とかしてみましょう。ハーディ、手伝ってください」

突如そういうと、サムルンティはサンダーの指輪をはずしハーディに向かって投げた。

「え？　何？　どうすれば……」

ハーディは戸惑い慌てた様子で指輪を受け取った。

「私の合図にあわせ、サンダーをあの魔物の口めがけて放つんです。いいですね」

「わ、わかった」

頷いたハーディは指輪をはめ、両手を魔物に向けて突きだした。それを見て、サムルンティも両手を魔物に向ける。二人の手の中で青と赤の光が生まれ大きくなっていく。

魔物がクリムたちに向かい口を開いた。

「今です！」

サムルンティの声と共に魔物の上で赤と青の光が瞬いた。炎と雷に変ずると思われた二つの光は混ざりあい、激しく空気を震わせた。大きく躰を揺すりもがきながら、魔物はどんどんと姿勢を低くしていく。

「な、何が起きてるの……」

「魔法合成です。加重魔法グラビデですよ。どうやら、うまくいったようですね。ハーディ、休まずにつづけますよ。奴の頭部らしい先端部分を地面に縛りつけてしまうんです」

サムルンティは鋭くそういい、また両手を突きだした。

空気がさらに大きく震え、激しくもがき暴れる魔物はいっそう身を沈ませる。ぽっかりと開いた瘴気を垂れ流す魔物の口が間近に迫った。

クリムは魔物に向かって走った。

一瞬早く飛びだした黒騎士が、魔物めがけ斧を振りおろした。甲高い乾いた音が響く。わずかに狼狽した様子を見せ黒騎士は飛び退った。

魔物に剣を叩きつけたクリムは、黒騎士の狼狽の理由をすぐに悟った。頭部だろう魔物の先端部分はひどく硬い皮に被われていた。とても刃が通りそうにない。魔物の先端部分には、繊毛が一本も生えていなかった。おそらくは、毛も硬い皮に阻まれ表に伸びだすことができないのだろう。

痺れた手を捩じ伏せるように力をこめたクリムの目の前で、魔物が大きく震えた。サムルンティとハーディのグラビデだ。魔物は躰を地面に擦りつけるように悶え暴れた。

「くっ。このっ。このっ」

魔物に飛び乗ったリッドが、何度も何度も槍を突き立てている。だが、硬い皮に被われた魔物の頭部にはわずかの傷も負わせられていない。

「魔物の頭部を切断する」
叫び、黒騎士が繊毛が生えだしている辺りに斧を振りおろした。
「そうか」
クリムも魔物の上に乗り、剣を突きおろした。リッドも攻撃目標を変更した。
激しく頭を振り、足の下で魔物が暴れる。クリムは突き立てた剣に力をこめ、横へと魔物を裂いていく。筋肉が密集しているのだろうか、刃を突き立てるのは容易だったが、裂くのには予想以上に力が必要だった。刃が少しずつしか進んでいかない。
「これで、終わるんだ。これで、元通りになるんだ」
呪文のように繰り返し、クリムは剣を握る手に精一杯の力をこめた。
不意に、視界の隅で炎と雷が弾けた。ファイアとサンダーの魔法。タイミングがあわなかったのか、二つの魔法はグラビデに合成されずに発動していた。
「いけないっ」
サムルンティの声が聞こえたのと同時に、足下が大きく揺らいだ。魔物が地面に押しつけられていた躰を持ちあげたのだ。急激に競りあがる足下にクリムとリッドは魔物の上で突っ伏した。
「リッド！　クリム！」
イ・リュの叫びが一瞬で遠のいていく。聖域の外へと飛びだした。濃密な瘴気が躰を取り巻く。皮膚が剥がれるような痛みが全身を襲い、肺が焼けるように熱くなった。

魔物はクリムとリッドを振り落とすためにか、激しく躰を左右に揺すった。クリムは咳こみながら魔物に突き立てた剣にしがみついた。リッドも必死の形相で槍を握り締めている。

「おい！　早くもう一度グラビデを！」

「わかってます！　ハーディ！」

「うんっ」

魔物が突然洞窟の壁に躰を叩きつけだした。二度三度と激しい衝撃が走り抜ける。壁が崩れ、剥落した岩が降り注ぐ。

「きゃっ」

「わぁっ」

下方から皆の悲鳴が聞こえてくる。降り注ぐ岩に襲われたのだろう。

「これじゃ、魔法に集中できないよ」

「落ちついて。ひとまず、岩に襲われない場所に逃げるのです」

サムルンティの声が聞こえたかと思うと、急に魔物の躰が反対方向へ振られた。今度は反対の壁が迫ってくる。激突と共にすさまじい揺れが衝撃となって全身を襲う。全身に力をこめ、強く目を閉じたクリムの耳に、剥落した岩が壁を転がり落下する音と仲間たちの悲鳴が響いた。

「くっ、魔法を使わせないつもりか」

忌々しげな黒騎士の声が聞こえる。

さらに魔物が壁に躰を叩きつける衝撃が数度走り抜けた。
「うわっ」
傍らで短い悲鳴がした。顔をあげたクリムの目の前に宙に投げだされたリッドの躰があった。
「リッド！」
クリムは叫び腕を伸ばした。が、手はリッドには届かずむなしく空を掴んだ。叫んだときに吸い込んだ瘴気が肺を焼き、クリムは激しく咳こんだ。
「いやーっ！　リッド！」
「ちっ。間にあえよっ」
「黒騎士！」
「ぐっ」
「おい、大丈夫か」
「あ、ああ……すまない、助かった……」
いくつもの声が遠くに聞こえる。
クリムは剣にしがみついている事しかできなかった。手足の先が振るえ、咳が止まらなくなってきている。目もかすみ始めた。
――このまま瘴気に冒されていくのか……。
ぼんやりと薄れ始めた意識の中でクリムはそんなことを思った。焦点がぼやけにじんだ視界

に、剣を握る手が映っている。小刻みに震え、今にも力を失いそうな手が。

その手首に、ぼろぼろになった腕輪があった。

それを目にした瞬間、脳裡にノアの姿がよぎった。笑顔を翳らせ苦しそうにうずくまるノアの姿が。つづけて家族と村の人たちの姿が浮かんだ。ティパの村の景色が次々と浮かんでは消えていく。見慣れた村の景色の中に、ティダの村の姿が重なった。瘴気に包まれ、菌糸に被われた光景が。いつしか、二つの村の景色が重なり混ざりあっていく。

クリムは強く唇を噛み締めた。

――駄目だ！　諦めちゃいけない！　何とかしなくちゃいけないんだ。何としてでもこいつを倒さなくちゃ。

クリムは考え周囲を見回した。辺りにはリッドが突き立てた槍と、クリムやリッドや黒騎士が刻んだいくつもの傷がある。

――あと少し。もう少しで、こいつの頭部を斬り落とせるかもしれない。

だが、この濃密な瘴気と激しく揺れる足場では斬り刻んでいくことが不可能に思えた。瘴気に冒されているせいで、何度も剣を振る力も残っていない。どうにか一撃でしとめる方法を考えなければ。

「何とかして、魔物の動きを止めるぞ」

「おまえたちは、どうにかしてグラビデを放つんだ」

リッドと黒騎士の声が遠くに聞こえる。魔物の躰が大きく振られた。

クリムは剣にしがみつくように躰を寄せながら、打開策を求め懐を探った。懐の中には、非常食用の干し肉と水が少し。それに、剣を磨くのに使う油の入った小瓶があるばかりだ。

クリムは今一度周囲の傷に目を向けた。

――とにかく、やってみるか。

クリムはリッドの槍を掴んで躰を起こし、自分の剣を魔物から引き抜いた。魔物が躰を壁に叩きつける激しい衝撃にクリムの躰は横に振られた。槍を掴み踏ん張った腕に激痛が走る。食いしばった奥歯から血があふれ、口の中に鉄の味が拡がる。

ゆっくりと息を吐き体勢を戻したクリムは、懐から取りだした油をすべて剣の刃に垂らした。油まみれになった刃はてらてらと光っている。

「サムルンティ！」

意を決したクリムが、叫び立ちあがろうとした時だった。再び激しい衝撃が足下を襲い、クリムの躰は宙に投げだされた。

空中に放りだされたクリムは、魔物に向け懸命に腕を伸ばした。リッドの槍と魔物の姿が見る見る遠ざかっていく。クリムの躰はゆっくりと落下を始めた。それでも懸命に伸ばしていた手が魔物の躰に生えた繊毛を掴んだ。繊毛を掴んだ手に渾身の力をこめ、クリムは落下を食い止めた。

――剣はまだ右手の中にある。魔物の躰はまだ刃の届く距離にある。まだ、剣を振る力

だって残ってる。
「サムルンティ！　僕にファイアを放って！」
クリムは声を限りに叫んだ。
「な、何をいっているんです」
「早く！」
目がかすむ。もう、あまり長いことこうしていられそうにない。頭の中がぐらぐらと揺れている。
熱波が全身を包むのを感じ、クリムは遠のきかけた意識を奮い立たせた。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
絶叫と共に、サムルンティの放った炎に包まれた剣を思い切り魔物の躰に叩きつけた。燃え盛る刃は、驚くほどすんなりと魔物の皮を破り肉を裂いていった。炎が魔物の躰に燃え移る。
剣を振り抜いた瞬間、クリムは全身から力が抜けていくのを感じた。
クリムの躰が滑るように落下を始める。視界の中で炎に包まれ悶え暴れる魔物の姿が遠ざかっていった。
完全に意識を失う寸前、クリムを包んでいた濃密な瘴気が不意に消えた。何かに受け止められる感覚を背中に感じた。急にきれいな空気を多量に吸いこみ、クリムは激しく咳こんだ。そして遠のきかけた意識と感覚が呼び戻される。
目を開けたクリムの視界に、皆の顔があった。

「まったく、無茶しやがって」
「ほんとよ。死んだらどうするつもりだったの」
「まったくですよ」
「でも、これで村も救われるよ。やったね、クリム」
そういってハーディは後方を振り返った。彼の視線の先に目をやったクリムは、全身を炎に包まれ棒のように固まり動かなくなった魔物の姿を見た。
「あ、ああ……よかった……」
クリムは呟きながら、さっきまでとは違う感じの震えを全身に感じた。
「見事だった」
そういって黒騎士が手を差しだした。クリムは躰を起こし、彼の手を握り返した。
その時、大きな地響きが轟いた。戦慄し、クリムは魔物へと顔を向けた。炎に包まれた魔物が全身を暴れさせている。魔物は闇雲に躰を振り回し、あちこちに叩きつけている。衝撃で洞窟全体が大きく揺れている。激しく揺れる壁や天井から岩がぼろぼろといくつもいくつも崩れ落ちてきた。
「くそっ。まだ生きてやがんのかよっ」
「さっきまでとは違うな。完全に自己を失った暴れ方だ」
リッドと黒騎士が身構える。クリムも傍らに落ちた剣を掴んだ。柄を握った瞬間に激痛が走る。先ほどの炎に焼かれ、掌がただれていた。

暴れまわり身をよじる魔物の躰が、突然干からびるように細く小さくなっていく。弱々しく萎え、魔物の躰は、洞窟の奥闇の向こうへと消えていった。

「死んだ、のか……？」

クリムたちは半ばあっけに取られながら、全員そろって洞窟の奥の闇を見つめていた。

不意に足下が大きく揺れだした。

「地震……？　いや、奴が暴れたせいか。くっ、どちらにしろ、こいつはまずいぞ。間違いなく崩れる。皆、走れ！」

黒騎士の言葉に弾かれるように、クリムたちはいっせいに洞窟の出口に向かって走りだした。

しかし、ハーディだけはいきなり見当違いな方へと駆けだしていた。

「何やってんだ、ハーディ！」

「すぐに行く」

そう答えたハーディは広い空間の隅にしゃがみこみ、何かを拾いあげるようなそぶりを見せると、すぐにまた出口の方へと走りだした。

クリムたちは岩の降り注ぐ洞窟を一心に走った。

苦しみも痛みも捩じ伏せひたすらに。

クリムは前方に迫ってきた光の中へ駆けこんだ。

太陽の下に飛びだすと共に力尽き、足をもつれさせクリムは転がるように地面に倒れた。皆も、同じように地面に倒れこんだ。

彼らの傍らで轟音を立て、洞窟が崩れた。岩盤がつぶれ、洞窟は完全に口を閉じた。一帯に立ちこめていた濃密な瘴気もゆっくりと流れ拡散していく。

大の字に地面に倒れたクリムの視界の中で、空も少しずつ少しずつ青い色を取り戻し始めているように見えた。

2

村に戻ったクリムたちを村人たちは盛大に出迎えた。荷車からおりたクリムたちはあっという間に大勢の村人に囲まれもみくちゃにされ、幾人もに肩やら頭やらを叩かれ、いくつもの賞賛の言葉を浴びせかけられた。

「見ろよ、空が青いんだ。青いんだぜ」

「助かったんだよ、俺たちは。ティパの村は助かったんだよ」

「あんたたちだろ。あんたたちが何かやってくれたんだよね」

村人たちは皆、今までにないほど喜び、笑顔の明るさも、賞賛の言葉の量も、これまでのキャラバンの帰還とは比べ物にならないほどだった。

しかしまだ、多くの家は半壊したままだし、作物がいきなりたくさんの実をつけたわけでもない。それでも、間違いなくここ数年に亘って村を被っていた暗い影はなくなった。皆そう感じているのだろう。わずかの翳りも誰の顔にもなかった。

村人たちの喜びの波に飲まれながら、クリムも安堵と喜びに胸をいっぱいにしていた。
「クリム」
やむことのない無数の賞賛の言葉の間を縫って、彼を呼ぶノアの声がクリムの耳に届いた。
クリムは、周囲を取り囲む人たちを掻きわけ、声の聞こえた方へと進んだ。
「ノア！」
人垣の向こうにノアの姿を見つけたクリムは、満面の笑顔で彼女を呼んだ。だが、ノアはクリムと目があった瞬間に目にいっぱいの涙を浮かべた。
「ど、どうしたの、ノア……」
目の前まで歩み寄ったクリムが戸惑いながら尋ねると、ノアはぼろぼろと涙の粒をこぼした。
「だって、クリム。すぐに戻ってくるっていったのに、全然、帰ってきてくれないんだもん。だから、私…」
涙声でいいながら、ノアはクリムの胸に顔を押しつけた。
「心配したんだから」
「……ごめん。でも、もう心配要らないよ。もう、何にも心配いらないんだ」
クリムが背中に手を回し彼女の躰を包みこむと、ノアは胸の中で小さく頷いた。
胸に顔を埋めしゃくりあげるノアを黙って抱きしめていたクリムは、ふと辺りが静まり返っているのに気づいた。気になって周囲を見回したクリムは、村人が皆二人を取り囲みにやにや

と笑っているのを見て狼狽した。

「駄目だよ。そんなにノアを泣かせちゃ」

ハーディの茶化すような声がした。その言葉が堰を切ったように人だかりのあちこちから二人を冷やかす言葉が次から次へと飛んでくる。

戸惑い困り果てたクリムは顔を真っ赤にしながらうつむく。目の前に、同じように真っ赤になってクリムを見あげるノアの顔があった。

二人は互いの顔を見あい、そろって照れ笑いを浮かべた。

3

クリムたちが村に戻ってから十日ばかり過ぎた。

壊れていた村の家のほとんどが、その修復を終わろうとしていた。遅いところでも数日のうちには生活するのに困らない程にはなるだろう。ただ、風車小屋だけはいつ建て直せるかのめどすら立っていなかった。村にある他の家々に比べて巨大で構造も大きく異なる上に、生活上なくて困るものではないという理由から後回しにされてしまっているせいだ。

クラウスは、小麦粉は石臼さえあれば手でも挽けるから慌てて建て直す必要もないだろうといっている。

クリムは運んでいた風車小屋の瓦礫を足下に置き、大きく息をついて汗を拭った。

「クリム」
再び瓦礫を持ちあげようとしたクリムは、呼ぶ声に顔をあげた。ハーディが坂道を駆けあがってくるのが見えた。
「やあ、ハーディ。どうしたの？」
「ちょっと、話があるんだ。面白いもの見せてあげるからつきあってよ」
笑顔でいうハーディに、クリムは小首をかしげた。
「いいから、ちょっと来て」
そういうと、ハーディは強引にクリムの腕を引っ張って歩きだした。ハーディに引かれるまま、クリムは岬の突端までやって来た。
「何、話って。わざわざこんなところまで来て。それに、面白いものって？」
突然のことに戸惑いながらクリムが尋ねると、ハーディは懐に手を入れた。
「とにかく、これを見てよ」
そういってハーディが懐から取りだしたのは、淡い緑色の光を放つ小さな輝石だった。それを目にした瞬間、クリムは驚きに目を丸くした。
「え？　これって……クリスタル？」
「そう。あのリバーベルの谷底の洞窟で見つけたんだ。ちゃんと瘴気を退ける力があることも確認済みだよ」
頷きながらいって、ハーディは破顔した。

「あ、でも、みんなには内緒だよ。イ・リュに知られたらきっと取られちゃうから」
冗談ぽく放たれた言葉を聞きながら、クリムはハーディの顔をまっすぐに見つめた。
わざわざ滅多に人の来ない岬の端まで連れてきたのだ。単にクリスタルを自慢するのが目的ではないだろう。そう思ったクリムは、何となくだがハーディの考えていることがわかったような気がした。
「それで……これからどうするつもりなの？」
クリムが静かに尋ねると、ハーディの表情は真剣なものに変わった。
「黒騎士と一緒に旅に出ようと思ってる」
「そうなんだ」
ゆっくりと頷いたクリムを見て、ハーディが意外そうな顔をした。
「……驚かないんだね」
「ずっと、そんな感じがしてたから。でも、ハーディが黒騎士の力になれるの？　魔物を全部滅ぼすなんてとんでもなく大変な戦いになるだろ」
「ううん、違うよ。魔物を滅ぼしに行くんじゃないんだ」
ハーディはかぶりを振りながらいった。
「僕はね、瘴気を晴らしに行くんだ」
「えっ！　瘴気を晴らすって、どうやって！」
クリムは思わず声を荒らげてしまった。あまりに予想外の言葉だった。

「まだわかってない。正確な方法はまだこれから探すんだ。でも、ジャック・モキートの館から持ってきた本にいろいろ気になることが書いてあったから、それを元に探せば間違いなく見つかると思うんだ」

そういってハーディは空を見あげて笑った。

クリムは遠い場所を眺めているハーディの顔をじっと見つめた。

簡単にいうが、どう考えてもたやすく成し遂げられることではないだろう。いや、むしろ不可能だといってしまってもいいかもしれない。瘴気を晴らすなんて言葉は、クリムにはただの幻想だとしか感じられなかった。

それでも、クリムはハーディを止めようとは思わなかった。

「……いつ出発するの」

「うん。うちの方もほとんど片付いたからね。今日の夜中には出発しようと思ってる。みんなが寝ている間に、誰にも見られないようにさ」

空を見あげたまま返された答えに、クリムは息を飲んだ。

「だから、クリムだけには挨拶しておこうと思ってね。僕の一番の友だちだから」

「なんで、そんなに急なのさ。明日の夜にはお祭もあるんだよ。その後でもいいじゃない」

クリムが詰め寄るとハーディは苦笑した。

「だって、村の窮地を救った僕たちを讃えて村の復活を祝おうってお祭だよ。これから村を捨てて旅立とうとしてるっていうのに、そんな場所に出られるわけないじゃない。それに、そん

なふうに祝われたら、決心が鈍るかもしれないからね」

クリムは返す言葉が見つからず、ただ黙ってハーディの顔を見ていた。

「それじゃ、僕は行くよ。じゃ、またね」

笑顔でそういって、ハーディはクリムに背中を向けた。しばらく茫然と遠ざかるハーディを見送っていたクリムは、大きく息を吸いこみ彼の背を追って数歩駆けた。

「またねっていったよね。絶対、帰って来てよ。約束だからね」

クリムの声に、ハーディは振り返らずに手だけ振った。クリムは見えなくなるまで、彼の姿をずっと見送った。

4

クリスタルを取り囲むように設けられた数段の石段にクリムは立っていた。リッドもイ・リュもサムルンティも並んで立っている。

クリムたちの目の前では村長が、広場に集まった村中の人たちに向かって熱い弁舌を振るっている。

「やっぱ、こういうのはさすがに照れるな」

自分たちを取り囲むように集まっている村人たちを見渡し、リッドは照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

「水かけ祭の時は、みんなが見てんのはこのクリスタルだろ。それなのに、今はそれと同じ目であやって俺たちを見てんだぜ」

恥ずかしがっているのか得意がっているのか、リッドの頬は緩んでいた。

「で、何で、ハーディはいないのよ。まったく。来なくっていいんなら、あたしだって逃げたかったわよ。こんな恥ずかしい場所」

イ・リュは、居心地が悪そうにもじもじと身をよじらせていた。

「来てないんじゃなくってよ。いなくなったみたいだぜ、ハーディの奴」

そういって、リッドはわずかに顔をしかめた。

「はっ？　何それ」

「よくわかんねえよ。どこ探してもいないって大人たちが騒いでて、ハーディの親父さんとか村長が村にはいないとかって簡単な説明してたの聞いただけだし」

「村にいないって、どこいったのよ」

「だから、知らねえって。オレだって知りたいよ」

「そういえば、黒騎士の姿もなくなってませんか」

「……旅に出たよ。二人で」

クリムは、無数の星が瞬く空を見あげ答えた。

リッドたちが驚きの顔をいっせいにクリムに向けた。

「なんで？」

「瘴気を晴らすんだって。そのための旅に出るんだって、ハーディはいってた」
クリムは目を細めた。遥か上空を漂う瘴気の流れが宵闇の中にぼんやりと見える。
「そいつはまた、なんていうか……」
「ハーディらしいですね。見ている場所が私たちとは大きく違っている」
「ま、ただの夢見がちの馬鹿って可能性の方が大きいと思うけど」
「かもしれないね」
クリムたち四人は、互いに顔を見てくすくすと笑いあった。
「……って、ちょっと待って」
急にイ・リュが顔をしかめた。
「旅に出たって、どうやってよ」
とがめるようなイ・リュの目に見つめられ、クリムは頬を掻いた。
「ハーディが見つけたんだよ、クリスタルの欠片を。あのリバーベル街道の洞窟にあったんだっていってた」
「はぁっ！　何それ。何でハーディがそんなもん見つけてんのよ。わたしだってまだ見つけてないのに」
「そりゃ、見つけらんなかったおまえが悪いだろ」
「だって、あんなとこにあるなんて思わないじゃない。だいたい、あの時ってそれどこじゃなかったでしょ」

イ・リュは悔しそうに地団駄を踏んだ。
「あーもう。なんで早くいわないのよ。もう一回、あの洞窟に行くわよ。今度こそ、あたしも見つけてやるんだから」
「無茶いうなよ。それに、あの穴は埋まっちまっただろ」
リッドの言葉に、イ・リュは唇を大きくゆがめて唸った。
「いくつもの危険を乗り越えミルラの雫を持ち帰り村を守ってきた我らの誇りたるキャラバン。その歴代のキャラバンの中にあって、彼らは今までにない大きな働きを成し遂げた。突如発生した濃密な瘴気という未曾有の危機を打ち破り、村を滅亡の危機から救ったのである。それでは、皆の者。今一度、我が村の若き英雄たちに盛大なる賛美を」
大きく手を掲げ発せられた村長の言葉と共に、広場に集まった村人たちの中からいっせいに歓声と拍手が巻き起こった。クリムは照れくささを感じながら手をあげ、彼らの声に笑顔で答えた。
「よかったよな。みんな喜んでる。オレ達、村を守ったんだぜ」
感慨深げに呟いたリッドが、不意に真剣な顔をクリムに向けた。
「でも、ここまでやってこられたのも、クリムがいてくれたからだな」
「えっ、ぼく？」
「ああ。おまえがいてくれなかったら、絶対にこんな風に、まとまれなかったよ。きっと大きなケンカでもして、ばらばらになってたんだろうな」

「ええ。そんな気がします」
「そうそう、リッドのわがままに振り回されてね」
「おまえが言うなっての」
そういって急に笑い出した仲間たちを、クリムは目を白黒させながら見つめていた。
村を揺るがすほどの歓声と拍手の音は、いつしか喜びの歌と宴の喧騒へと姿を変えていった。
踊り騒ぐ人たちの間を歩きながら、クリムはまた夜空を見あげた。
正直いって、瘴気を晴らすという考え方がクリムには理解できなかった。瘴気はそこにあるものだ。昼の空に太陽があるように、夜空に無数の星が瞬くように、世界の大気に瘴気が満ちているのはあたりまえのことなのだ。瘴気を晴らすというのは、太陽を落としたり星を手に掴んだりしようとするのと同じことだとしか、思えない。とても遠く困難で、馬鹿げているとしか思えない考えだ。
ハーディというのは、物語が好きで好奇心が服を着て歩いているような人間だった。他人とは大きく異なるものの見方をする人間だった。現実と空想の境界も他人とは少し異なっているように感じられた。
それでも、ハーディが何の根拠もなしに妄言を吐く人間でないことをクリムは知っている。何の光明も見えていない旅に出るほど愚かではないことを知っている。
だから、きっと、ハーディは本当に瘴気を晴らせると思えたのだろう。そこへ伸びる道がお

ぼろげにでも見えてしまったのだろう。だからこそ、旅立ったのだ。

しかしそれは、クリムにはどうしても見えない道だった。

クリムは長い吐息をこぼし、宴に沸く村人であふれかえった広場を見回した。

――だから、ぼくはぼくに見えてる道を進むよ。この村を守っていく。みんなの笑顔が耐えることがないように。ぼくはここで頑張っていくんだ。

「クリムーっ」

人ごみを掻きわけ、ノアが手を振りながら駆け寄ってきた。満面の笑顔で近づいてくるノアの姿に、クリムも顔をほころばせた。

「きゃっ」

慌てて駆けてきたせいかノアはつまずき、前のめりにたたらを踏んだ。

クリムは倒れかかってきた彼女の躰を胸に受けとめた。

「危ないなぁ」

「ごめん。ちょっとはしゃぎすぎちゃったみたい」

胸の中で顔をあげたノアは頬をわずかに赤くしながら照れたように笑った。

苦笑を返したクリムの背後で、広場で演奏されている音楽の曲調が変わった。弾けるような陽気な舞踊曲。

クリムはちらりと音楽の流れてくる方を振り返り、すぐにまた笑顔をノアに向けた。

「踊ろう、ノア」

クリムの言葉にノアは目を丸くした。
「え？　でも、わたし踊ったことないし」
「うん、ぼくもない。でも、いいじゃない。きっと、何とかなるよ。ほら、行こう」
戸惑うノアの手を取り、クリムは踊りの輪の中心へと駆けだした。
歓喜の声にあふれた宴は一晩中つづいた。
広場の中心ではクリスタルが碧く輝き、ティパの村と喜びに沸く村人たちをいつまでも照らしつづけていた。

エピローグ

クリムは広場の隅に腰をおろし、宵闇に碧く浮かびあがったクリスタルを眺めていた。たった今水かけ祭の儀式で清められたばかりのクリスタルは、強い輝きを放っている。

濃密な瘴気が村を被った事件から何年の時が流れただろう。

麦畑はまた昔のように一面黄金色の穂であふれかえるようになった。リンゴもぶどうも元気に実をつけている。川や海にはたくさんの魚たちが戻ってきた。何もかもが元のとおりに戻っていた。

クリスタルに守られ、瘴気の中で暮らしていく平和な生活が変わらずにつづいている。

クリムは膝の上に広げたキャラバンの年代記に視線を落とした。

そこには、二年前に解散したクリムたちのキャラバンの旅のできごとがいくつも記されてある。

訪れた町や村のこと、戦った魔物のこと、出会った人たちのこと、サムルンティが記した永久魔石の生成法や、ゲイルが旅の仲間に加わったこと、彼がキャラバンを抜けたことも書かれてある。もちろん、村を襲った災厄のことや、リバーベル街道の谷底の洞窟にいた巨大な魔物のことも。

あまりにいろいろなことがあって、すでにはっきりとは思いだせない事柄もいくつもあった。

それでも、眺めていると懐かしさはしっかりとこみあげてきた。
クリムはゆっくりと年代記を閉じると腰をあげ、広場で騒ぐ人たちを見た。
人垣の中心には、多くの村人たちに囲まれ投げかけられるいくつもの賞賛と労いの言葉に、照れ笑いを浮かべたり誇らしげな顔をしている若いキャラバンのメンバーがいる。
この二年間クリムは彼らと共に旅をし、いろいろ教えてきた。もう彼らだけでもキャラバンとして立派にやっていけるだろう。
そして、これからは彼らが書き足していくのだ。クリムたちが記してきた旅の記録のつづきを。代々のティパの村のキャラバンに受け継がれてきた年代記——クリスタルクロニクルを。
クリムは、若いキャラバンメンバーたちの名を呼んだ。

おわり

あとがき

何か、ばたばたとしている間に、年の瀬が押し迫って来ています。というか、この文章が読まれている時には、すでに年が明けてしまっていますか。

えっと……あけましておめでとうございます。

ん？　それすらもびみょうに時期はずれな挨拶ですか？

まぁ、よしとしましょう。

前半はひどくのんびりと過ごしていた二〇〇三年だったのですが、この本に取り掛かることになってからの数ヶ月は驚くほどいろいろなことがありました。

担当さんが替わったり、三十代になってしまったり、パソコンが壊れたり。

いや、もう、大変でした。夏なんて、もう遥か遠い昔です。

世界水泳とか世界陸上とか、まだ半年ちょっとしか経ってないんですよね。びっくりです。

『小説ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル　小さな村の年代記』いかがだったでしょうか。

少しばかりオリジナル色が強くなっていますが、ゲームに登場した魅力あふれるキャラクタ

たちを活かせる物語をと思って、こんな形にしました。
とりわけ、ハーディ（ガーディ）と黒騎士の物語はよい形で描けたのではないかと。
その代わり、ゲーム中に登場したエピソードの数々を小説として書くことができなかったのが、個人的には残念だったりするんですけど。アミダッティのいなかパンの話とか、すっごい好きなんですよ。
ともあれ、この物語が読んでくれたあなたに気に入ってもらえたのなら、幸いです。

さて、この場を借りていくつかのお礼を。
クリスタルクロニクルを生み出してくれたゲーム開発スタッフの方々。この本に携わってくれた人たち。ぼくの活力となってくれている家族や友人、知人たち。
すべての人に感謝と敬意を。

そして、何よりもこの本を手にとってくださった皆様に、大いなる感謝をこめて。

それではまた、どこかで。

二〇〇三年末　梅村崇

小説刊行によせて「風の音の聞こえる小説」

片岡正博

小説『小さな村の年代記』は、ゲームのファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル（以降、ＦＦＣＣ）で扱った時代の、ほんの少し前のお話しです。ゲーム本編とは異なる時代ではありますが、実際にプレイされた方なら、クリムたちの活躍に自分自身の体験を重ね合わせることが、容易だったであろうと思います。キャラバンとして旅立った当時を思い出し、きっと、胸を躍らせながら読むことができたのではないでしょうか。

原稿を手にした12月某日、仕事の合間を縫って喫茶店へ篭り、小説を読みふけりました。まだ挿絵が半分ほどしか出来上がっていなかった頃です。読み始めた頃はＦＦＣＣの世界を少しずつ思い出しながら、そして中盤に差し掛かると、その記憶は、より確かなものとなり、次第に掘り起こされた思い出とシンクロナイズされていきました。そういえば確かに、何度もモキートの館へ行くと、悪い気がしてならなかったなぁ…などなど。最後では、はたしてティパの村は救われるのだろうか、そして、クリムとノアの行く末は⁉と、完全に小説の世界に呑み込まれてしまいました。読了した頃、鳥居氏の挿絵がすべて仕上がっていました。そこには、小説を読んでいた時に、思い描いていた、そのまま絵が描かれていました。

少しだけ話をゲーム本編に移します。ＦＦＣＣの物語は、『浮き彫り』の手法で綴られた物語です。特に筋道を立てないようにしましたので、その中には、一本の物語といったものは存

在しません。ですが、最後までプレイされた方でしたら、おそらく心の中に、ひとつの物語が出来上がっているのではないでしょうか。随所に散りばめられた様々な種を拾っていくと、それが、成長して一本の大樹となっていくような作りになっています。養分はプレイヤー自身だと言えます。成長した大樹はプレイヤー独自の、世界でひとつだけの物語となります。とりもなおさず、その物語の数は、プレイヤーの数だけ存在すると言えます。

この小説も、そういった数多くある物語のうちのひとつだと言えます。ですが、躍動感あふれるバトルの描写、そして、心の奥深くまで描いた文章には、数多くのプレイヤーが共感することでしょう。私にとっても、自分自身のプレイを再現するかのような出来事が、臨場感たっぷりに綴られていました。リバーベル街道の水の匂い、ジャック・モキートの鼻息、ティパの村の風車に当たる風の音などを感じ取ることができました。そういった事柄を思い出しながら、読み進めると、あたかも実際にティパの村に住んでいたかのような錯覚に見舞われました。

梅村氏の生み出す、このひとつの素晴らしい物語が、多くの方の共感を呼び、そして、プレイヤーの思い出がいっぱい詰まった、それぞれの物語を思い出していただくきっかけになればと、切に願っています。

片岡 正博（かたおか　まさひろ）
株式会社スクウェア・エニックス第2開発事業部所属。ＦＦＣＣではイベントディレクターとして参加。世界設定、シナリオの主だった部分を担当。主題歌の作詞なども手がけている。

GAME NOVELS

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES
小さな村の年代記

2004年2月6日　初版第一刷発行

原作：FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES
©2003 THE GAME DESIGNERS STUDIO,INC.
FINAL FANTASY is a registered trademark of SQUARE ENIX CO.,LTD.
CHARACTER DESIGN/Toshiyuki Itahana
☆本作品は上記原作をもとに作られたオリジナルストーリーです。

著者：梅村崇
©2004 TAKASHI UMEMURA

発行人：田口浩司

発行所：株式会社スクウェア・エニックス
〒151-8544　東京都渋谷区代々木3-22-7　新宿文化クイントビル3階
出版営業　03-5333-0832
書籍編集　03-5333-0879

印刷所：加藤製版印刷株式会社

乱丁、落丁はお取り替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

2004 SQUARE ENIX
Printed in Japan
ISBN4-7575-1096-9 C0293

Author

著者：梅村 崇

73年10月生まれの天秤座。神奈川県に生まれ、その後、愛知、宮城、京都、大阪、奈良と転々とする。現在は東京都内、水泳の北島康介くんの実家近くに在住。節操がないほどにミーハーで、かわいいものにひどく弱い。本書は、記念すべき10冊目のゲームノベライズである。

FINAL FANTASY CRYSTAL CHRONICLES

©2003 THE GAME DESIGNERS STUDIO,INC.
FINAL FANTASY is a registered trademark of SQUARE ENIX CO.,LTD.
CHARACTER DESIGN/Toshiyuki Itahana

9784757510968

ISBN4-7575-1096-9

C0293 ¥933E

定価:本体933円+税

1920293009339

SQUARE ENIX.